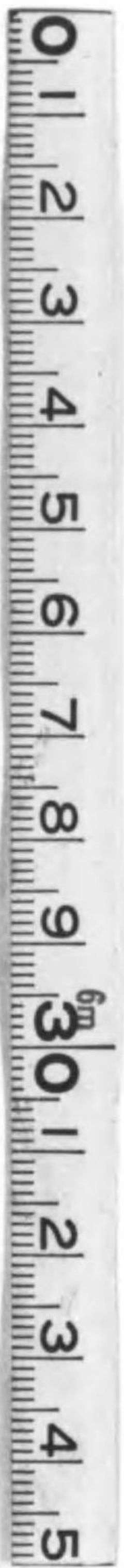


443
163

華有
巡錫



始



持223
348

目次

發刊の辭	一
華南巡錫に就て	二
はしがき	三
南支密教の懷古	四
權田雷斧大僧正	五
王弘願氏	六
洪兆麟將軍の入信	七
黎乙真大阿闍梨	八
平岡貞氏	九
戸川開教師の派遣と佐々木大僧正巡錫	一〇
管長代理派遣計畫が決定する迄	一一
準備期間	一二
壯行式	一三
東京出發	一四
乗船	一五
基隆上陸	一六
台北	一七
台灣の宗教行政に就て、高野山別院	一八

汕頭行便船を擁む	一九
國語を護れ	二〇
基隆出帆	二一
汕頭、汕頭上陸	二二
我等の宿舍	二三
汕頭地區事變前の事情	二四
歡迎會	二五
戸川開教師の苦心	二六
開教挿話	二七
小松部隊長	二八
汕頭密教重興會歡迎	二九
王弘願先生遺弟の動靜	三〇
陳天助氏	三一
眞言宗管長代理現下滯汕間日程	三二
汕頭灌頂修行	三三
日華兩國人の信仰比較	三四
何故密教が發展するか	三五
郷族と祖廟	三六
中山公園	三七
中國の文化	三八



說誠師王大依氏	一四
許少榮市長の招待會	一五
汕頭灌頂結願、救濟院見學	一九
居士の優秀性と其の動向	二〇
中國僧俗に告ぐ	二四
日華陣歿者追悼並和平快樂萬華法要	二三
潮州に就て	二七
潮州に於ける灌頂	二九
潮州の開教事情	三三
日語學校	三四
扇谷開教師	三六
韓江亭の一夜	三八
中國の青年と其の思想	三〇
開教エピソード	三四
潮州慰靈祭、潮頭出帆	三五
廣東上陸	三六
解行精舍	三九
廣東現地廻向	四〇
南支密教と平岡さん	四三
廣東雜感	四四

開教の根本方策	一三
廣東よ！さらば	一六
香港入港	一七
香港居士林	一八
總督部の厚意	一九
現地廻向	二五
灌頂修行	二五
十九日の夜	二七
船待	二九
ヤム茶	三〇
香港雜感	三一
雜感	三二
解しかねる心持	三三
居士林の事	三三
戸川師の念願	三三
海員の努力	三八
後記	四〇
佐々木大僧正御巡錫後日物語	四九
中國密教復興後援會の結成	四九
私の希望する中國の開教	四九

本書發行に就て

この記録は單に佐々木大僧正の南支巡錫記録として編纂したばかりでなく故權田老大僧正が大正十三年渡支され中國開教に手を染められて後眞言宗が多年中國開教に傾倒して來た開教史とし南支開教の總締め括りをなしその全貌をつかんで頂き度いものと佐々木大僧正の巡錫を中心として多岐に亘つて記録した譯である。

本書刊行に當つては宗務當局の内外御盡力を得て漸くその完成を見たものであつてこの點宗務當局並に關係各方面に篤く御禮申上げる次第である。特に前述の如く眞言宗南支開教記録である點に御留意の上御判讀を願ひ度

華南巡錫に就て

佐々木教純

本年二月十日、時の眞言宗興亞部長中村教信僧正來山せられ、目下南支汕頭潮州を中心として香港、廣東方面に於て戸川憲戒開教師が日夜懸命に日華親善の爲めに密教を通じて奮闘努力せられつゝあるが、先年權田雷斧大僧正が彼の地に渡られ、潮州王弘願、香港黎乙眞居士等のために灌頂を開壇せられ、權田大僧正の依囑に依り中國密教重興會なるものを創設し、支那事變前までは相當の會員を有し活躍せられつゝありしが、支那事變勃發と共に蔣政權の彈壓が加はり會員も亦支離滅裂となり殆んど解散同様になつたことを聞き、昨年六月戸川憲戒僧正を南支開教主管として派遣したるに、再び捲土重來の勢を以て復興し來れることを同氏よりも通報あり、又汕頭領事高井末彦氏よりも外務大臣へ報告がありましたので事情が判明したのであります。そこで權田大僧正の法脈を繼げる阿闍梨を派遣せられ、密教重興會の復興を計られ度しとの希望を有する會員多數これ有るにつき、是非貴僧をして管長代理として巡教せられ度き旨の交渉があつた。拙納が些かでも國家の爲めにお役に立つなら何時でも参りませうと、即座にお受けしたのが今回南支巡錫の因縁であります。而して管長親下より、中國密教重興會に於ける受明灌頂、結縁灌頂修行のため南支派遣の辭令を受けた譯であります。

大本山護國寺住職 大僧正 佐々木教純
 中國密教重興會ニ於ケル受明灌頂結縁灌頂修行ノ爲メ
 管長代理ヲ命ス
 昭和十八年二月十九日
 眞言宗管長大僧正 齋藤隆現 團

次で左記六名の隨員を銓衡し管長の任命を得たのである。

隨員	
東京市江戸川區小岩町十念寺住職 大本山護國寺執事	權中僧正 田中 恭盛
新潟縣西蒲原郡國上寺住職	權中僧正 山田 鏡阿
東京市下谷區中根岸千手院住職	權中僧正 中 義乘
同 淀橋區柏木圓照寺住職	少僧正 篠山 明信
同 四谷區若葉町東福院住職	少僧正 杉本 良智
德島縣德島市寺町源久寺住職	權少僧正 岡村 儀雄

更に四月十二日附を以て第一線に於ける皇軍將兵の慰問使を命ぜられた。

皇軍慰問使ヲ命ス
 大僧正 佐々木教純
 昭和十八年四月十二日 眞言宗管長大僧正齋藤隆現 團

大正十三年六月大僧正權田雷斧大阿闍梨が小林正盛、小野塚與澄僧正等十二名の隨員を引率して潮州、香港に於て灌頂を修行せられたる由來を概説して、今回拙稿が南支へ渡り第二回目の灌頂を修行することになりました因由を述ぶることにしよう。

權田大阿闍梨は、曩に「密教綱要」と云ふ著述を刊行せられた、それが直ちに潮州の王弘願と云ふ密教研究者の手に入り、中國の時文に翻譯せられて同志に頒布せられたのである。密教は只研究をするといふことだけでは意味を爲さぬ、明師の相承を受けて是れを實地に修行して始めて其効果が顯はれるのである。若し之を無視すれば越三昧耶の罪を免がることが出来ぬことを王弘願も能く承知して居る、それ故に權田大阿闍梨を潮州に招請することになつたのであります、權田大阿闍梨は其時既に七十九歳の御高齡に達せられたのであります、不惜身命の御精神を以て、密教重興の爲め御巡教遊ばさるゝこととなつたのであります。

南支汕頭、潮州方面は其當時既に排日侮日の熾烈なる處にして、一行に於ても相當の危険を感ぜられたのである、潮州には王弘願と志を同じうした、潮梅兩軍司令官陸軍中將洪兆麟といふ將軍ありて、權田大阿闍梨を招請して潮州市開元寺に於て密教の灌頂を修行するに當り、自分の邸宅に大阿闍梨の一行を招待し、日夜軍隊を以て護衛せしめ、「我が師權田雷斧阿闍梨一行に對し不敬に渡る行爲ありたる者は嚴罰に處す」と云ふ佈告を出して一行を守護せられたとのことである。當時潮汕地區に於て權田大阿闍梨の灌頂に入壇受法せられたる弟子は七十二名に達したのである。

又香港に於ても、同じく密教の研究者である黎乙眞なるものあり、權田大阿闍梨が來潮せられたるを聞き、特に權田大阿闍梨一行を招聘して、灌頂の密壇を建て入壇受法せられたのである。

翌大正十四年春前記潮州王弘願居士を始め、香港黎乙眞居士、上海の程宅安居士、廣東の曼珠伽詩、慧光法師等と共に我が國に渡來し、紀州眞言宗大本山根來山大傳法院に於て、雷斧大僧正を大阿闍梨として、小野塚與澄僧正等の指導に依り、大傳法院流に依り、十八道等の加行を成滿し、祕密灌頂の壇に入り、雷斧大阿闍梨の法燈を相承して、歸國の上、汕頭、潮州を中心として、香港、廣東等に於て密教重興會を結成し、相互に會員を獲得して、中國に於ける眞言密教の重興を企圖し大に教勢を張り、宛も燎原の火の如く熾んに弘通し、信徒亦た數萬に及び、汕頭、潮州、廣東香港等に道場を設立し、各其隆昌を極めて居つたのである。

然るに昭和十二年七月支那事變勃發し、日本佛教を信奉する者は好漢なりとのことで、非常なる大彈壓を受け、信徒又各地に離散するの已むなきに至り、遂に大東亞戰爭となつたものである。

宗教に國境なしと申しますが、事實その通りであります、汕頭同平路に三階建の密教重興會の會堂があります、其の三階が密教の道場で、金胎兩部の曼荼羅を掛け、大日如來を本尊とし祕密の壇場を建立して、朝夕修法三昧に入るのであります、そこには日本の弘法大師や密教重興會の初祖雷斧阿闍梨の肖像を飾り、朝夕禮拜讀經を爲し供養を怠らなかつたのであるが、事變後は成るべく他人の目に立たぬ様に擬装をこらし、祕かに香華を手向け讀經廻向して居つたのである。

然るに昨年六月戸川憲戒氏が南支開教師として赴任し、直ちに汕頭領事館に至り、當地に密教重興會なるものがある筈だからと案内を乞ふた、處がそんなものは無いと一向取合つてくれぬ、否や必ず有る筈だから是非探してくれと頼みました爲め、警察部の人々と共に調査せし處、汕頭市同平路一〇六號に嚴存しあるばかりでなく、信徒が祕かに香華を

絶やさず日々参拜しつゝあることの事實に驚いた。

權田雷斧阿闍梨が大正十三年灌頂を執行されて以來十八年間も密教重興會道場として存在してあるのである。其當時から排日侮日の熾烈なる迫害にも克く耐へ得て、嚴然として存在し得たことを發見した時は、何れも宗教ならでは此の如き貴き姿を見ることが出来ぬであらふと感嘆した。

爾來、領事館は勿論、軍官を始めとして、居留邦人等期せずして戸川開教師を後援することとなり、日々中國人の會員が多數復活し來りて、再び昔日の盛況を見る様になつたのであります。大東亞戰爭に於て一番大切なことは思想戰であります。特に日華兩國國民は身心共に一體となり、大東亞共榮圈の樞軸とならなければ健全なる共榮圈の確立は困難である。一ト口に日華親善を唱導せられますが、形式的の親善は得られますが、心からの親善は頗る困難な事業であります。此の密教思想を透して相互に魂と魂との結合が出来るのが、これが眞實の日華親善であらねばならぬ。

x x

如上の事由に依て、今回拙衲が巡錫することとなり、南支各方面に於て、受明灌頂、結緣灌頂を修行し、又皇軍の慰問をなし、護國の英靈に對しては追悼の誠を捧ぐることを得たのは、是れ偏に皇恩の萬一に酬ひ奉ることを得たるを欣快とするものである。

今回汕頭潮州に於て、約一千名の入境受法者がありました。其中十名内外が日本人にして其他は全部が中國人であり、彼等の其信仰を求むる態度は實に眞剣である。一度入境受法して弟子になれば必ず五体投地の三禮をする、土間であらうと、道路であらうと必ずやる、是れを受ける方の老衲なども聊か恐縮せずには居られない、華僑がサイゴンから灌頂のあるの聞き馳せ参じた者もある。又敵地區から危険を犯して入境受法せるものも澤山にある、此の如き類

例は鮮少では無かつた、是れを以て見るも如何に彼等が信仰を求めてゐるかを知らることが出来るのである。御承知の通り、中國は革命又革命で、人心の安立と云ふことが出来ず、その爲めに信仰を求めて安心立命を得様とするのも一因であります。併しそれだけではない、彼等の心底には中國民族として、即ち國民性として、或る種の神祕性を保有してゐる、そこに密教の特有たる神祕性に感應して、現世の安穩と即身成佛とを得様とする心魂の發露であると觀察することが出来る、我々密教人から申しますと我田引水に觀られますが、決してそうでないことを現に證明してゐるのである。

又廣東に於ても、有名な六榕寺境内にも密教道場がある、現に本堂、護摩堂、經堂、講堂等の諸堂伽藍が完備してゐる、是等も相當の布教師が駐在するならば、事變前の盛況を取り戻すことが決して難事ではない。

香港に於ては、黎乙眞居士の經營にかゝる、男居士林と女居士林の二ヶ寺がある、胡文虎の別荘の麓で光明臺と稱する頗る眺望絶佳の處に堂々たる三階建の會堂がある、男居士林の方は戸川師が汕頭より兼務をしてゐる、女居士林の方は、黎乙眞の未亡人張圓明氏が、大東亞戰爭勃發直前廣東に避難して居られたが、戸川師の斡旋に依り此程歸香して主任となつてゐる。

今回香港に於ては準備の都合上結緣灌頂を修行致しましたが、受者は百四五十名に過ぎなかつた、これは張圓明氏も不在だし、戸川氏も居らず、男女居士林共に主任の缺けて居つた爲め已むを得ざることと思ふ。亦汕頭、潮州、廣東、香港等に於て皇軍の慰問を爲し、護國の英靈に對しては各方面に於て追悼法會を営み、殊に日華兩軍の大東亞戰爭の礎となられた將兵に對して、怨親平等の佛陀の慈懷に立脚して、合同の慰靈法要を執行して、日華一心同體の誠を捧げ彼我共に感涙にむせび、潮州に於ては田中司令官閣下小松都隊長等の燒香があり、香港に於ては總督部より二臺の自動車に二日間貸與せられ、山から山、谷から谷へと香港島及び九龍方面の戦跡を巡りて懇ろに回向を捧げたのであります。

x

x

我々は、佛教の弘通のためとか、密教宣布のためとかに南支の巡教をしたわけではありません。現に開教に當つてゐる戸川氏もそうであるが、眞言宗と云ふ様な峽義の布教ではない、眞に國家のため、日華親善のための布教である。現に第一線に於ては各宗派何れも眞剣に布教に従事して居ります、而して側ら幼稚園、日語學校、病院、其他社會事業等を經營して何れも相當の成績を擧げて居りますが、第一の眼目であるべき布教に於ては、只單に邦人居留民を對手として一人の中國人をして入信せしむることが、非常に困難を感じてゐるばかりでなく、實際に其成績を擧げて居らぬ。此の點現地の軍官民共に遺憾に存じてゐる次第である。

然るに、我が密教復興會は眞言宗に所屬してゐるが、現地に於ては宗派を超越して單に密教として直ちに中國人に接觸してゐる、茲に中國人としては各宗に見られない特別な信念を以て密教を信仰して來る所以でないかと思はれる。

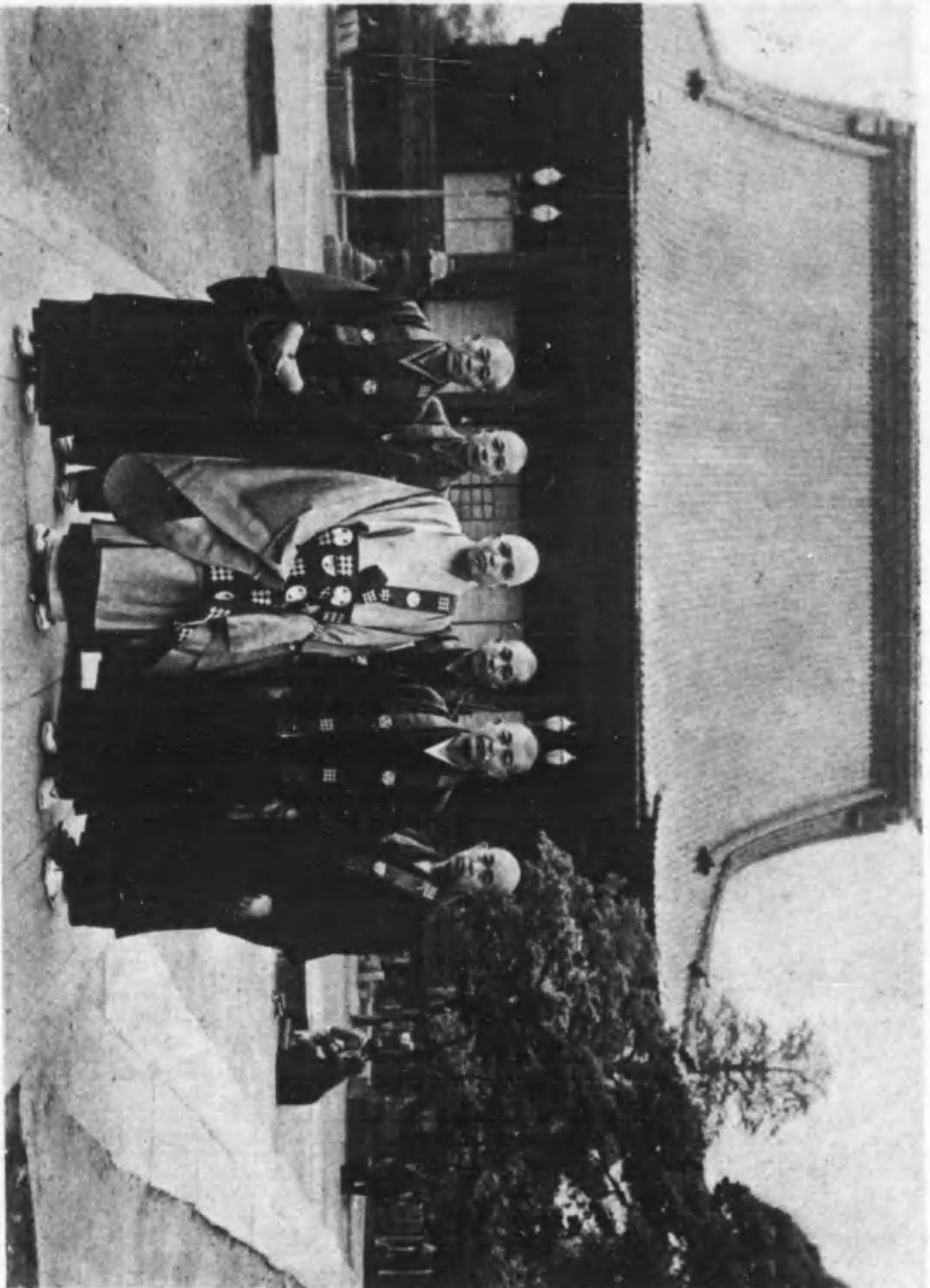
以上所感の一端を略説し、以下亦我等一行の直接中國人に接觸したる概要を述べるのである、聊か日華親善の爲めに参考ともならば幸甚の至りである。



正僧大純教本々佐祖二興重教密國中



正僧大空雷田權祖開興重教密國中



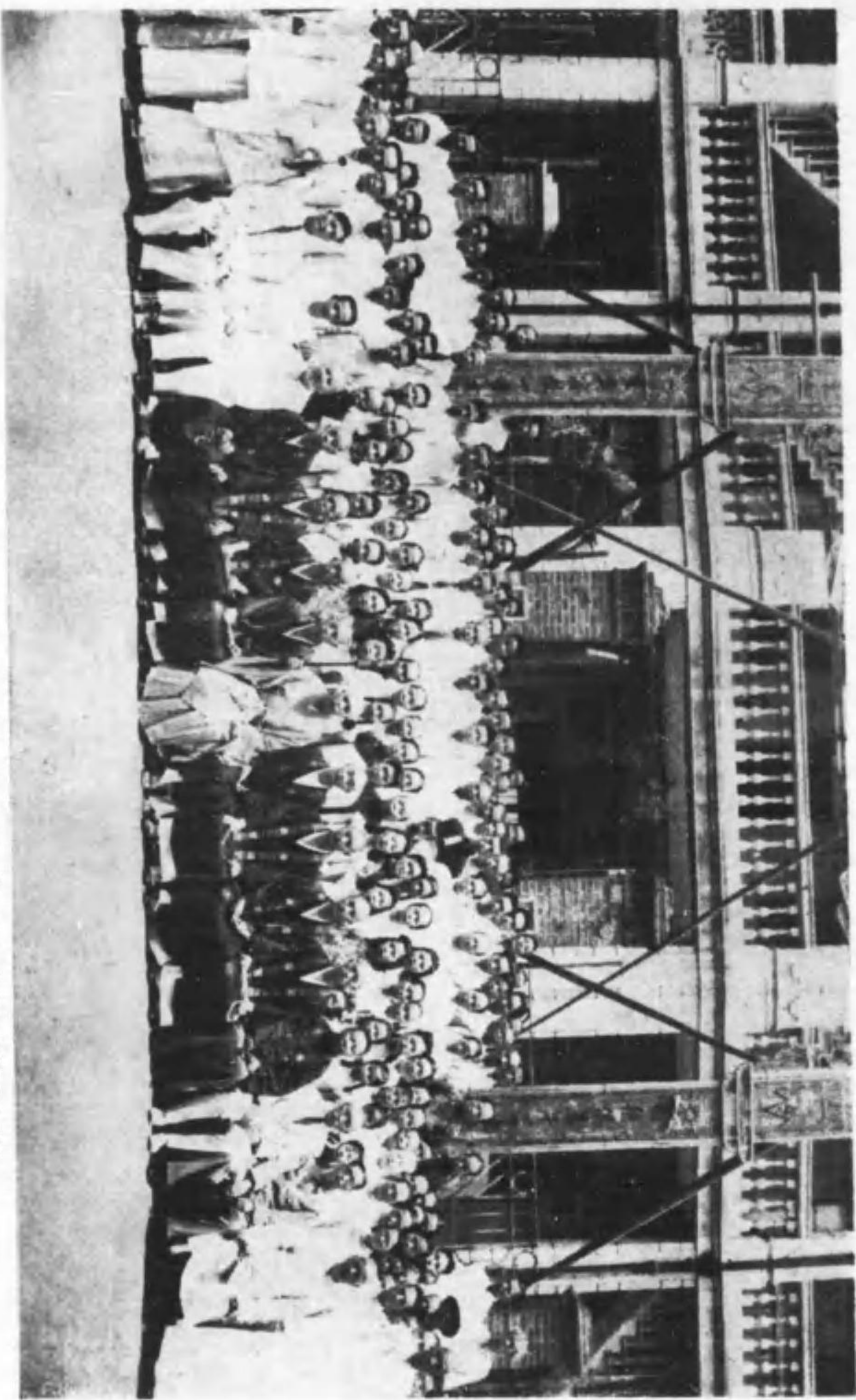
(日八十二月四) 影撮念記行一後式行壯テニ前堂本寺國護



(正僧大木と佐ハルテ立) 式行壯ルケ於ニ堂本寺國護



(日三十二月五) テツ終拜參式正ニ社神頭油



日五十二月五 (ヲ = 館會菜同頭油) 影撮念記會迎歡催主會興重教密頭油



(一ノ共) 列進へ場道頂灌



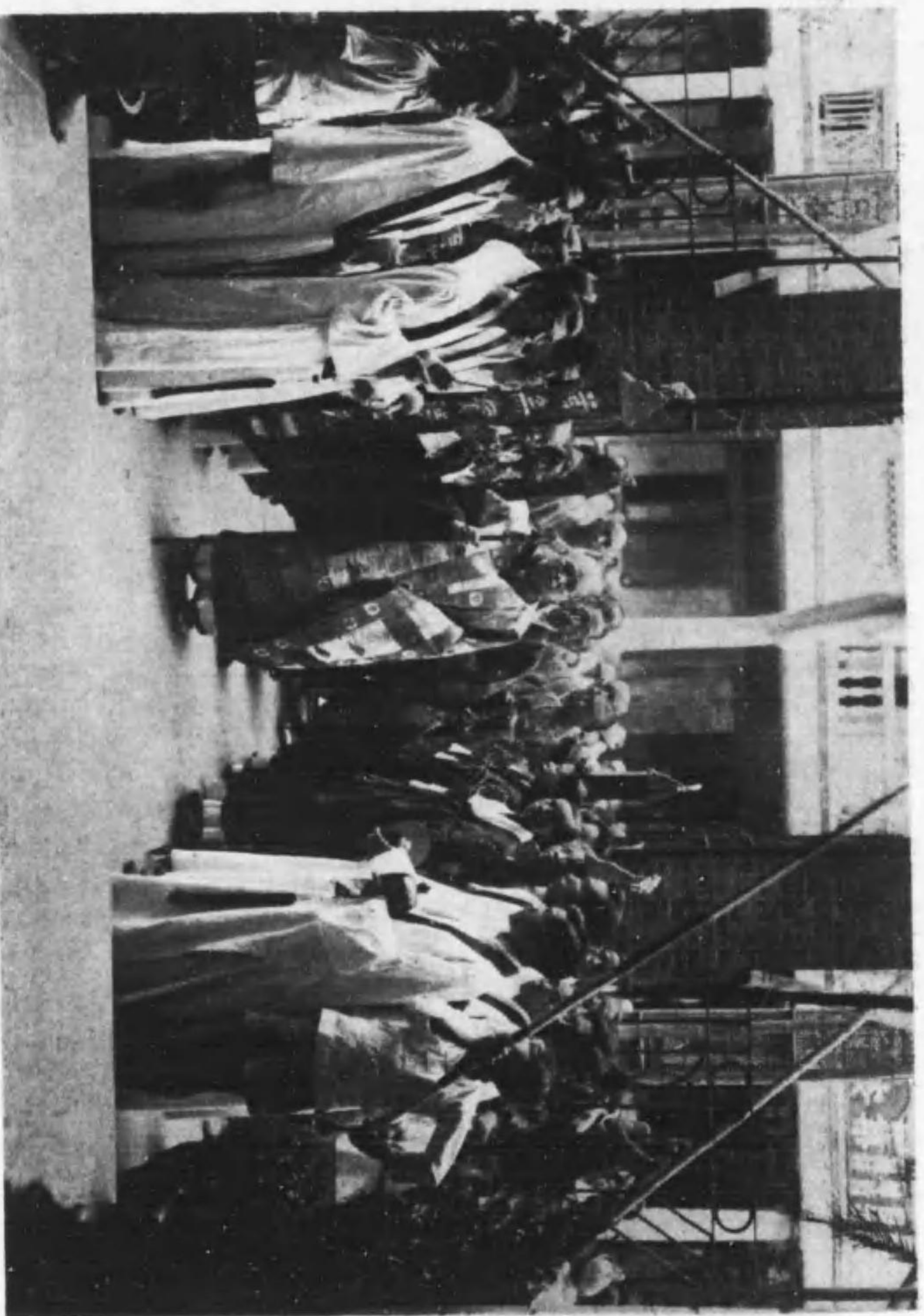
(二ノ共) 列進へ場道頂灌



(三ノ其) 列進へ場道頂灌



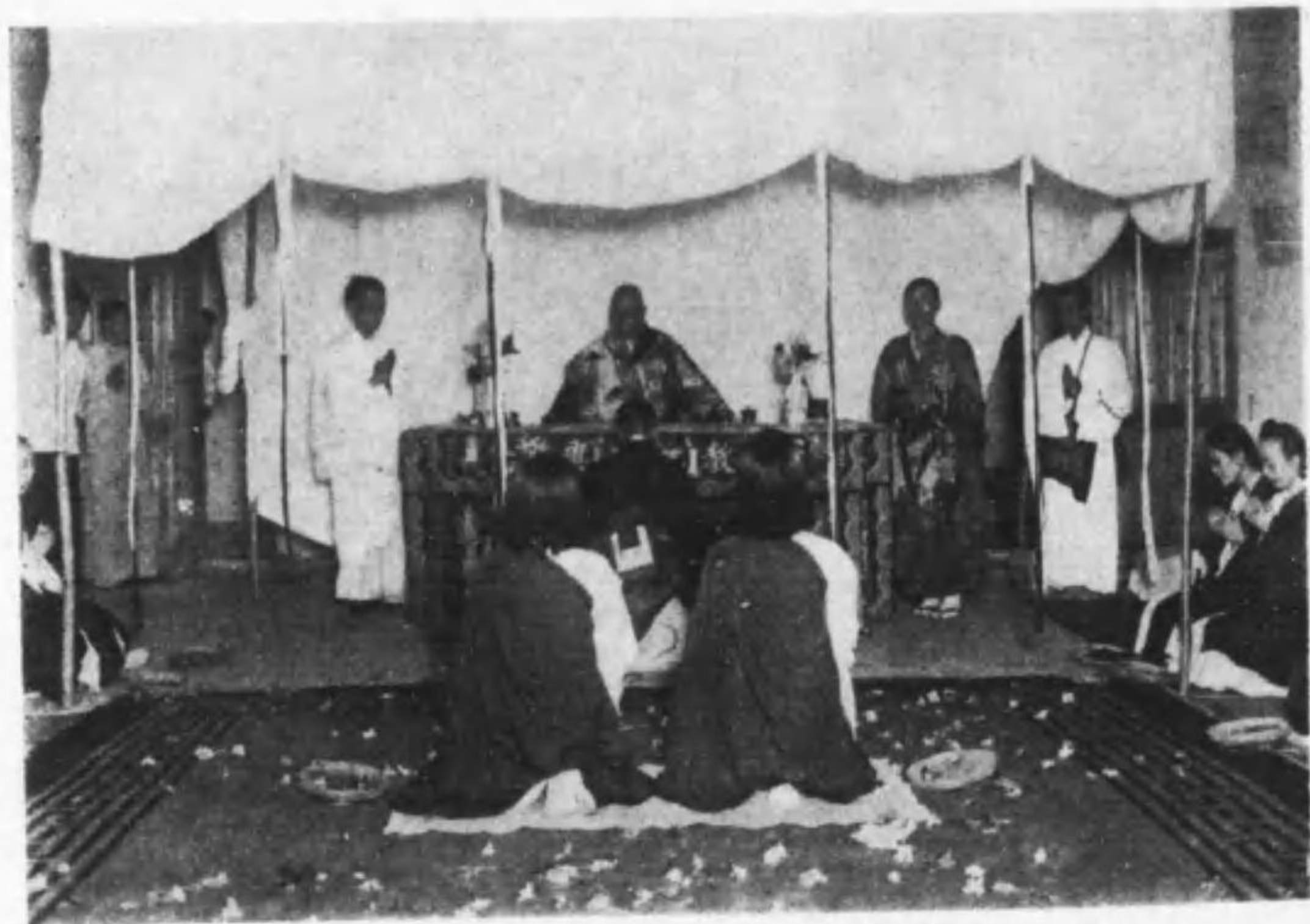
ルアデ數多人ガ級階識智年壯青テシト主ハ者壇入頂灌



三味耶大阿入道場(油頭同會館)ニテ



三味耶戒職衆ハ女居士(總禮)



散華對揚終テツ(女居士)



三昧耶女居士ノ法要



日華陣歿英靈同慰靈堂和平快來祈禱會(六月八日油頭同榮會館於)



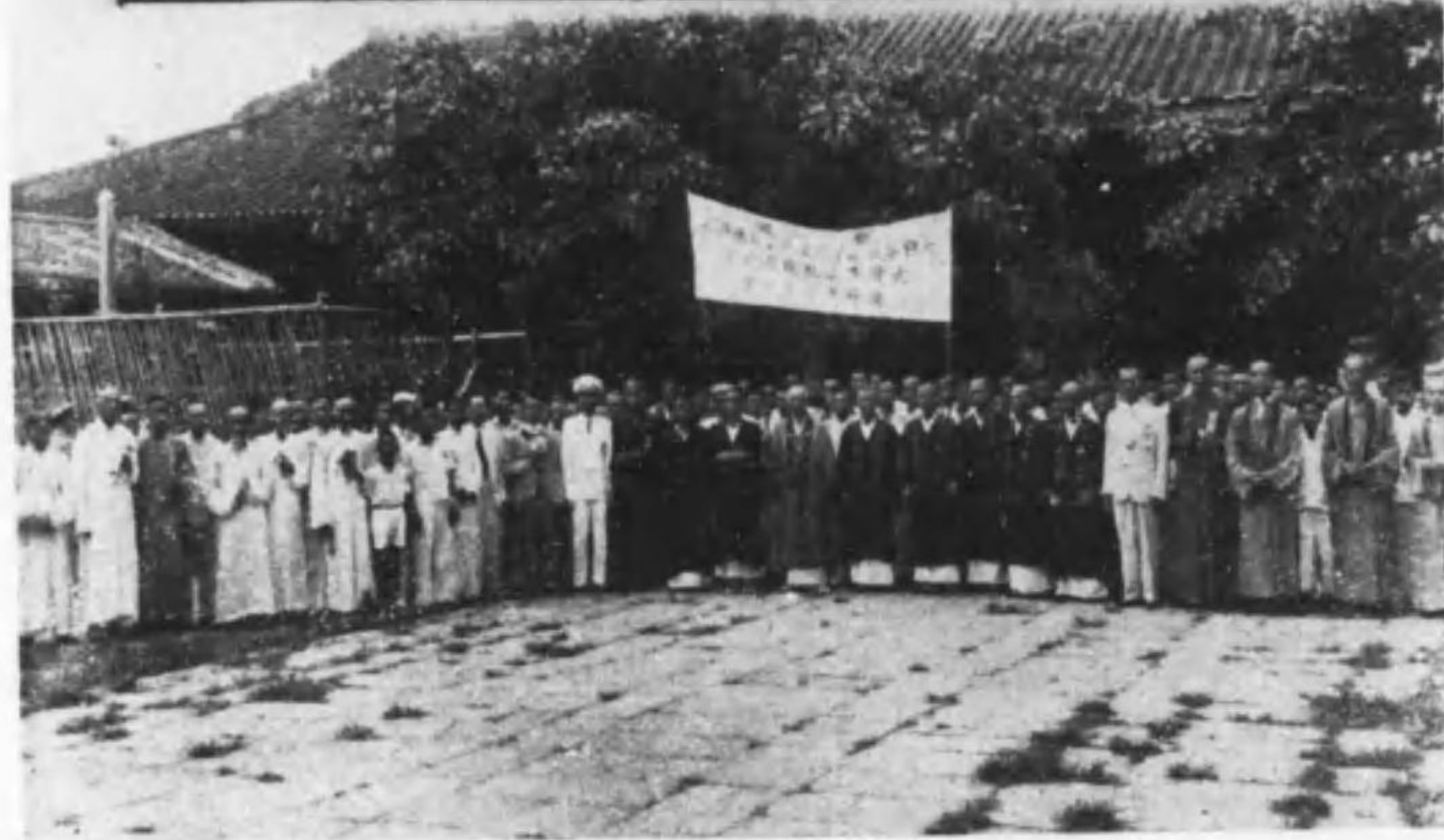
(同合華日衆職) 祭靈慰同合靈英歿陣華日ルケ於=館會榮同頭汕

潮州會館 迎日護 表大 管理 佐長 僧大 巡遊 大會 總辦 汕頭 潮州 車站



(迎歡的狂熱ノ人華) 式迎歡ノ前驛州潮

歡日迎 大本護 國寺 代理 長 大 佐 木 大 僧 蓋 巡 錫 會 大 攝 紀 卅 六 九

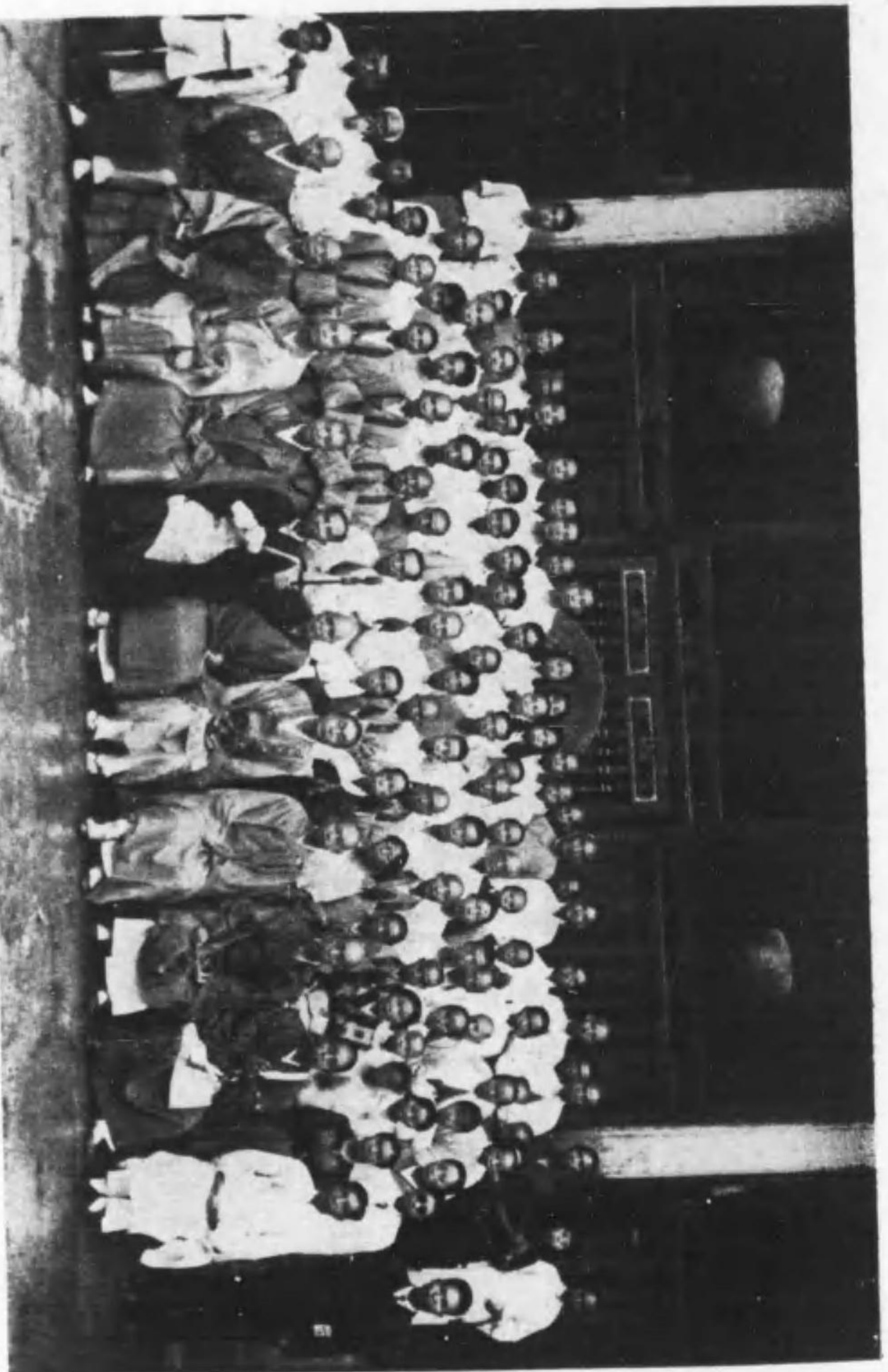


(日九月六) 影撮念記々早着到テ於ニ前堂金寺元開

潮州 密教 重興 會 暨 各界 舉行 日 華 傳 士 將 士 英 將 慰 勞 會 大 會 念 卅 六 九



(正僧大木々佐ハルテ立ニ頭先) 列進場道入寺元開州潮



(日十月六) 影撮念記者壇入華日ルケ於 = 寺元開州潮



湖州開元寺に於て日華陣歿英靈合同慰靈祭(此ノ日南支派
 遣軍司令官中田閣下ノ焼香アリタリ)



佐木貫一首行南支巡錫歸朝の光景(昭和十八年七月二十日)



ある日の日華親善断片（潮州何縣長官邸にて）

は し が き

私達は台灣に渡り、更に戦後禍亂の中に孜々として再建新生に懸命の努力を拂ひつゝある南支の土を踏むで、幾多の困難と危難に曝され、生死の境に直面しつゝ豫期以上の成果を收め、とに角目的を果し得て來たことは、全く神明の御加護と御佛の大慈悲に攝取され通して來たものであると深く感謝する次第である。然も遙々瘴癘の地に渡つて炎熱を冒し幾多生活上の不自由と戦ひつゝも病人も出ず何等の事故も起きずに淨業を爲し遂げ得られたと言ふことは、佛天の御冥護はさる事ながら、宗派内外諸大徳の御聲援と内地にあつては多數檀信徒諸賢殊には瞻天普門會々員、彼の地にあつては密教會々員の人々が數ヶ月に亘る熱誠溢るゝ不斷の御祈願に依る總和がこの輝かしい結果を齎したものであると感激してゐる。

殊には終始この行を通じて身に沁みて感じたことは、現地に於ける軍官民の方々の御好意と絶大なる御後援とは涙が出るばかりで、國を出て知る皇國の偉大さと、日本人と生れた歡喜とであつた。

この記録は御世話になつた方々に對して心からの御禮の辭とし、併せて報告と致し、身を以て繕つて來た汗の記録として誇張もなく、宣傳でもなく、素直に南支密教の現状と將來の見透し及び民心の動向更に開教に従事して居る人々の苦心とをお傳へして、それが少しでも江湖の御参考ともなり日華親善工作の一駒ともなれば甚だ幸ひとする所である。

南支密教の懐古

懐古と言つてもそんな古い歴史を持つて居るのではない。權田老大僧正が支那に渡られたのは大正十三年であるから當時豊山派今では眞言宗だが弘法大師の流れをくむ我が日本眞言宗が支那に手を染めたのは今から約二十年前である。

權田大僧正一行の渡支授法に依つて直接民間の手に依つて日支間の交渉は進められ、短時日の間に然も急速に親密理解の度は深められ、支那側の燃えるが如き探究熱と求信欲と幾多の財力と、時間を惜しまざる努力の結果は翌大正十四年に王弘願氏、香港黎乙眞氏、上海程宅安氏、廣東曼殊伽諦慧光法師等の渡日となり、之等の人々は或は越後の權田大僧正の膝下に、或は和歌山縣根來山道場に修鍊し改めて傳法灌頂受法をなし各々歸國され、教線はグン／＼張られて支那密教は頓に活氣を呈し、王弘願氏の如きは中國密教復興會を組織し、南支一帯に七、八千人の會員を得、黎乙眞氏は香港に眞言宗男女居士林を建立して居士一千人を擁して日々隆盛に向ひ多忙を極めつゝあつたのであるが、不幸支那全土に巻き起つた排日抗日の大旋風は日本僧權田大僧正を始祖と仰ぎ行ふ處は事毎に親日的である、この密教運動は到底兇暴なる抗日分子の見逃しおく譯も無く、主要人物は或は兇刃に斃れ或は謀略に依り、或は理不盡な彈壓にあつて、漸次衰亡寂莫を味はねばならなかつたのである。久しい彈壓と事變の勃發と共に、戰禍又南支にも擴大せられ、民心の動搖免れ難く其の歸趨も計り難い状態であつたが、昭和十五年には皇軍進駐となり、其の後時を経るに従ひ、民心も落付き着々平和工作に次ぎ文化の施設も各種團體の手を通じて行はれ今や漸く大衆に浸徹しせんとつゝあるのであるが、如何にせん、國家も之につぐ各團體もまだ本腰になつて力を入れて居るものは極めて少ない様である。南支の特種なる性格を理解したならば、こんな事ではいけないと思ふのであるが、關係方面でも氣がついて居るのであらうが手が廻らぬのか我々の

如き一介の野人にはその邊の事は解らない。とに角南支は抗日排日の根源地であるから又それ丈親善工作なり、あらゆる力と努力がもつと／＼拂はれ、理解と信頼の上に立つて過去に於ける禍根を根本的に刈り取つて終はねばならぬと思ふ。今我等は筆を取る前に南支密教に傾倒されたる人々を懐ひ追恩の至情を運ぶと共に故き人々を敬仰し、その精神を戴して更に新しい第一歩をふみ出す必要があると思ふ。こゝに二、三の重要人物を描寫する事にする。

權田雷斧大僧正

白い立派な髯を頬一杯に張つて、デツブリと肥つたニコヤカな然も威嚴のある風貌は日本人でも自ら頭が下る、支那の人から見たらば「大人」として「大阿闍梨」として無條件に仰がれる、何もかを持つて居られた様に思ふ。

その閱歴から言つても、申分のない大偉人である。夙に大學匠として或は事相の研究を極め盡した事相家として、又辯舌の人として、又大正大學々長として、英才教育に或は一派の管長として、僧團の最高峰を幾度か踏まれ、一世に其の徳を慕はれた方である事は既に周知の事であるが、支那に關しては餘り世間に知られて居ない。

猊下がなくなつて何年も経たないのにこの偉人を世間は兎角忘れ勝ちにならうとしてゐる。然るに支那に於てはこの大僧正を教祖として、多數の居士達は日々夜々拜んでゐるのであつて、權田猊下は故人となられたが今も尙支那に生きてゐられるのである。猊下の心を戴して今戸川憲戒僧正は支那の人々と權田猊下を語り、又その授くる處の法は權田猊下直流として、彼等は心から悦び迎えて居るのである。或は現代の支那のみならず支那民族の續く限り永遠に權田猊下は生き抜かれて行くのではなからうか。

大正十三年渡支され、受明灌頂、結緣灌頂を授けられた法縁は、排日抗日の大旋風の中にも嚴として支那民衆の手に

依つて護り通され、一度壊滅に類した密教重興會も戸川師の渡支開教と共に、再組織され、今や隆々として、發展の一途を辿つて居る。

猊下の肖像畫は市井に賣出され、民衆は之を佛間に仰いで禮拜して居る位である。

因に大正十三年猊下渡支の際の隨員は、故小林正盛大僧正、小野塚與澄、中村教信、岡田契昌、飯塚榮山、山田鏡阿、戸川憲戒、大橋傳尊、中村淨周、和田辨瑞の各僧正、外に橋本春陵畫伯であつた。この一大快舉は後を永く支那密教史に特筆さるべきものであらう。

王弘願氏

王氏は潮州の生れ、金山中學漢文科受持の先生で日本では國文學者である。國文學者で潮州に生れたとすれば自然潮州とは離すべからざる關係の韓退之崇拜論者となる譯で、王氏も最初は熱心な韓公宗の信者で佛教は大嫌ひであつた。名前もその頃は師愈（蓋し韓愈を師とするの意味）と呼び一切の佛教を中華の國土から放逐せねば止まない決心であつた。處が或る時思ふには、只無茶苦茶に佛教を攻撃しても佛教の何者なるかを知らないでは、その攻撃は意味をなさない。これは一つ徹底的に佛教の穴探しをしてその後徹底的に攻撃してやらうと考へた。そこで第一に華嚴經を讀んで見た、すると華嚴經の中には、王氏の豫想もしなかつた哲理が説いてある。佛の慈悲の廣大さが窺はれた。そこで王氏は夢中になつて華嚴經に關するあらゆる注疏を讀み盡した。華嚴に關する研究が愈々深く益々詳かになればなる程、此處に不可解の疑惑を生じ出した。かうして彼王氏は弘法大師が十住心論に示された通り華嚴の教理には満足し得ないで、密教の教理研究に没入した譯である。恰も此際であつた。權田大僧正が東京帝大印哲科で講義された密教綱要を手

に入れ、これが漢譯に努め、尙同じくその名著續玄秘曲（大日經講義）を翻譯するに及んで、益々密教に對する憧憬を高め終に自分の名、師愈を弘願と改め圓五居士と稱して密教に突入された譯である。

王氏はその後民國十三年六月潮州開元寺に權田老僧正（當時七十九歳）を招じて密教の灌頂を受け、翌年は香港黎乙眞氏、上海程宅安氏、廣東曼殊伽諦慧光法師等と共に日本に渡り、權田大僧正、小野塚僧正指導の許に、數個月の修練をなし、和歌山縣根來寺に於て改めて傳法灌頂に浴し、眞言密教付法第四十九世の法脈を受けて歸國し、汕頭、潮州を中心として密教重興會を結成して、數千に餘る會員を得られた。實に中國密教重興の第二祖と稱するに恥ぢない人である。

洪兆麟將軍の入信

洪將軍は湖南省の産である。而も貧乏料理屋の第幾番目かの息子で十二三歳の頃、新開港として景氣のよかつた汕頭碼頭の某料理屋へ金幾何かで賣り渡された。人間も品物と同様に賣り渡されたとすれば實に牛馬同然であつたさうだ。その後將軍は幸ひ清朝派遣の粵軍總督の眼識に達し、又購はれて總督の徒卒となつた。これが將軍をして潮梅兩軍々司令、陸軍中將の榮位を得しめたそもゝの發端で、その後清朝の顛覆、革命軍の侵入等で中華は大混亂を來した。その間を通して洪氏は恩人總督の意志と、古郷保護の觀念によつて、兎に角潮梅兩縣の安寧だけは保持して來た。（勿論自分が表に立つた時、立たない時はあつた）かうして彼が郷黨の信望を得れば得る程彼の生活は豊になつた。その頃（民國十三年）では潮梅兩縣の賭博稅（その頃中國では稅を納めて賭博を公許して居つた）だけでも年額百七八十萬圓に上つたさうである。それで洪氏も一時は妻君を十幾人も持つて居つたと。

ところが或一夜夢に自分が出家して、佛弟子となり、友人と對談して居つたが、その際その友人が自分を佛子々々と

呼んだ。夢が醒めてからも、その佛子の聲が耳底に残つて離れない。そこで寢床の上に端座して至心に合掌して居ると夫人連がこれを見て、その理由を尋ねて止まない。依つて詳らかに夢物語りを告げ、自分の出家得道の希望を告げると何しろ十幾人の妻君だから随分辯難攻撃をされた。これには流石の將軍も辟易して一時此の希望を押へては居るが、未だにその佛子の聲が耳底にある爲め、その後は大いに夫人の數を減じ目下六人に及んで居る。かうして西湖山上の關羽廟に自分の邸内から發掘した佛像を安置して廟を重修し、將來此六人の夫人を始末し次第に此の寺に隱退して、佛力に依つてこの荒むで行く古郷を救ふ考へである。

今（民國十三年六月）權田大僧正の弟子となり密教に入ることが出來た。どうか今後一箇年待つて頂きたい。必ず自分は此廟を密教重興會に寄附し自分はその堂守となつて中國密教の爲めに盡すであらう。

附記

右王弘願氏洪將軍の二篇は民國十三年六月十四日潮州西湖公園に於て行はれた權田大僧正以下日本僧十一名に對する盛大なる謝恩會の席上で王弘願先生並に洪兆麟將軍が述べられた述懐談を要約したものである。洪將軍はその後希望の一箇年を待たず私共と六月に別れその年八月中旬上海行きの中で暗殺された。殺したのは誰か知らないが將軍の死後潮州人は將軍の遺産が僅か一二萬元で餘りにも少額なのに驚くと同時に、將軍がこれまで公共事業に消費された金額を算定してその清廉に感動して居るさうである。王弘願先生は金山中學の教職を辭して密教重興に努力され香港、廣東に密教の法燈を掣けられ一時會員數千を超えると言はれたが惜しい哉民國二十二年春、業半途にて逝かれた。南支一帯の密教會々員は今でも在りし日を偲んで流涕して居る。（戸川憲戒師編「潮汕小案内」に依る）

黎乙眞大阿闍梨（卦告より拔萃）

香港眞言宗居士林開祖黎乙眞大阿闍梨は其先端州高明の人なり、文諱は澤田公、母は何氏、太平天國の時に當り、亂を避けて香港に至り遂に家す、偶々英人某氏より寫眞術を傳へて之を業とす、蓋し華僑の寫眞術を業とするもの實に澤田公を以て嚆矢と爲す。同治十年十月大阿闍梨香港に誕す。聲容迴に常孩に異り、稍長じて拔俗清超なり。年十三、母何氏卒す。廣州海福寺の苾芻、誦經廻向す。大阿闍梨梵唄を聞いて心頓に開け、苾芻に隨て大悲心陀羅尼を受け先妣の爲に持誦して數年に至る、大阿闍梨資性仁慈にして篤く三寶を敬す。光緒二十年香港に時疫流行して死者枕藉するや、大阿闍梨同志と與に明善堂を石龍に創して醫藥棺衾を布施し、また法侶を集めて其の冥福を祈らしむ。民國七年、香港競馬場に大火ありて死者を出すこと無數、大阿闍梨大檀越何甘棠先生をして法會を營ましめ、自ら其の主壇に任す。其の他太平山廣福慈航祠の無緣佛を供養して東華醫院を再興し、或は青山禪院を中興して其の住持を定めしが如き、或は九龍の是岸禪院若くは六祖經堂の保存に盡瘁せしが如き、護法篤信の功績枚擧に遑あらず。大阿闍梨深く内典を研精して倦むことを知らず、外書に於ても亦窺はざる所なく、老莊諸子は勿論、歐西の哲學、醫方工巧に至るまで、皆潛志探求して其の體用を明かにす。故に其の著書に說法に博引旁徵至らざるなく、頗る明快暢達なりしと云ふ。大阿闍梨年五十にして大藏經を閲讀し祕密部に至りて嘆じて曰く。

「此れ殊勝の妙法なり、惜むらくは我國人福薄くして負荷に堪へず、其れをして千歳傳を絶たしむ。普く群生を度さんと欲せば其れ東渡して法を求むべきか、蓋し我中國の密教は善無畏、金剛智、及び不空の各三藏、法を負うて來唐せしより、惠果和尙に至りて大に隆盛を極めたりしも、其後漸く式微にして明朝に及んで宗風終に絶えたり。獨り惠果和

尙の高弟弘法大師之を日本に傳へ今に至りて大に行はる、其の第四十八代の傳燈大阿闍梨權田雷斧大僧正は新義眞言宗豊山派に屬し、其の法系興教大師の正嫡に出づ」と。

民國十三年に權田大僧正は中華有志の懇望に應じて潮州に巡錫せらるゝや、大阿闍梨之を聞いて大に隨喜し、自ら香港に迎へて三摩耶戒を受け、結緣灌頂の法水に沐す。翌年五月、求法の素志愈堅く海に泛んで遠く日本に渡り、高野山に登りて祖廟を禮拜し、根來山に於て四度加行を修し、權田大僧正に從つて金胎兩部の傳法灌頂を受け、兩部傳法大阿闍梨の職位を得たり。是に於て權田大僧正自ら被著する所の福田衣を解いて、親しく大阿闍梨に授けて傳法了畢の信と爲し、且つ囑するに中華密教の重興、法乳反哺の素懷を以てせらる。大阿闍梨歸國以來、専ら中國密教の重光を念とし以て大僧正の囑付に酬いんとす、佛天冥護し善友相助け、復た胡禧堂、蔡功譜、二禮越の贊襄を得て、民國十五年二月香港銅羅灣大抗村光明臺上に男居士林を創立し、民國十九年七月更に女居士林を創建し、遂に家門を擧げて密教の道場と爲す。爾來緇素雲集して法乳に飽滿し、灌頂を受くる者凡一千有餘人に達す。大阿闍梨の中華密教重光の本誓、權田僧正の法乳反哺の素懷是に於て殆んど滿つ。民國二十六年二月二十六日突如疾を示す。而も苦しむ所なく笑語常の如し、二十八日忽に沐浴して禪榻に跌坐し、衆人を環視して印を結び呪を誦じて閉目片刻、印を擧げて額際に至り過く衆に示して曰く、後學之を識れ此れ秘印なりと、言ひ訖て奄然として遷化せらる享年六十七、嗚呼悲哉。三月三日法弟張圓明及男女居士林の弟子等、華人永遠の墳場に殯葬す。」

以上甚だ簡略ではあるが、これで兎も角、黎阿闍梨の略傳並に大阿闍梨と我豊山派との關係を略ぼ知ることが出来る事と思ふ。随つて讀者は私達一行がこの艱難な時局に際會しながら、是非香港に行かなければならなかつた事には更に重大な意義のあることをも看取せられたることであらう。

(昭和十三年六月發行加藤親下一行著す處の「事變下の香港宗教視察」に依る)

平岡 貞氏

平岡さんは本來密教を信仰されて居る人ではない、キリスト教の熱心なる信奉者として、又現在は新しいキリスト教の再建者として、その道で知られて居る人である。本業は貿易商であるが、又教界人として熱心なるキリスト教傳道者としての平岡さんの面目は躍如としてゐる様に思ふ。そのキリスト教徒である、平岡さんが南支密教を語るのにどうしても記さねばならぬ程我が眞言宗と深い關係を持つて居られるのは不思議な位である。

大正十三年權田親下一行が渡支された時から、昭和十三年加藤親下一行が香港に渡つて黎乙眞先生の追善をし、親善工作に資せられた時も、又今回佐々木大僧正一行が廣東、香港に法筵を張るに當つても、悉く平岡さんの篤いお世話になつて居る。キリスト教の平岡さんが何うして佛教の仕事に援助されるのであらうか。

この事は香港でも大分キリスト教仲間の人々の話題になつてゐるとの事である。平岡さんは常々大いなる日本の國力と陛下の御稜威に依つて日本國民は生きてゐると説かれてゐる。國の爲には小さな宗教感情をかなぐり捨てかゝらねばならない、又支那の人々を眞に思ひ、本當に幸福にしてやる事であれば互に手を携へてやらなければならぬと會ふ度に口癖の様に言つて居られる。これあるが故に故き黎乙眞先生とも刎頸の交りをされて居たのである。

眞言宗の事業が平岡さんの氣持に合致して居るからこそ、時に幾十日かの閑も、財も吝まず御世話を下さるのである。お世話を頂いた人間としてよりも眞言宗として日本人として平岡さんには感謝しなくてはならぬと思ふ。

戸川憲戒僧正

権田親下と同郷であり、日頃その膝下にあつて受法、練行を重ね、親下の心を心として生き。嘗てはその隨員として大正十三年に渡支し、昭和十七年密教重興會の再建と言ふ大任を負ひて渡支され日夜中國民衆度生の爲め苦辛慘澹されて居る。

その努力は酬ひられて、今や密教重興會は再び昔日の隆昌否更により以上の發展を期待されて居る。」
戸川師の事はこれから先、事に觸れて詳しく記すから此處では省略する。

戸川開教師の派遣と佐々木大僧正巡錫

戸川師は舊豊山派時代には宗派の表面に立つて晴れ役こそ勤めた事はないが、眞言宗僧侶として柏崎市遍照寺にあつてコツ／＼と事相の研鑽を重ね、且又地方文化の開發指導にたゆみなき堅實の歩みを續けて來た人であり、同地方では擧げて崇仰の標的となつてゐた人である。

尙ほ眞言宗最高嚴儀たる後七日御修法並に太元御修法には年々上洛奉仕し、事相方面では豊山派と言ふよりは眞言宗の其の道の人々には夙に知られて居た徳者である。處が計らずも中村教信僧正が豊山派宗務所の部長として宗派あげての大問題たる中本寺を排して末派を大和長谷寺に歸一せしめるといふ所謂本山歸一の件で越後路を遊説された時柏崎の自坊に戸川師を訪ね、談偶々宗教工策としての對支政策に及び相互に烈々火を吐くが如き意見の交換をなしたる處兩者の意見全く一致し、相互に眞の理解と信頼とを持つに至つたのである。處が越えて昭和十五年春戸川師が御修法承仕と

して上洛する際、宗務所に立寄られ支那の開教に何かお役に立つ様な事があるならば何時でも馳せ参するからと中村師に申出でられ、中村師は南支開教には戸川師が最適任者と信じてゐた折柄蒙疆訓練道場が新しき大眞言宗の手に依つて昭和十六年十月に開設せらるゝや、當時興亞部長たる中村僧正の頭にはあの北國の片田舎に埋もれてゐる偉材戸川師を起用したい切實なる希望ありて支那に派遣する前行として、四十有七才にもなる戸川師の蹶起を促し、同師は六ヶ月の修練に身を投じられたのである。

六十の手習ひといふが五十に手の届く、謂はゞ人生に疲れを知る身体に鞭打つて、二十代の青年と共に支那語の研究に又は身心鍛錬に連日練行するといふ事は容易でなかつた事は想像に難くないのである。

御兩人にとつては、南支密教が諸先輩の挺身開發された儘戦禍の跡に顧みられず荒れるに委せて置かれる事は到底忍び得ない事であつた。周囲の情勢は遂に戸川師を立ち上らしめたのである。

嘗て八十の老齡を顧みず権田大僧正が開發されたる南支密教の再興を計るものは、矢張り老僧正の素志を繼承し、直接に老僧正に關係を持つ者でなければならぬ。更に南支密教の性格を検討するならば何うしても事相に造詣の深いものでなければならぬ、等々を考慮する時は二十有餘年間支那開教に深く關心を持ち、情熱に燃える戸川師以外には適任者はない事になる、茲に中村師の白羽の矢は遂に戸川師の上に立てられたのであつた。

「人は己れを知る人の爲に死す」と申すが戸川師は豫て自ら熱望されてゐた支那開教の事であるから感激に戦き昭和十七年三月蒙疆訓練道場を卒業する其の六月油頭に勇躍赴かれたのであつた。

然るに南支に渡つても、決して安逸歡樂は待つては居ない。全く未知の世界に、單身爾前の工策なく乗り込まれたのであるから、其の苦勞は並大抵な事ではなかつた、頼る人としてなく金に困り、食に困り、言語に窮し、あらゆる艱難、

試練が待つて居た。

そうした困難を突破して昭和十七年十二月戸川師は開教も其の緒に就き、軌道に乗つて來たので、宗務所に打合せ連絡の爲めに歸つて來られたのである、その時の戸川師の腹には、積極的開教方策として、

一、更に一名の開教師を増員すること

一、眞言密教の法脈を再興するには是非共管長若しくは管長御代理を南支に迎えて受明、結縁灌頂を修行することこの二點にあつたのである。

この報告及び要請を聞いた中村師は眞剣に講究し直ちに實行に移す事を考えられた。南支密教の特異性から何としても中國人は權田大僧正を中心に考へてゐるのであるから、管長代理の方を送るにしても權田親下に直接に關係を持ち、然もこの淨業に理解を持ち、豫算の關係上宗派からは充分なる費用も出ないのだから敢て物心共に犠牲を吝まされざる大阿闍梨を見付け出さねばならぬ。殊には戦時下幾多の危難も伴ふ事もあり、慎重に考慮をせられた揚句護國寺貫首佐々木大僧正に御相談申上げた處即座に御快諾を願へて、こんな嬉しいことはなかつたと述懐されて居た。

佐々木大僧正の快諾を得られた中村師は直ちに計畫を立て、將に實行に移さんばかりになつた處、内局の更迭となつて岡田戒玉僧正宗務長となられ、現宮崎忍海僧正教學興亞部長の手に依つて實行せられる事となつたのである。

管長代理派遣計畫が決定する迄

興亞部長中村師は戸川師の昭和十七年十二月歸國と現地報告とを具さに聞き、師の抱懐する開教飛躍の計畫に宗派として全副の後援を吝まざる決心をされたのであるが、又一面中村師の決心の重大なる材料となつたのは高井油頭領事の

外務大臣に宛てられた稟請書である。

餘りにも貴重な資料であり、見逃す事の出来ない書類であるから紙面を割愛する事にする。

昭和十八年二月眞言宗々會に於てもこの貴重な資料が大いに南支密教弘通に當る戸川師等の努力を理解せしめるに役立ち、この植茶の事業後援としては相當莫大なる金額を投じられる事となつたのである。以下原文そのままを掲載する事にする。

【寫】

普通第四三九號

昭和十七年十月十二日

外務大臣 谷 正 之 殿

眞言宗開教師戸川憲戒ノ布教事業助成金下附方稟請ノ件

在油頭領事 高 井 末 彦

主題ノ者ハ大正十三年六月油頭ノ奥地十里ニ位スル潮州ニ於ケル佛教ノ熱心ナル信者王弘願及潮梅兩軍軍司令陸軍中將洪洸麟ノ招請ヲ受ケ同地名刹開元寺ニ於テ眞言密教ヲ傳法セシ眞言宗本山故權田大僧正一行十二名ノ一員トシテ潮州地方ヲ基點トシ廣東及香港方面ニ於ケル眞言密教ノ布教ニ從事セシ經驗ヲ有スル者ナル處當時南支一帯ニ於テハ排日極メテ熾烈ナリシニ拘ラズ油頭、潮州地區ニ於テハ右大僧正ノ灌頂ヲ受ケ眞言密教ノ熱烈ナル信者トナリ同大僧正ノ弟子入ヲ爲シタル者七十二名ヲ數ヘ眞言密教重興會ヲ組織シ會員トナレル中國人戸數八百戸澄海潮陽地方八百戸廣州市一帯信者二千戸香港地方約一千戸ヲ算シタル處（右ハ家長ノ數ニシテ會員ハ其ノ全家族ナルヲ以テ其ノ約四十倍ニ達ス）由來支那ヨリ我が國ニ傳來セシ眞言密教ハ教義餘リニ深遠ナル爲支那ニ於テハ約三百年前死滅シ通俗的ナル

禪宗一色トナリ密教ノ教義ヲ理解スルモノナキニ至リシガ前記潮州人王弘願ハ民國十四年香港黎乙眞氏、上海程宅安氏、廣東曼殊伽諦慧光法師等ト共ニ我國ニ渡來シ、權田大僧正小野塚僧正指導ノ下ニ數箇月ノ修練ヲ爲シ和歌山縣根來寺ニ於テ改メテ傳法灌頂ニ浴シ眞言密教付法第四十九世ノ法燈ヲ受ケテ歸國ノ上汕頭潮州ヲ中心トシ密教重興會ヲ結成シ會員ノ獲得ニ努メタル結果會員前記ノ數倍ニ達シ遂ニ會員ハ權田大僧正ヲ中國密教重興ノ始祖ト仰ギ右王弘願氏ヲ第二祖トシテ教理ノ研究及普及ニ盡瘁スルニ至レリ

然ル處眞言密教ハ教理極メテ難解ナル爲中國密教重興會ノ會員トナル者ハ官公吏軍人資産家等ニシテ學識ト社會的地位ヲ有スル「インテリ層」ニ限ラレタル事實ニ鑑ミ今春眞言宗大本山ニ於テハ我國ノ宗教ト支那ニ於ケル宗教トノ融洽シ得ヘキ唯一ノ妥協點ハ實ニ支那ニ於テ死滅セル眞言密教ヲ我が國ヨリ支那ニ逆輸入布教スルニ在ル點ニ着眼シ權田大僧正ガ排日時代ニ殘セシ數々ノ事績ヲ生カサンガ爲今春右戸川少僧正ヲ當方面ニ派遣スルニ決シ興亞院支援ヲ許ニ同少僧正ハ本年六月當地ニ着任當館ヲ來訪援助ヲ求メタルニ付即日當警察高等係ヲシテ調査セシメタルニ汕頭市同平路一〇六號ニ中國密教重興會所在シ權田大僧正王弘願第二祖以下關係者ノ佛畫ヲ藏シ祭壇ニハ大正十三年以來十八年間モ熾烈ナル排日ノ迫害ニ耐ヘテ香煙ヲ絶ヤサマリシ事實ヲ發見シ同少僧正ハ同日ヨリ右重興會ノ庵内ニ居テ定メ會員ヲ探シタル結果多數會員翕然トシテ集リ數日ヲ出ズシテ汕頭市長許少榮以下重要官吏資産家等授戒ヲ受ケ同少僧正ノ弟子トナレルモノ百四十名潮州ニ於テ二十一名ヲ算シ遂ニ潮汕地方信徒ハ中國密教ノ重興會ノ會長トシテ戸川師ヲ仰ギ其ノ道場ニ於テ毎日教ヲ受クル信徒汕頭ニ於テハ五百戸潮州ニ於テハ二百戸ヲ算シ（支那ニ於ケル資産階級ノ家族ハ平均三十名乃至五十名ノ大家族ナルヲ以テ其ノ戸主弟子入りシタルトキハ邸内ニ特殊ノ祭壇ヲ設ケ師ノ教ヲ毎日家族使用人全員ニ傳ヘテ俱ニ朝夕禮拜ス依テ五百戸ノ熱心ナル信者ヲ獲得スレバ結局一戸四十名平均トシテ二萬餘名

ノ信者ヲ得タル結果トナル）同師ノ當方面ニ於ケル事業ハ極メテ有意義ニ進行シツ、アリテ日支人ノ精神的提携ニ資スル所絶大ナルモノアル次第ナリ之ガ爲當地ニ進出シ居ル各宗派ノ僧侶ニ比シ同師ガ默々トシテ不自由ナル狀況ノ許ニ支那人ノ宣撫ニ當リ其ノ渴仰禮讚ヲ博シ何等街ヲ所ナキニ敬服シ當地軍官民インテリ層ニ於テハ先般來同師ノ後援會ヲ組織シ隨時同師ノ教ヲ請フト共ニ同師ノ事業達成ニ貢獻センコトヲ誓ヒ居ル實狀ナリ

敍上ノ如キ實狀ナルヲ以テ同師ハ汕頭道場ト潮州開元寺道場トヲ常ニ往復シ極メテ多忙ナル爲香港廣東上海等ニ於ケル會員トノ聯絡旁々右各地ニ出張致度キ切ナル希望ヲ有スルモ多忙ノ爲到底當地ヲ離レ得サル實情ニアリ、就テハ同師ノ希望通り左記ノ者ヲ眞言宗本山ニ於テ至急助手トシテ派遣シ來ル様何分ノ御旋斡ヲ賜リ度尙同師ノ斯ル意義アル事業ニ對シ主管廳ヨリ適當ノ助成金下附相成様何分ノ御詮議相仰度此段稟請申進ス

記

奈良縣高市郡高市村川原

弘福寺住職 扇 谷 重 憲

(當四十年)

(右者昨年十月一日ヨリ本年三月迄大陸派遣僧訓練道場ニ於テ訓練ヲ受ケタル優秀ナル眞言宗僧侶ニシテ齒科醫ノ免狀ヲモ有スル處其ノ齒科技術ハ特別優秀ノ評アリテ潮汕地區信者ノ宣撫ニハ最適任者ト戸川少僧正ノ推舉セル者)

拜啓時下愈々御健勝之段奉慶賀候陳者本書持參人ハ本日附別添普通第四三九號拙信ヲ以テ其ノ布教事業ノ助成金交付方稟請致シ置キ候眞言宗開教師少僧正戸川憲戒師ニ有之今般本山ト事務打合セノ爲當地發上京セラル、コト、相成候

ニ付本省出頭ノ節ハ主管廳關係官ニ紹介方可然御取計相煩度本人ハ別添公信中ニ報告致置候通り本年六月當地着任以來其ノ德ヲ慕ヒテ集レル信徒無慮數千名ニ達シ本年八月廿六日當地市政府社會局長ノ懇請ニ依リテ警察局前廣場ニ於テ同氏導師トナリテ各慈善團體後援ノ下ニ孟蘭盆ノ施餓鬼ヲ舉行セシ際ニハ數萬ノ善男善女同廣場ヲ埋メ汕頭始マリテ以來ノ盛觀ヲ呈セシ外別添公信ニ詳報致シアル通其ノ布教事業ハ極メテ消極的ナルニ拘ラズ效果ハ想像ニ絶シタル程度ニ着々トシテ舉リ居り候是レ偏ニ本人ノ德望ト熱烈ナル宗教家の良心ノ然ラシムル所ナルハ申ス迄モナキコト乍ラ其ノ説ク教義教理ガ三百年前支那ニ於テ死滅ゼシ深遠ナル眞言密教ニシテ支那ノインテリ層ニアツピール所大ナルモノアルコトモ其ノ原因ノ一ニ有之我等佛教各宗派ノ寺僧支那進出以來同師ノ場合ノ如ク自ラ寺院ヲ建立セズシテ支那人信者佛堂ヲ旋轉シ本人ノ衣食住ヨリ布教ノ事業ニ至ル迄總テ支那人信徒ニ於テ斡旋セルヲ聞カズ又各宗教ノ僧侶大伽藍ヲ建テ美衣ヲ纏ヒテ説法スト雖モ未ダ曾テ支那人ノ信者一人ヲ得タルヲ聞カザルニ同師ハ未ダ當地方言語ヲ殆ド解セザル關係上多ク筆談ヲ以テ支那人ト所用ヲ辨ジ居ル實情ナルニ其ノ謙虛廉潔ナル爲人、溫雅ナル布教態度、高邁ナル思想、深遠ナル教義ヲ慕ヒテ集ル者日ニ多キヲ加ヘツ、アリ且當地市長ヨリ廣東省政府委員兼民政廳長ニ轉出セル許少榮ハ廣東着任後熱心ニ同地方信者ノ糾合ニ當リ同師ノ廣東出張ヲ要望シ極力布教斡旋ニ盡瘁シアリテ本人一人ノ支那ニ於ケル存在ハ我ガ各宗派百ノ寺院數千ノ俗僧ノ布教ニ勝ルコト隔段ト言フベキハ勿論支那ニ對シ宗教的宣撫ノ手ヲ有效ニ差延べ得ル唯一ノ道ハ支那ヨリ我國ニ渡來後支那ニ於テ死滅セル眞言密教ノ教義ヲ我國僧侶ノ手ニヨリ支那ニ再傳授スルニ優ル方法他ニナシト斷ズルモ決シテ過言ニ非ズト確信致シ候然ル處大東亞省機構確定ヲ見ザル當今同師ノ紹介スベキ中央主管廳及關係官不明ナル一方同師ノ赫々タル布教及宣撫ノ效果ヲ益々有効適切ニ擴大セシムベキ指導ニ要スル助成金下付申請ノ手續等詳ラカナラザル爲別添公信ニ於テハ助成金交付方ノ御詮議ヲ稟請

スルニ止メ其ノ金額等ヲ掲ゲザリシ次第ニ有之候就テハ事情御諒承ノ上手續其ノ他必要事項ハ同師上京ノ機會ニ關係係官ヨリ御下問ノ上可然御措置相成ルカ若ハ電報又ハ公信ヲ以テ當方ニ御垂示ヲ賜ルカ何レカノ方法ニ依リナルベク早キニ及ンデ同師ノ布教事業ノ一大發展ヲ見、日支人間ノ思想的提携ノ實現スル様何分ノ御考慮相仰度此段同師紹介旁々御依頼得貴意候

昭和十七年十月十二日

在汕頭

高井領事

敬具

根道東亞局第三課長殿

準備期間

一月

すつと以前から汕頭常在の戸川開教師と當局の間に交渉があつたのであるがこの話が私達の耳に直接入つて來たのは一月の始めであつた。

恰度御修法の大阿が京都から東上されるので之を東京驛頭にお迎へすることに就て打合せがあつた時に當時眞言宗興亞部の(現教學興亞部)主事廣澤榮孝僧正から私に昭和十三年香港黎乙眞居士の追善に行かれた経験もあり、先方でも頗馴染ではあるし、事情も判りであらうから是非佐々木大僧正の隨員として、犬馬の勞をとつて貰ひたいとの勸奨を受けた、その時のお話では大阿現下だけは決定して居つたけれども隨員は全然未決定で、唯發願者である現地の戸川師

の希望と計畫立案者である當時の興亞部長中村教信僧正の意志を汲んで眞に本淨業の持つ意義を理解し、時局柄多分に危険が伴う事でもあるから充分慎重に御考慮の上諾否の御返事を願ひ度いとこの事であつた。

この時私は「戦時下に少しでも皇國の爲めになり又宗教報國が出来それが日華親善のお役に立つ」と言ふ事であるからこの話を聞いた時に既に腹が極つたのであつた。

二月

其の後隨員の類觸れも田中恭盛、中義乘、篠山明信、杉本良智、岡村儀雄の五名が決定し、二月十九日には各々管長親下より「管長代理大僧正佐々木教純中國密教重興會へ巡錫に付隨員を命ず」といふ辭令が下附され、これで本極りとなり、一同も本腰になつた譯である。

その間宮崎部長、中村師、佐々木大僧正の間に苦心を重ねた隨員人選が行はれた。

左にその事情を列記すれば

- 一、第一に大阿を中心として本淨業を理解し、挺身使命完遂に熱意あるもの
 - 一、隨員相互間に意志疎通を有し一致團結事に當り得るもの
 - 一、年齢は概ね均しく然も精神的にも年齢の一致するもの
 - 一、灌頂に精通し眞言宗僧侶として恥しからざるもの
- 右に依り銓衡せられたる由洩れ聞いて居る。

雜感

邦家の爲に、又兎角疎んじられんとする宗教陣營の爲に、是非何か御役に立ちたいものと念願してゐる自分がこの

事あるを中村師及び廣澤師から聞いた時既に私の腹は極つて居たのである。

隨員の人選も決定して、この事がそろ／＼世間に知れて來ると不思議な現象が起つた。

それは今迄私がこの人は本當に頼もしい積極的な正しい人であると信じてゐた人でさえ「出来ることなら参加を取消し給へ、もの好きに行きたいといふ人があるなら人を押しつけて参加することはない」など言つて忠告する人さえあつた。

僧侶つて不思議な存在である。自分の使命、本分と言ふか職域に對して本當に情熱を傾けて居る人が何人あるであらうか？

世間では映畫人が撮影に、新聞人が第一線に、士と共に身を挺して辛苦を共にしてゐる事を思へば僧侶が危険を冒して大法流通のために身を挺するのは當然過ぎる位當然のことであるから私達はじつとして居られない筈である。

人が行かうと決心したもの迄も止めさせようとする。私達は若し身の安全を保つ事をのみ考へ、何もしなかつたなら、死んで終りより外ないと思ふ。この決戦下に佛教界は何をしてゐるかと世間から言はれるのもこんな處に原因があるのではないかと思ふ。

三月

隨員中に二十年前權田大僧正の隨員であり、又戸川師とは同郷であり親交のある山田鏡阿師が特に佐々木大僧正のお思召しで加えられ陣營が一層強化せられた。

最初戸川師の計畫は三月中が、航行にも、彼の地の氣候も、最も良いから一行の三月渡航を希望せられ、當局に於ても熱心に其の運びをつけられたが、文部省、大東亞省の關係又は灌頂用具（血脈、金剛線、齒木）等又戸川師の依頼を

受けてゐる大藏經、齒科醫療器具等が思ふ様に調度出來ず、ズル／＼日を過し隨員一同その間幾度か護國寺月光殿に或は宗務所に集り、又個人的に各方面に交渉連絡が續けられたのであつた。

四月

四月に入ると流石にデツとして居られない、然し遅々として一向に準備は捗らない。戸川師からは「用意出來たひたすら御一行の來光を待つ」旨電報を以て督促して來る、従つて渡航熱も昂つて、隨員一同幾度か集り連日打合せをなす。この間高見代議士の熱誠溢るゝ内外の御盡力もあり、或は文部省、大東亞省に、大藏省に陸軍省に接衝は進められて行く。普門會々員の祈願も日毎に熱度が増はり隨員の中にも道中安全の修法に丹誠をこめるものもある。

宗務所立會の上で旅行間隨員の職務分擔を決定した左の通りである。

一、會計、大阿保 —— 田中隨員

一、灌頂係 —— 中、篠山、山田隨員

一、外交、記録係 —— 杉本隨員

用意萬端整つたものゝ、又我々がいくら行く／＼と力んでも戦時下船舶不足の處へ人の往復が頻繁で中々船を掴む事が出來ない。

中には一ヶ月も四十日も便船を待つてゐる人があるといふのであるから、氣が揉めることである。そこで東洋汽船の中馬進さんにお願ひしてやつと乗船が出来るやうになつた。

豫定日は四月下旬の由である。此の頃になると個人の支度もさる事ながら、灌頂用具の準備、持参するものゝ突き合せやら中々忙しい。血脈の帯封をしたり荷造りをするのにも尻下自ら陣頭に立つてやられるのには頭が下る、一同の感

激も又大きい。

壯行式

二十七日中村僧正の招待會があり、その席上、計畫者として、一同に對して身の危険を顧みず決意されたる謝辭を呈せられ、本淨業の企畫及び希望を述べられ左の如き懇切なる注意があつた。

一、灌頂に當つては特定の人に對してで良いから解説をされたい

一、王弘願先生の追悼會は必ず修行すること

一、日本人墓地の廻向をすること

一、兩國英靈に對して懇親平等の大追悼會を修行すること

一、汕頭上陸第一歩にメッセージを發すること

一、潮州にては洪兆麟將軍の追悼會をなすこと

一、汕頭領事、警察署長、其他要人に對し、信仰の有無を論ぜず灌頂に入壇せしめること

一、現地に於ける回向は先づ部隊と充分連絡を執つて行はれ度し

等々到れり盡せりであつた。

二十八日宗務所及び東京宗務支所主催の壯行式が護國寺觀音堂に於て午後二時より行はれた、出席者小野塚與澄僧正、本田榮亮僧正、高見代議士等を始めとして宗内諸大徳、護國寺普門會、光明婦人會、檀信徒合せて約百數十名、式は廣澤主事司會の許に進められ、先づ長岡慶信僧正は東京宗務支所を代表し「單に密教復興の使命のみならず、密教を通じ

て日華親善に寄與する處極めて大なり」と力説され。次いで集るもの一同至心に本尊寶前に讀經「觀音經一卷」道中安
全淨業成就を祈願し、終つて中村教信僧正より經過報告あり要旨左の如し。

權田大僧正の渡支は大正十三年で今から約二十年前である、その時汕頭潮州では傳法、受明を行ひ香港では黎乙眞の
特請にて結緣灌頂を執行しました、その時潮州には金山中學、又師範學校々長であつた王弘願氏が居られ非常に熱心に
密教研究をされ、權田猥下の密教綱要、密教法具便覽、曼荼羅詳解等を支那譯され之を出版して普く同信の士に頒布し
研究を進めて居たのであります、更に自ら景仰する權田猥下の警咳に接し、授法し指導を受けたいといふ念願止み難く
猥下を屈請することとはなつたのであります。この時猥下は七十九才の老齡を以て南支開教に身を以て範を垂れられた
のであります。

即ち彼等の間では密教の研究のみに止つてはいけない、之を實行にうつし、生活の上に生かさねばならぬと言ふ熱烈
な信仰が擡頭してゐたのであります、當時汕頭領事であつた内田五郎氏の御盡力に依つて潮州開元寺に壇を設け灌頂
することとなつたのであります。その苦心の程は察するに餘りありまして、壇を造るにも何も知らない支那の大工を使
つて、口ではわかりません事が多々ありまして手眞似、足眞似でこれを指導をして造つたといふ位であります。

この熱意と苦心とが結集して中國密教復興會が出来たのでありますその時傳法及受明灌頂に入壇したものは潮梅地
區軍司令洪洮麟將軍を始め、七十二名あり其の後復興會の會員は日々隆盛に趣き汕頭に一千五百戸、廣東に二千戸、香
港に一千戸（支那では概ね三十人以上の家族を擁して居ますから）で其の全体の數は夥しいものがあります。

この猥下潮州巡錫の際香港の黎乙眞居士は獨力を以て戒壇を設け一行を屈請して結緣灌頂に浴したのであります。

翌年王弘願、香港の黎乙眞、廣東の曼珠揭諦、上海の程宅安の四名が來朝し根來山に於て加行練行をなし、傳法灌頂

を受けて共に大阿闍梨の資格を得たのであります。斯くの如く南支に於て密教は急激に勃興しましたが南支は由來排日
の非常に熾烈な處であり。抑々排日の最初の烽火が揚つたのは、潮州の金山中學の生徒及先生であります。そこへ權田
猥下一行が行かれたのですから、滞在間時に不穩な空氣の中に安らかならざる思ひをされましたが洪洮麟將軍の絶對支
持と擁護の許に事なく使命を果して來られたのであります。

この隠れたる二人の外護者即ち内田五郎領事と洪洮麟將軍の御後援は忘れては相ならぬと存じます。

尙滞在間排日分子の間には一行を全滅せしめるといふ計畫すらあつたと聞いて居ります。

要するにこの時は洪洮麟將軍の軍隊の力と権力のお蔭で大業を爲し遂げられた譯であります。その後支那事變となり
さしも隆盛を極めた復興會も幹部は勿論會員の大部分は徹底せる官憲の門閥と排日輿論に押され四分五裂の非運に呻吟
し、甘んじなければなりませんでした。

洪將軍は暗殺され、王先生は不慮の死を遂げ、黎居士又示寂せられるといふ状態で、相繼いで中心人物を失つた南支
密教は全く絶望の状態に置かれて終ひました。

其の間海軍の富田貴一氏や平岡貞氏の骨折で昭和十三年黎氏の三周忌追善に加藤精神大僧正を大導師として杉本良智
加藤章一を隨員として渡支されるなどあつて、事變下にあつて中國密教と眞言宗とは僅かに因縁を結んで参りましたが
實に心細い状態でありました。

然し支那事變は大東亞戰となり、戦局の進展と共に佛教も拱手傍觀を許さない。何とかお役に立ち、日華親善の一翼
を買つて御奉公せねばならぬと眞言宗興亞部でも苦心の祕策が練られ、蒙古開教の一面、密教としては南方を忘れて
はならぬ。と信じまして心細い南支の状態ではあるが、と言つて全く根絶されてゐるのではない。今にして手を入れ、

増つたならば必ずや芽を吹き出す事もあらうといふので、

權田親下の隨員たりし戸川師を南支に派し、その遺跡の復興と密教重興會の再建とを托したのであります。戸川師は昭和十七年六月渡支され、非常な艱難をされましたが、誠意と努力が酬ひられて開教も軌道に乗り、その打合せ連絡に十二月一度歸還せられた時の報告には「汕頭に参りました處が密教重興會の所在を訪ねても手掛りがない、止むを得ず領事館に行つて重興會の事を尋ねた處が情報係が帳簿を調べると同平路にある事が判り、早速行つて見ると嘗ては汗漢狩りに戦慄し、破壊され、苦難の眞只中を切り抜け更にこの事變後の混亂の状態にも拘らず、

弘法大師尊像、權田親下寫眞、血脈、王弘願氏の寫眞、法具一切が會員の手に依つて完全に護り通され、然も誰とはなしに人目を忍んで香華を献げるものが絶えなかつたといふ事であり、現に戸川師を案内してくれた情報係の人が眼の當りその情景を見て戸川師の驚きよりも、情報係の人が驚いたといふ事でもあります。即ち信仰の偉大なる潜在力、何ものに依つても破壊する事の出来ない「金剛不壞」の世界を知つて驚嘆されたのであります。その晩から戸川師は密教重興會に起居する事になり、領事館にあつた名簿を頼りに會員の糾合に奔走された」との事であります。

その中許少榮汕頭市長も會員たる事を知つて協力を仰ぎ、次いで授戒を致したる處弟子となつたものが二十一名信徒となつたもの汕頭で五〇〇戸潮州で二〇〇戸である。

其の後戸川師は廣東、香港に渡つて會員の糾合、會の復興に盡力されて居ります。今回の事は眞言宗として故き權田大僧正の偉業を偲び又その再興に依つて眞の日華親善提携を計るにあるのであつて、魂と魂との結合がやがて兩國の眞の提携を確立するものであると確信致します、寧ろこゝに今回の淨業の主目的があるのであります。

佐々木大僧正が彼の地に渡られ中國人を灌頂入壇せしめ一人でも多くの弟子を造られ、一人でも多くの華人の心を攝

み密教に入信させて頂く事が即ち東亞永遠の平和を一步でも促進せしめる事にもなるのであります。最後に大業の成就と御一行の御健康を祈ります」とと一時間半に亘る熱辯が終り一同の感激一層であつた。續いて眞言宗を代表して伊藤財務部長、護國寺普門會を代表して齋藤辨之助氏の祝辭あり。衆議院議員高見之通先生は來賓を代表して、「三年以來山内に起居し御厄介になつてゐるものである。然して本尊薩埵に禮拜し親しく大僧正には御指導を受けてゐるが此の度親下が老耄を提げて大陸に渡られ、思想戰の第一戰に就かれる事をお喜びする、と冒頭し

我が國の歴史を顧みるに宗教は殆ど全てが外國から輸入されてゐる。然るに今回は日本の歴史には無い處の宗教の輸入をされるのであるといふ處に深い意義があると思ひます。殊に日本に佛教が入る時は相當の排撃をしたものである。

然るに今回の行は支那の人はあらゆる犠牲を拂つてお迎えする態度に出てゐる事は面白い對象であり、實に尊い事である。何卒御自愛の上目的を達成され尊い淨業を身を以て實行して來て貰ひたい、時局は益々多岐多様深刻の度を増して來一億蹶起總進軍の秋、大僧正の垂範せらるゝその儘が宗派内外に殊に中國に及ぼす影響の大なるものあるを信する」と涙を奮つて壯行を激勵された。

祝辭終つて佐々木大僧正は靜かに座を立ち、慇懃に挨拶の後「過般宗派要路の方々からは是非南支開教の獎勵と中國民衆度生の爲めに行つて貰ひたいとの申出がありました。私如き老人でもお役に立つ事が出来るならば、お國の爲めにも宗教の爲めにも是非参りませうと快諾申上げたのであります。大休行く先は汕頭、潮州、廣東、香港、上海、南京、北京を経て歸朝する豫定であります。前段の灌頂及び開教上の事に就ては詳しく中村僧正からお話がありましたから目的、其の他の事情は判りになつた事と思ひますから後段南京からの事を一寸申上げたいと思ひます。

今回新聞でも發表された如く南京で一千三百年前の玄奘三藏頂骨が發掘されました、重光大使と褚民誼閣下とが發起

人となつて日華合同にて記念の塔を建立される事になりました。私も賛助する一人として是非彼の地に参りましたならばその頂骨を禮拜して来たいと念願して居ります。更に皆様には御多忙の中を私共の爲めに御聲援を賜り行を壯んにして戴きました事を厚く御禮申上ます」と述べられ東京宗務支所長清水僧正の發聲にて「天皇陛下萬歳」を三唱して納會。

此の日午後五時より上野清凌亭に於て一行を中心として宗務所、護國寺關係人、豊山中學、洋裁學院、各代表、親下の法類等四十餘名參集盛んなる壯行宴が開かれた。

四月二十九日 出發豫定なりしも船の都合で延期することになる。

五月一日 廣澤主事より大東亞省の渡航許可證が下附されたる旨報告に接す、日本郵船よりは乗船券の發賣が来る三日に行はれる旨電話あり今度は愈々確實性をおびて来た、安堵の胸をなで下す。

五月三日 午前中郵船に至り乗船券を購入、左の如き注意書を貰ふ。

戦時下海上旅行者の心得

——次の各項は戦時下海上旅行者の必ず心得置くべき重要事項——
——であるから之を熟讀して不時の場合の備へに資せられたい——

海上旅行の心構へ

切符に船名出帆日のないのは何故か

一、防諜上船舶の行動の秘密保持のため乗船切符には船名を表示せず唯乗船日時が示されてゐるに過ぎない
船客には洵に不便であらうがよくその趣旨を含んで

足手纏ひは旅に禁物

戴きたい。

一、乗船前は勿論のこと、下船後と雖も自分の乗つた船の行動を明らかにするやうな言辭は絶対に慎んで戴きたい。

一、戦時下とは雖も海上旅行を無暗に危険視する必要はないが、萬一不測の事故の發生した場合、犠牲を最小限度に止めるために、老人や病弱者、婦人や子供の船旅は出来るだけ自制して欲しい。

一、現下の情勢は船内方寸の空間と雖も無駄にする事を許さない故手荷物(手廻品)は最小限度に止めて頂き度い。

乗船後の心得

一、乗船後は船長以下乗組員の指揮命令に絶対に服従し船内放送や掲示には十分注意せられたい。

一、燈火管制を厳守して、甲板などでの喫煙は絶対に慎まされたい。又不用物などを海中に捨てるも本船の所在を明らかにする惧れがある。

一、乗船と同時に船室内に掲げてある救命艇の番號及び船内の階段や廊下等をよく調べ、いざといふ場合、直ちにその救命艇の前に集合すること。

一、救命胴衣の着け方は十分練習して置く必要がある。

一、端艇操練や防火操練には必ず参加して船長、船員の指揮に従ひ實習して置く事が肝要である。

一、寝る時は窮屈でもなるべく著衣のまま床につかれたこと。

緊急の場合

一、敵の攻撃等事故發生の際は、非常信號が發せられるから直ちに救命胴衣を着け、甲板上の所定の場所に集合すること。

御子様は救命胴衣は兎角忘れ勝だから必ず忘れずに着けて戴きたい。

一、非常の際、船の無線電信は即座に救援依頼を發信してゐるのであるから狼狽することなく、船長又は係員指揮の下に、沈着、敏捷且つ勇敢に行動して戴きたい。

一、救命艇には絶対に手荷物(手廻品)を持たぬこと。

一、萬一海中に飛込まねばならぬ時は沈みゆく船の渦に捲き込まれぬやうなるべく船から離れるやうにすること。

尙高い舷上から飛んでは水面で打つ衝撃が大きい爲氣絶したり、救命胴衣が毀れたりする惧れがあるから何かに掴まつて出来るだけ低い個所まで降りて来てから飛込むべきである。

その際救命胴衣で頸を打つて負傷したり、氣絶したりすることもあるから、救命胴衣は手でしっかりと抑へておなげればならない。

一、着物を出来るだけ多く着てゐること、水中では活動す

る必要がなくたゞ浮んでさへゐればよいので、如何に保温すべきかの方か如何に活動す可きかより更に大切に
である。
毛織物は特に効果が多いから毛のシャツなどは必ず着
込んで置くやうにしたい。かうして掴まるものがあ
れば掴まつて浮いてさへ居れば必ず救援が来る。
決して泳がうとしてはならぬ。

以上
海務院
船舶運管會

又各員の所轄警察署からは次の様な渡支身分證明書が下附
される。

大特高第六四五號	渡支身分證明書
寫真	本籍 東京都小石川區大塚坂下町六番地 現在所 右同 職業 護國寺住職 佐々木教純 明治八年五月十日生
一、支那へ渡航ヲ必要トスル	行先 廣東省汕頭及潮州府密教重興會 理由 在支密教重興會ニテ灌頂ヲ行フ爲

期間	自昭和十八年四月五日 至昭和十八年七月三十日
右證明ス	昭和十八年四月一日
大塚警察署長	警視廳警視 荒川 三 郎 團

總鍊證第七五六號	渡航承認書
本籍	福島縣相馬郡大麴村大字大麴七十六番地
現住所	東京都小石川區大塚坂下町十六番地
職業	眞言宗管長代理大僧正
氏名	佐々木 教純 六十九歳
一、渡航用務	中國密教重興會々員ノ切望ニ依リ同 會員ニ對シ傳法灌頂結緣灌頂ヲ修行 竝ニ現狀調査ノ爲
一、用務地	汕頭市
一、期 間	自昭和十八年五月一日(二ヶ月間) 至昭和十八年七月一日
右ノ者渡航申出ノ處必要ナリト認メ茲ニ承認スルモ ノナリ	昭和十八年四月三十日
	大東亞省團

高見代議士の案内で現下は、田中師同道にて台灣總督東京出張所に上京中の政務長官齋藤樹氏を訪ひ渡台につき、依
頼申上げた。この時閣下より特に左の如き注意あり。「台灣軍司令部、廣東、香港各部隊に充分連絡をとつて行かねば
ならぬ」と。

この御注意は大陸を旅行するものにとつては非常に重大な事だ出發間際の事で時間もなく充分なる連絡がとれなかつ
た爲、後に至つて度々不便を來した。
五月四日 廣澤主事から潮州よりの電報「潮州内準備終り、ひたすら御來着を待つ」を廻付され更に中北支の開教師調
べをも送り届けてくれる。機愈々熟す。
五月五日 大塚大増にて鴉片正主催の壯行宴に招かる、參集するもの、中村、田中、山田、篠山、廣澤、中、杉本の八
名、廣澤師より、軍慰問品として齒科醫療器械購入に關し隨分苦心をしたが手に入らぬ。汕頭到着と同時に左の手續き
をして貰ひたい。

- 一、軍の證明がないと配給品は買へないから小松部隊から森田五郎商店へ注文書を差出して貰ひたい。
- 一、齒科器械の品名明細書を至急宗務所宛送ること等の依頼あり之を約す。

「一つの仕事を爲すといふ事は一人の意志に依つて發企さるとも多くの人々の支援と盡力なくしては到底爲し遂げ得
られない事をしみるゝ感じた。幾多の面倒な事によつかる度に、人様の盡力を煩す度に世の中は本當にもたれ合ひだ
といふ事を痛感する。
現に今回船の切符などでも、申込んでから一ヶ月も一ヶ月半もたつても尋常の手段では手に入らぬといふので直接神

戸に行き過二無二乗船するのだと昂奮してゐる人に會つたが、戦時下船腹不足と人の出入が幅狭してゐるこの時に我々は呑気に殆んど座つてゐて切符が入手出来たのであるから、之全く中馬さんのお蔭である。」
愈々出發も明日となる、宗務所からは次の様な趣意書を送り届けられる。

大僧正佐々木教純中國巡化趣意書

今回眞言宗管長代理護國寺貫主大僧正佐々木教純が南支汕頭、潮州、廣東、香港方面へ巡化シ更ニ南京政府ヲ訪問スル所以ノモノハ該地域ニハ大正十三年六月以來中國密教重興會組織セラレ眞言密教ノ教理ノ研究勃興シ之ニ参加セル中國人ノ數ハ頗ル多數ニ昇レリ
而シテ斯會ノ實體ハ中華ニ眞言密教ヲ重興スルノミナラズ日本佛教ノ眞髓ヲ把握シ以テ日華兩國ノ完全提携ヲ確立スルニアリトシテ結成セラレタルコト分明ナリ
當時斯會組織ニ當リテハ眞言宗元管長故大僧正權田雷斧ヲ始メ隨員十二名ノ挺身護法ノ努力ニ依ルモノ預ツテ力アルコトハ特筆スベキモノナリ

其ノ後十有餘年權田大僧正ヨリ祕密灌頂ノ傳授ヲ受ケタル潮州ノ王弘願、香港ノ黎乙眞、上海ノ程宅安、廣東ノ慧光法師等ニ依リ入信スルモノ日ニ増シ隆盛ヲ極メタルニ排日思想漸ク根ザシ眞言宗祖弘法大師及日本人權田大僧正ヲ信仰スルハ正ニ親日者ナリトノ官憲ノ斷壓ト輿論ニ支配セラレ加フルニ支那事變勃發以來會員ハ重壓下ニ四分五裂ノ状態トナレリ

然レドモ昭和十三年三月香港黎乙眞三周忌法要ニ當リ其ノ未亡人遺弟等ハ故權田大僧正ノ法流ヲ繼グル日本密教高僧ヲ招カントノ念願アルヲ聞キ事變下ニモ拘ラズ軍官ノ協力ノ下ニ本宗ニ於テハ萬難ヲ排シ前大正大學長大僧正加藤精

神及隨員二名ヲ派シ其ノ法要ヲ嚴修セシメタルトコロ關係者ヲシテ歡喜愉快セシメタリ

其ノ後該地ニ於ケル熱烈ナル信者等ガ一切ノ迫害ヲ排除シ祕カニ弘法大師及權田大僧正ニ淨心ヲ運ビツツアルヲ聞キ昭和十七年六月權田大僧正ノ隨員タリシ戸川憲戒僧正ヲ派シ會員ノ糾合、會ノ再興ニ當ラシメシトコロ渡支以來僅カニ半ケ年ヲ經ザルニ中國人ノ法弟トナレルモノ壹百六十一名信徒二千餘名ヲ算スルニ至レリ

同年十月以後戸川僧正ハ廣東省地域ニ約數千名ノ信者ヲ糾合シ得テ、香港ニ入り現ニ會ノ再興ニ奔走シツツアリ

茲ニ於テ現地〇〇部隊長、汕頭領事、同警察署長等ノ諸士ガ斡旋ノ中心トナリ、機愈々熟スルヲ見タルヲ以テ曩ニ權田大僧正ニヨリ傳授セラレタル結緣灌頂、傳法灌頂等ヲ執行シ徹底セル信仰ノ上ニ立チ、眞ノ理解ト融合トニ依リ中國人ヲ結集シテ更ニ日華親善ニ資セントシテ茲ニ今回ノ行ヲ發願セル次第ナリ

昭和十八年五月一日

大日本眞言宗宗務所

東京出發

五月七日 前夜來盲腸炎を起し一晚中苦痛甚だしく、夜明けを待つて護國寺さんに連絡する、終夜責任感に問はれて一睡も出来ぬ。

早朝醫師の來診を待つて結果を聞く、然るに再發の事であり、且輕微であるから一兩日經過を見て最後の決定をしては如何との事にて一縷の光明を見出す、それにしても御一同及多數の人々に御心配をかける事は誠に申譯がない。

十時過ぎ宗務所の吉本、廣澤、吉田、森岡諸兄の見舞を受ける、又千守僧正、横山兄も來られる、皆さんのお話に依

ると「一行の東京驛出發は實に堂々たるものであつたそうである。

佐々木大僧正は東京驛長の先導にて貴賓通路より御乗車されたとの事、皆高見代議士の御盡力に依るものである。かゝる事は宗派始つての事ならん、それにつけても各位の期待に反せざる成果を収め度きものなり。」

五月八日 病勢着々退勢を見、此の調子ならば参加の自信を持つ事が出来る様になつた。

痛みも殆んどなく、明一日静養すれば確信を得らるべし。九日夜或は十日朝出發する豫定、兄より大僧正以下御一行は二時二十二分名古屋を無事通過され之を御見送りした旨速達を以て知らせてくる。

五月九日 竹内一男氏の御盡力で汽車のキツプも寢臺券も購入出来た。今は八時大阪行きにて出發する事に決定。佛天の加護、未だ御見捨て給はざるか。病床から抜け出て支度に取り掛る。

何回となく延期された出發である。子供等と一緒に揃つて本尊様に祈願をなし、六時にはそろ／＼町の人々も集つて来る。八時勇鬮長途の旅の人となる。お蔭で寢台もとれ樂々と旅も出来る、翌朝五時には車窓から關西の風物を眺めながら。

再びの病にかちて、今日の旅

七時大阪着、省線にて神戸に向ふ、一路オリエンタルホテルに来て見れば一行は、高野、長谷詣りに行かれた留守である。かくとは知りつゝも何となく寂しきものなり。明夕六時にはお歸りになると聞き時間もある事なれば、見物にもと思ひしが身体も大切と自重して終日部屋に引籠る。

五月十日 豫定の如く一行に佐々木宏純師を加えて高野山より歸宿せられる。小生の参加したるを一同心から喜んで頂く。紅茶を啜りながら暫時談話、明日の出帆もあり、一同の心も明るく荷札の書き込み、荷物の整理にも、頗る明朗なり。

乗 船

五月十一日 一通り面倒な検閲を受け午前十時三十分乗船、船は灰色に塗りつぶされてあるが〇〇丸である。埠頭に來て見れば、船客が荷物を下して検査を受ける様はまるで玩具箱をひつくり返した様である。中には船が遠うと言つて追ひ歸されるもの、人混みの中を縫つて荷物を満載した車が右往左往する様は實に慌しい光景である。船に乗ると時間もあり、急に環境の變化にボツとして終ふ。本船の廻りは航行に要する荷の積み込みでガラ／＼ゴロ／＼賑やかな事である。だが戦前の乗船と異り、手續は至極面倒であるが、見送り等の煩しさ。テープなどのセツなさはなくさつぱりしたものである。

今回は見送り人は全然埠頭の入口で遮断され乗船者以外は立入り禁止され、宏純師は切角見送りに來られたが、あとがつかえるのでサツサと一同は入つて終ふ。これが戦時型の乗船である、宏純師には甚だ氣の毒であつたが又止むを得ない。簡単なお別れである。

台湾を常に往復する人の話に依れば本船は内台航路の最優秀船であるとの事、正午食事中に出帆。船團航行で〇艘併航し、静かなる瀬戸内海を往く。船に乗ると戦争を身近かに感ずる。一步踏み出したと言ふ自覺と、船員や船客などの話が自然其の方向に向く、受持ちのボーイの話では今回本船が神戸へ廻航中〇〇列島附近で敵の潜水艦を發見して爆雷を〇發投下したとの事である。

敵とか、潜水艦などと言ふ言葉がしきりに談話の中に飛び出して來る。

五月十二日 本船は優秀船の足を見せ、夜中快適の航行を續ける。既に夜明け近く關門の風物に接す、船内放送はしき

りに入港の注意を報ずる。門司港では〇百名も乗船するそうである。娯楽室では烏鷺を戦はすもの、歡談に花を咲かせるもの、そこへ朝日新聞門司通信局の松岡記者の訪問をうけ、聲明書をお渡し、現下より補足して説明あり、出帆の報らせと共に別れる。

午後三時遭難演習即ち救命胴衣の装着並びに指定ボートの位置につく演習をなす。

驅潜艇に誘導警護されて行く船團は本船と〇〇丸とである、勇ましくもあり。又無言の中に迫るものがある。

五月十三日 夜半來波高く船体の動搖も從つて激しく現下の部屋を訪うて慰問す。

佐世保から船團に〇〇丸が加はる。(これは九月初旬台湾近海で敵潜水艇にやられて終つた)皆快速船なので豫定よりも早く基隆に到着するそうである。

愈々昨夕來危險區域に入つて來た。船内の空氣も緊張して來る、十時最後の遭難演習をする。今度サイレンが鳴ればほんものであると、船は注意深くデクザコースを取つてゐる。無氣味な緊張が船内に漲る。船内の容子を見てゐると面白い。人間といふものは本能的に自己保全を考へるものらしい。考へるとか工夫するものではなく、自然に動作するものらしい。

デツキを歩くにも浮袋を持つて歩く、夜寝る時も厚い冬のシャツ、又その上にジャケツを纏うゲートルをつける等恰度戰場で武士が武装をつけたまゝ寝る様なものである。船は今何處を何う航行してゐるのか船長を除いては何人も知るものは無い。

五月十四日 朝來快晴、實に奇しき程の風である。昨日來少々浪に參つてゐた連中も今日は元氣をすつかり取り戻した。晝頃になると哨戒の飛行機が本船の周囲をしきりに飛ぶ、見れば腹には魚雷を抱いてゐる、心強い限りである。台湾も近くなつた事を知る。平穩だつた海もいくらか波立つて來た様である。

基隆 上陸

五月十五日 肝膽を砕く苦心の航行、本船は〇〇海を南下し更に東上して基隆に入るらしい。月光彌が上にも冴え三時頃には燈臺も散見する。愈々入港も間がない。長途の航行を終つて曉暗をついて東天の白む頃には船中全く安全感に包まれ早や六時には朝食を済ます。

八時上陸、驛前船越旅館に投じて小休止。宗務所、護國寺、汕頭に電報を以て報告す。

驛前の椰子の木が如何にも南國を思はせ。支那服を着た婦人が右往左往する、日射しは痛い位に強い。パラソルを翳して歩くもの全てが我等には珍らしい南國調である。電話を以て連絡すれば十一時頃台湾別院主事小野君が來られ種々斡旋せらる。

先づバナナ(本島ではキンテフと言ふ)の新鮮なるを頂く、實に美味しい。晝食後台北に向ひ三時三十分到着吉川法城主監は檀信徒多數と共に迎えられ、自動車にて別院に入る。

小憩の後、汕頭行の船の連絡を聞けば軍の指令なきものは、容易に乗れぬとの事、八方手を盡して頂いたがよい分別がない。台湾軍司令部に田中師と訪ね陸軍省より連絡の有無を問ひ合したるも、何等の連絡はないとの事、明日出帆の便船には残念ながら乗れない。依つて高見氏戸川師に更に台湾軍司令部宛依頼して貰う様打電する。この日台北帝大教授今村完道先生の訪問をうく。

五月十六日 現下を別院に残して、我々は門前の「きくや旅館」に泊りたるを以て朝食後本尊様と現下に挨拶を済まし

乗船の事が不安でならず東京の懇親なる吉橋戒三中佐に台湾軍宛連絡方打電依頼す。氣を揉んでばかり居ても仕様がな
るので一同で台湾神社、龍山寺に参拜する。

龍山寺は總石造り結構極めて壯麗、本島人街の中央にあり、本島に於ける寺廟の代表的のもので民間信仰を蒐めたる
ものの如く、曹洞宗に所屬してゐるらしい。本島の人々は頻りに額き、供物、線香を献じ口に何事かを念じて苔を擲ち
長い竹の籤を引いては占つてゐる。

筭とは竹根で造つた外凸内平の三日月形一對のト具である。

五時から今村先生の大學官舎に招かれ、猥下も、先生の教え子である我々もバスを利用して行かうとバスを待つ裡に幸
ひ先生の御子息に偶然會ひ案内せらる。奥様の手料理にて心からの待遇、久し振りに家庭料理の温かさに接し、舌鼓を
打つ。冷しビールを頂くほどに懐しい豊中時代の懐古談に花が咲き。今は帝大の勅任教授であつても、我々にとつては
昔ながらの懐しい先生である。十數年ぶりで其の温容に接して、一同の喜び限りない。あの滋味のあるお聲、温和の裡
に人を抱擁して止まぬ人格、昔しながらの先生であり慈父に接する様である。

先生は渡支に就ての御注意やら、知人に對する紹介状を下さる。更に本島の宗教行政など詳しく談られ、まるで先生
の宅へ来たといふよりも親戚の家に厄介になつて居る心持になつて終う。三時間に亘る會食も一應閉ぢ宿舎に歸る。

今日はとても暑かつた、朝から一日中暑さと汗に悩まされ、恰度内地の七月中旬の氣候である。

急に炎暑に投じて身體の調子が合はぬので一同の苦しみは又格別である。名も知れぬ南國の植物が、葉に花に強烈な
香りを發して居る。それは暑さと戦ひ尙且笑つてゐるのだといふ感じである。互にしつかりやらう、炎熱には敗けない
ぞと心に誓うのであつた。

台 北

檳榔樹の並木、東西南北に記念として殘されたる支那風赤煉瓦の城門。新しく企畫された街の姿は、廣く活き／＼と
してゐる。

南國の日射しは強い、市民の足人力車は街に辻にいくらでも居る。車夫は瘦せ足は遅い。バスはガソリンを積んで勢
ひよく走る。麻の半ズボン、ボナマ、バラソル、烈日に南の人は挑戦してゐるかの様である。朝はどんよりと曇り、夜
が明けるのが遅く、晝間の暑さがチーンと耳許に迫る。

本島に着くや上陸トタンに警戒警報發令中と來た、別院に來て見れば、警防團の詰所となつてゐる人の動きにも唯な
らぬものがあり心もグツと引締る。聞けば本島は警戒警報は頻々であるとの事、大陸と接し、前進根據地とし南に睨み
をきかせてゐる本島としては又止むを得まい。

従つて防空壕及その施設等極めて實際的で、人の動きも非常に緊張してゐる。

街に出て驚く事は物資が豊富で販賣がそれ程窮屈でない事である。何を買つても點數は不用、殖民地の關係上、人心
の動搖を考慮しての處置と察しられた。又本島人は智識程度も一般的には低く、従つてデマに惑はせられ易いからであ
らう。

台湾の宗教行政に就いて

本島は民間信仰は別として、官では北白川宮能久親王殿下を御神體とした台湾神社を中心として仰ぎ奉るを以て統一

され、太麻は各家庭に配布され信仰上一本立てとしてある、従つて佛教に對しても、民間の信仰を黙認してゐるといふ程度であつて事公の立場からは全然問題にされない。

然し實際問題としては各宗共に台灣そのもの重用性を重視してか相當に立派な人物を送つてゐるらしい。法は人に依つて弘まる。大体に於て各宗の措置は妥當であると思ふ。此の點今村先生も同意せられて居た。

高野山別院

故に高野山に於ては（斷つておくが眞言宗としてではない）台北の弘法寺を廢して本年始め高野山別院として陣容を整備し再出發をされたとの事である。眞に時宜に適したる措置と察せられる。從來各地共に開教師は兎角内地の喰ひ詰め者といふか人を得なかつたものであるが。嚴選せられ相當な人物が、外地に送られ



台神社參拜終テ

る事は喜ばしい事である。

然し眞言宗として一考を要する事は開教上に高野山と二様に組織を持ち、二様に働きを持つといふ事である。それは眞言宗自体の弱體性を外部に曝す事であつて、充分なる研究と決斷を要するものと考へる。

五月十七日 別院に於て親下導師の許に支那事變並に大東亞戰爭陣歿英靈追悼會及び戰勝祈願祭が午後二時より執行せ

られた。法要は奠供に始まり、表白、唱禮、理趣經、後讚、大師寶號、光言終つて、別院主監吉川師の抄抄あり、嚴肅裡に法要閉づ。參會者は軍官民各界の代表者及び別院檀信徒であつたが念の事として參拜者の少かつた事は遺憾であつた。この日別院檀徒總代大藏徳太郎、守田哲二、永井祐通の三氏に親下より賞狀授與さる。（佐々木親下の當日談話は

別項台北日々新聞記事載録）

汕頭行便船を攔む

法要終つて汕頭行便船の事を焦慮し。親下に田中、杉本同道申上げ總督府に伺ひし處、總督閣下は東上され留守、齋藤總務長官に面接せんとしたるも歸宅後なれば止むを得ず官邸を訪ね。親下、田中師は一面識の事なれば和やかな空氣の裡に話は進められ。全てを呑み込み下され、直ちに自ら電話を台灣軍參謀長閣下、東亞海運等におかけ下されたので、最近の船を以て乗



台北高野山木堂前（中親下）

船確定した。我々は直ちにその足にて軍司令部に參謀長閣下を訪問乗船方を依頼せし處に、諸下され、前日來の不安は夕立ちと共に掃された。東亞海運に行き連絡をとる。

二、三日來の焦燥不安は茲に全く解消し晴々とした。

宗教を通じ日華親善

渡支の佐々木大僧正談

眞言宗大本山護國寺貫主佐々木教純大僧正が齋藤管長の代理として南支汕頭、潮州、廣東、香港方面へ巡錫し各地皇軍將兵を慰問する爲め六名の僧正を伴ひ此程寄臺したが、今次巡錫の使命に就て佐々木大僧正は次の如く語つた。今より二十年前の大正十三年六月以來南支那には中國密教重興會なるものが組織せられ眞言密教の教理の研究熱が起り汕頭、潮州を中心として之に参加した中國人の數は頗る多數に上つた。此の重興會の實體は中華に眞言密教を普及するのみでなく、日本佛教の眞髓を把握せしめそれによつて日華兩國の完全な提携を確立し親善關係を増す爲に結成せられたもので、當時斯會の組織に就ては眞言宗元管長故權田雷斧大僧正を始め隨員十二名の挺身護法の努力に依るもの尠くない、其後十有餘年權田大僧正より祕密灌頂を受けた潮州の王弘願、香港の黎乙眞、上海の程宅安、廣東の慧光法師等により入信するもの日に増し隆盛を極めたが其後英米の使族により邪魔が這入り引續き支那事變の勃發となつて會員は四分五裂の状態となつた、然し昭和十三年三月香港黎乙眞三周忌法要に際し眞言宗では萬難を排し前大正大學長加藤精神及び隨員二名を派し、その法要を嚴修せしめたところその反響大きく關係者を歡喜愉悅せしめ、其後熱烈なる信者等が一切の阻害を排除し秘かに弘法大師及び權田大僧正に淨心を運び漸次歸依する傾向あるを聞き、昭和十七年六月權田大僧正の隨員だつた戸川憲戒僧正を派し會員の糾合會の再興に當らしめたところ、渡支以來僅かに半歳ならずして中國人の法弟となつたもの百六十一名、信徒二千餘名を算したが、同年十月以後戸川僧正は廣東、香港方面に活躍、會の再興と共に宗教を通じて日華の親善に資する爲めに奔走してゐるやうな次第で、今回關係方面

の御幹旋の下に私共巡錫團一行が之等各地に巡錫、皇軍將兵の慰問をなし日華親善兩國提携の上に及ばず乍ら協力出來れば洵に仕合せと思ひます。潮州の聖地開元寺も出來ればおとづれたいと思つてゐる。尙南支一巡後は南京政府も訪問する豫定である。(台灣日々新聞五月十八日記事) 旅行に出て最初の記事であるから特に載録する事にした。

國語を護れ

台北市内に出て痛感することは日本語が確實に護られてゐることである。

本島人女車掌が「發車」といふのが耳に障るが「停車、通過」等、とに角正しい日本語を使用してゐる、内地のそれと比べて恥しい様な気がする。

内地ではオーライ、ストップなど言ふて帝都で日本人自ら國語を破壊してゐるのを思へば感慨深いものがある。

我々は東亞圈の原住民を引提げて、文化に思想に正しく指導せねばならぬのだから大いにこの點に留意し國語の純粹化を心掛けねばならぬことを痛感させられた。

五月十八日 今日十一時から別院關係人の招待會があるといふので、猥下は贈呈する御染筆の揮毫に早朝から汗だくなつて居られる。田中師と杉本は篠山君が先日龍山寺參拜の機を失したので案内をしてあげる。

今日は參詣人が多く仲々賑つてゐる。歸途本島人街を通つて來たが成程寺廟の多いのには驚いた。所定の時間に招待會に列し、直ちに東亞海運に車を飛ばして打合せをなし、又總督府の金融課に金圓持出しを願ひ出たが、係の人は非常に親切に教示せられた。その足にて台灣銀行本店業務課に澁谷氏を訪ね願書を提出、明十九日九時再出頭を約して歸宅する。

東京吉橋中佐から「船に乗る様陸軍省より台湾軍宛手配せり東亞海運に連絡せよ吉橋」との電報あり、又護國寺よりは「高見先生の盡力により訪問豫定地との連絡ついた安心して巡錫せよ」と來電あり、昨日來難件乗船問題は明確に解消した原因も此處に明瞭になつた。

軍司令部からは電話にて二十日基隆に至り松山部隊と連絡せよとの事、船會社からは打合せに來いと言つて來る、急に忙しくはなつたが一同の気分は明るい。

親下は安心され中君を従へ郊外山の温泉「草山」に行かれる。それにも金圓持出しの手續は仲々面倒である。

五月十九日 氣温はグツト下つて大變凌ぎよい。二、三日來暑さに喘いだ一行にとつては慈雨である。杉本は約束に基き東亞海運に切符購入に行く。特別の扱ひで一などが四枚二等が三枚である。係の人から又乗船其他儲備券兌換等の注意を受ける。田中師は台灣銀行本店、總督府に行き信用狀（金圓持出の）下附の手續きに行く。他の者は出發に備へて荷造り、及びその發送にかゝる。これで何時でも出發出来るようになった。數日來の出來事を顧る時如何にも自己の無力なると又世の中の慈悲に生きてゐる事を痛感するのである。

田中師は親下に報告の爲草山温泉へ行かれる。午後二時から始めて手があき、自分の身体となる。

午後岡本執事から「軍に連絡せよ」との電報來る。

五月二十日 午前中休養、宿の女中に勧められ十一時よりお別れに市場の隅にある「來々軒」に台灣料理を食べべ一同で行く。雰圍氣の汚なさ、犬猫が食卓の廻りに來て喰ひ残りをあさるさま、料理の鹽辛いのと、穢いのととても咽喉を通らぬ。大分残してホウ／＼の休で退散。時間がギリ／＼に迫つたので大急ぎで台北停車場に車を飛ばす。餘り急ぎ篠山君と杉本とは岡村、中兩氏が遅れたるとで焦り汽車を誤つて乗り「萬華」に逆戻りしてしまつた。

その爲めに一時間後に出發される親下、田中師と同車するといふ珍談迄演じてしまつた。

基隆に至り神戸館に投ず、この家は戸川師がいつも泊る家である、どの家も船を待つ人々で満員である。

基隆出帆

五月二十一日 昨夜來降雨頻り。旅館を出發するのに困難す。二臺の自動車に分乗して埠頭に至る。荷物の検査、金の持出、證明等で人々の眼は血走り、場内はゴツタ返してゐる。だが我々は油頭領事館の證明と連絡があつたので割合アツサリと検査も済み東亞海運の〇〇丸に乗船（この船は七月初め一行の歸航船が敵の襲撃を受けた時不幸にも撃沈された）發航と同時に今日は風もあり、船は揉まれ晝食に食堂に出ない人も相當ある。又基隆港を出ると直ちに危險區域であるから船員も緊張し遭難演習を行ふにもキビ／＼して居る。午過ぎる頃には左舷遙か煙るが如く、島と燈臺が見える澎湖島であらう。船は遮二無二速力を出してゐる。危險區域は全速力で一気に乗り切るであらう。

先回黎乙眞三回忌追善に香港へ渡つた時の神戸解纜が二月二十一日、今回又しても基隆を出帆するのが五月二十一日共に眞言宗徒として忘るゝ事の出來ない、お大師様の命日廿一日である、奇しき因縁とも言はんか。

山本元帥戦死の報を聞く

浪は益々高く動搖は愈々激しい。突然船内のラジオは莊重嚴肅なる口調で重大なる大本營發表があります暫くお待ち下さいと、船内の空氣は締めつけられる様にシーンとする。

耳を澄ましてゐると突如、聯合艦隊司令長官海軍大將山本五十六は南方最前線に於て本年四月前線指揮中敵と交戦飛

行機上に於て壯烈なる戦死を遂げたり」

一度に身体中の血が逆流し熱くなりガーンとして終ふ、何とも言へない悲痛な感に打たれ暫し爲す處を知らずといふ態である。頭の中にそれからといふものは戦争勃發以來の事が走馬燈の如く往來して何も手につかない。やつと氣がつき靜かに座して英靈に感謝し回向をなすといふ始末であつた。

さしも高かつた風波も夜十時頃からは段々靜まつた。空には月光冴え何事もなかつた様に船は靜かに氣罐の音を曉暗の浪間に残して進んで行く。靨下は餘り時化たので晝も晩も食事されぬので大分疲勞された様である。

田中師は汕頭上陸並びに爾後の事に就て心配され、

一、汕頭上陸の際は白衣改良服折五條たるべき事

一、滞在間は禁酒禁煙は勿論、言語座作進退は如法たるべき事

一、特に大僧正は大阿靨下と申上げ各自間に於ても敬語を附して呼稱する事

等を書き傳言されて來る。

五月二十二日 奇麗に晴れて大陸の山々は我等の眼を引き付ける。厦門入港である。赤く禿げた山々、山上の白い高層建築が美しく手に取る様である。日の丸を立てた水上艇が勢ひよく本船に向つて來る。型ばかりの檢閲が實施される。

それは豫めボーイから渡された内地から持つて行つた防疫實施證明書を手にして左舷に整列して防疫官に見せれば終りである。

厦門は港に入つた丈で上陸禁止遙かに大觀を眺め出帆するのも残念だが又止むを得ない。コロンス島、厦門にある大きな建物は人氣も無く孤城の様な寂しさを保つて眠つて居る。聞けば日本軍進駐前後英米人は或は引擧げ、或は虜はれ

今は全く住む人も無き状態であると。占領區域からは日の丸や軍艦旗を押し立て、浪を蹴たて、軍隊輸送をしてゐるの

を見ると頼もしくも力強い。

濃淡墨畫の様な大陸の風景に抱かれた物語の港厦門を出帆したのは〇〇時であつた。

船は大陸寄りに安全コースをとり、濁つた海水を切つて一路汕頭へ、夜中には汕頭港外に達し翌朝を待つて入港するそうである。一同は使命遂行の情に又目的地上陸を想ふて寢もやれぬ。

汕頭

一 沿革

汕頭は昔は一漁村であつたが初め外國人が港外の南澳島に來て、阿片輸入の貿易をし後幾何もなく、其根據地を港口の媽嶼に移した。その當時は土人の外人排斥が甚しく媽嶼にも入れなかつたが、一八五八年の天津條約によつて、潮州の名義で英國人だけの來往を許し、一八六二年に始めて開港した。そこで外國人は角石に居を移し、一八六七年頃初めて汕頭に事務所を開くやうになつた。爾來、

德記、元興、太古、怡和等有力な外商が續々として汕頭に現れ、これ等外國人の來往が頻繁となると共に土着商民の活



汕頭上陸の熱烈狂歡的迎

雖も盛となり貿易も盛大となつて最近の貿易年額は六千萬兩以上（大正十年頃）に上り將來益々發展の氣運を示して居つた。

二人 口

二十年前私が來汕した時、約八萬人内外と言はれ、それも新開地で各地方の居留者が多い爲め上元、清明、中元、中秋、冬至には故郷へ歸省するので市内人口は半減すると言はれて居つたが二十年後の今日では定住者十七八萬人と言ふことである。

三 氣 候

隋志に「嶺東二十餘年郡土皆下濕號瘴癘」とあるが、文化が開けてからは、氣候は概して適順であつて中國有數の健康地と言はれてゐる。春夏秋があつて冬季はない。十一月から四月までが秋春であつて、その内でも、一月上旬から二月に亘る間は寒い位である。五六月は雨期であつて、細雨霏霏、濃霧四圍を罩め、衣服、書籍、什器類全部カビを生ずる。七月から十月までは夏期であつて炎威赫赫燬くが如く、室内溫度華氏九十度にもなるが絶えず涼風が吹くので凌ぎ易い。只毎年七、八月頃には臺灣と同様暴風が數回來襲する爲め、農作物殊に甘藷の被害が大きく、又船舶の災厄もある。（戸川師著汕頭小案内に依る）

汕頭上陸

五月二十三日 豫定の如く汕頭入港、夢に迄畫いた汕頭上陸である。胸の高鳴るのをどうする事も出来ぬ。八時三十分領事館警察差し廻しのポートに迎えられて上陸。直ちに高井領事の苦心造營された汕頭神社に正式参拜し、九時三十分

密教重興會に安着各所に於て記念撮影。

埠頭では大道兩側には花束を各自手にして華人が堵列し、中學校、小學校の生徒までもズラリと列ぶ。兩側の家々の二階、三階の窓からは餘りの雜沓に兵隊さんが怪訝な顔をして眺めてゐる中に貌下は波汕の挨拶をされる。之を台灣邦人で密教會の顧問をしてゐる熱血兒陳天助氏が元氣一杯に通譯する。「佐々木大僧正歡迎の看板を押して、一行は車に乗り行列に送られて密教會に進む。

途中道路上老婆が五体投地の禮拜してゐる姿を見て其の眞剣なのに驚かされた。

密教會の前には男女會員が白衣法服に折五條或は袈裟をかけ花を持し一同が會堂に入ると讃歌を唱えつゝ我々に向つて投華する。花の嵐の中を階段を昇り、休憩室に入る。のぼせ上つて頭がガン／＼して来る。

汕頭密教重興會館

此處で一吋南支密教の中心道場たる密教會の建物の説明をしたい。今の建物はズット以前は小學校の建物で、その附近では餘り大きくはないが珍らしい鐵筋コンクリート建である。（汕頭では普通はドコを練り、煉瓦を積んだ建物が多

50)

一階に入るとすぐ廣間、疊敷位で、突き當つて中央に二階に通ずる階段がある。正面には中國式に莊嚴した釋迦、阿難、目蓮、文殊各尊像が安置され専ら華人の念佛修行の爲に設けられ。平素は三階は純日本式に兩界曼荼羅がかけられ密壇が莊嚴されてある。元々この建物は密教會が使用する迄は念佛堂として使用されてゐたそうで二階はその名残りがその儘に保存されてゐるのである。

従つて三階に参詣するものは密教會としても餘程關係の深い人でないと入つて來ないそうである。

我等の宿舍

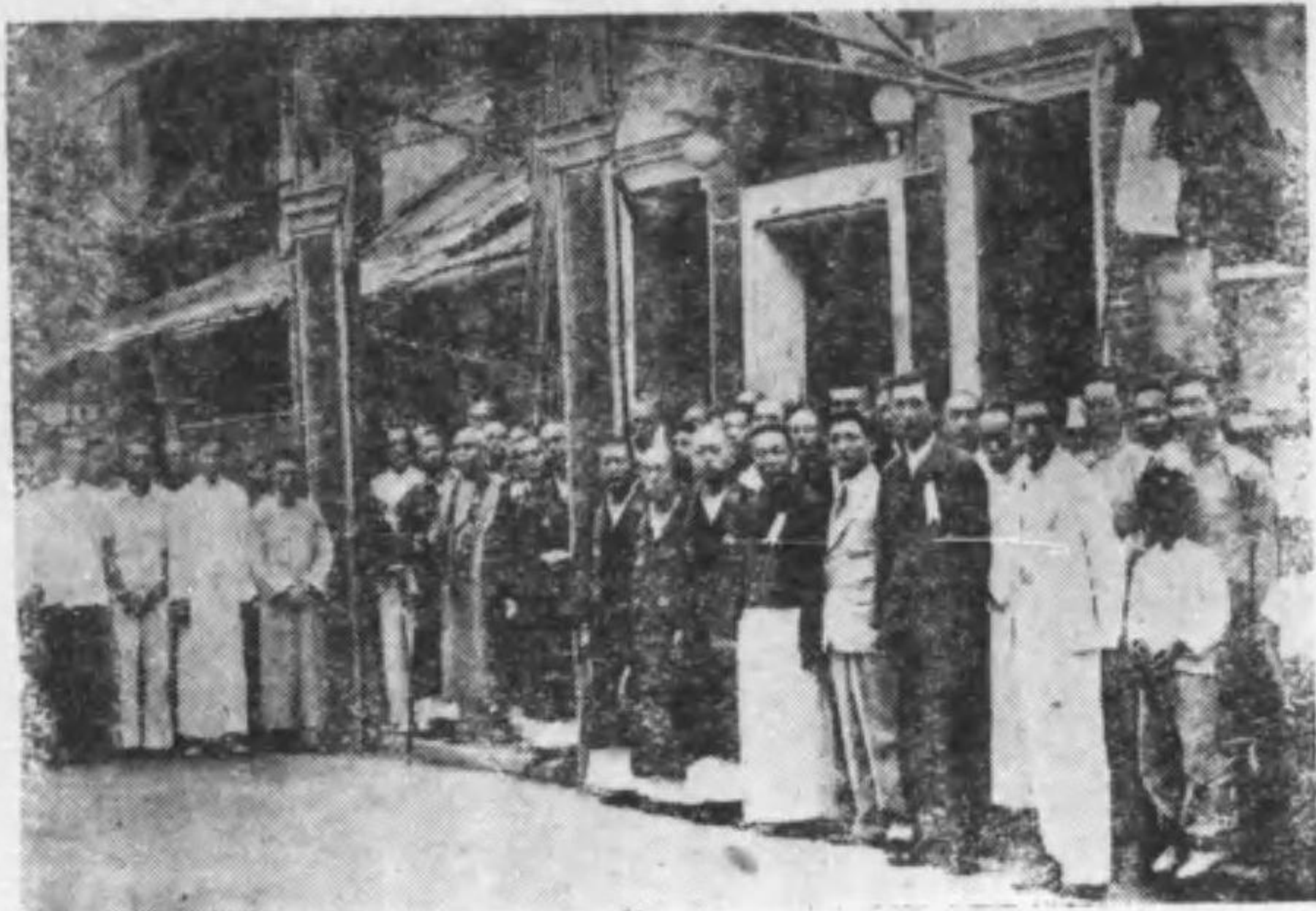
我々の居室兼寢室はこの三階で（灌頂の爲め法具一切が會場たる同榮會館に運ばれガラ空きになつたから銘々の寢臺と蚊帳が搬入され、バスは態々借り受け便所まで新らしく造られたといふ。

特に寢下の蚊帳などは儲備券で千五百圓もしたそうである純白の紗で出来た物語に出て來る女王様が用ひられる様なものである。

寢下の部屋は平素戸川師の居室を今回特に副領事さんが用材（な

いから非常に高い）を寄附され、疊を入れて改造されたのである。我々一行が渡汕する事が戸川師に依つて計畫され、準備する事約六ヶ月間會員は業を擲つて没頭し、法要の稽古に専念したそうである。

中にも我々の宿舍を如何にするかは論議の中心となり、領事館及び陳天助氏などは失禮があつてはならぬ、とて華南ホテルにせよと主張し軍からは中央の指令もある事であるから大僧正及び隨員一名



汕頭密教會前（同平路一〇六號）

は滞在間の宿泊は無料にするとの厚意ある申入れもあつたそうである。

然るに會員一同は折角、汕頭には密教會があり、會員も結集してゐるのであるから、他にお泊めしたとあつては我々の面目が立たぬ、何んなにもおもてなしをするからとの熱意に動かされ、最後には戸川師の裁断を仰ぐといふ事になりホテル宿泊の件は御辭退し、一行を密教會にお泊めする事に決定したそうである。

これを以てしても如何に彼等が心を籠めて我々を迎えたかといふことを知る事が出来る。故に滞在間は痒い處に手が届く様で三度／＼の食事にしても、良い材料を會員が持ち寄り一々料理人を女會員が更代で督勵し、買物にも、外出するにも、我々に心配をさせぬ。又重な會員からは日々使用人を差し向け、我々の身の廻りの面倒を見るといふ風であるで振り返つて見ると何處よりも行き届いた待遇であつた。

汕頭地區事變前の實情

南支一帶は抗日排日の策源地であることは既に御承知の事であるが支那事變が勃發して、この地方でも、日々事故が續出惹起し邦人の犠牲者も多數出したそうである。

昭和十三年頃であるが極端な例は官服を着た日本巡査が白晝大道で民衆に虐殺されたり。當時三十數萬圓もかけた日本領事館でさへ暴徒に襲はれて破壊されたのであるから日本人商社や住宅が片つ端からたゞき壊されたのはいふまでもない。

戦々怖々として日々を送る居留民が最後の引揚げ船が汕頭に入港した時は豪雨の中を衝いて跣足の儘命からがら馳けつけたそうであるが、この惡虐非道、徹底せる排日憎惡の嵐の中に、不思議にも、華人會員は好漢狩りに、或は手段を盡せる迫害の中に權田大僧正、王弘願兩師の寫眞、灌頂法具、兩景曼荼羅、四面器法具一式が密教會々員の手によつて護

り通されたと言ふ事は會員の殉教的な信仰を遺憾なく物語るものであると思ふ。

更にこの暴虐の中に日本人墓地を襲つた暴徒の一族は數十基ある墓碑を悉くハンマーや鐵棒で破壊したがその中で二基の碑がこの危難から取り残されて居る、調べて見ると二基共に學校の先生であつた。(我々も日本人墓地に行き回向した時に見たが)中國人は一度恩を受けた人、又は師匠、先生に對しては絶対に反かない美風を持つてゐる。彼等は此の悲惨の極の中にもこの美風を失はなかつたのである。日常若し彼等の一人が忘恩の行爲を冒したならば、その者に對しては人非人として絶対に交際をしないと云ふ位である。こゝに我等の渡支する意義も存するのである。

歡迎會

この日一杯陳天助氏、戸川師、扇谷師からも熱心に會員の事、街の事、次々に聞いた。皆胸が迫る様な事ばかりである。談話中にも到着匆々であるから、敬意を表しに来る者が引きも切らず。中國人は何んな高位高官の人でも。或は一流の資産家でも我々に會ふ時は丁寧に五体投地の禮をしてから挨拶をされるのには恐縮した。

國曆五月廿三日

大僧正暨諸大法師洗塵潔淨素酌恭候

光臨

汕密教重興會敬訂

席設 本會禮堂

時間 下午新六時

早速我々の手に桃色の金文字模様入りの立派な招待狀が渡される。招待狀には上の通り記されて居た。

新六時から密教會主催で本會の禮拜堂で歡迎宴が催ふされたが集るものは會の中心人物ばかり四十餘名一同を代表して陳光烈氏(同氏は元陸軍中將で、洪兆麟將軍麾下の武將で又舊國民政府の參議(日本の大臣)

であつた。深い學識を傾けた鄭重な歡迎の辭に始まり。次々に運ばれる手のこんだ精進料理は十數種類何れも奇重な珍味馳走で眩ゆいばかりである。

御馳走が運ばれる度にお茶を手にして乾杯するのが禮儀であるらしい。

今迄聞いた此の世にもあるまじき悲惨の極、此の世ながらの生き地獄の世界があるかと思ふと今夕の如く上流の人々は食に飽き、御馳走の中に埋もれてゐる、何たる對斜的な現實であらう。同じ國土に生れた人達が兩極端の世界に生きるといふ皮肉な現實である。

私は今更ながら日本の國に生れた有難さを泌々感じるのである。

電燈は八時から十一時までしか點かない。それは嘗て抗日軍が撤退する時發電所を爆破して行つたからで、今は苦しむ中から重油で發電してゐるそうである。密教會の熱心なる後援者であり、指導者であり、戸川師の絶対信頼してゐる組織部長とも言ふべき陳天助氏は會の現狀に就いて次の如く述べて居られた。

密教會の現在會員は、許少榮市長、陳光烈閣下、林柏梁氏等汕頭の主要なる人物は程んど入會し熱心なる指導者として働いてゐる。その数は凡そ六百名日々入會者が殺到し、膨脹してゆくので今は嚴選主義を採つて居る。それは數の問題でなく、質の問題であるからだ。

細民などは一切斷つて相當の地位にあるとか。學識信用があり、恒産があるとか、多少でも人が認めてゐる者でないといふ入會を許さない。

然もそれには理事が二名以上保證しその上に戸川師が許可を與へねば絶対に入會をさせぬと言ふ事である。

戸川開教師の苦心

戸川師が軍に據らず、官に依らず、中國市政府等の政治勢力を排して、全く信念に生き、單身中國人の懐に飛び込んで黙々として日華親善、信仰鼓吹文化開發を挺身實踐されつゝある事は多數各宗開教師中でも異色あり、各方面から驚異の眼を以て注目されてゐる。

各宗から派遣される開教師は全部時局の波に便乗して、軍の威力に依存し、之に縋つて。所謂虎の威を借りて、開教に従事してゐる人が多いやうであるが、それは殆んど日本人檀信徒の爭奪か、せいゝ日語學校の經營か皇軍將兵の誤樂慰安所位の施設に留つて中國人と取つ組んで中國人の爲めに働いてゐる人は皆無であると言つてよい。折角この時局下に大陸に渡つて何をしてゐるのかと思ふ位である。

軍を背景にしたり、官を後楯にして中國人の間に入つて行つたのでは、彼等は全然寄りつかず寧ろ逃げて終うのである。この點戸川師は「若し大陸に渡つて軍屬、(宣撫班となり)從軍布教師となつて開教仕様などと思つてやつて來たならば今日の大をなす事は出来なかつた」といつて居られたがこの間の消息を盡してゐると思ふ。

炎熱と戦ひ、瘦せ衰え言語も全く通ぜず、食に飢え金もなく生活様式を異にする中國人と生活を共にするといふ事は容易な事ではない。艱難を艱難とせず。苦痛を苦痛と感ぜず忍の一字にジツと腹にこたえて中國人の相手をしてゐる戸川師の努力には頭が下る。

戸川師は本當に理想的な傳道者であり、得難い信念の人である。彼は中國人の心に宗教心が芽生え、育つて行く姿を見て自らを慰め、自らを勵ましてゐるのである。

密教會も戸川師のこの努力があればこそ、今日の隆盛を來したのである。此處に忘れてはならぬ事は戸川師の努力もさる事ながら師が二十年前に權田大僧正と共に渡汕したといふ事がどの位彼等の信用を贏ち得たか知れないのである。

戸川師は渡汕以來全力を擧げて會員の糾合結集に没頭された。

今や佐々木大僧正等を迎えて灌頂開壇する事に依つて第一期の基礎は完成に近きまでに固められ、今までは困難な組織時代であつたが、今後は宗教運動として、思想戰の第一線に立つて眞に本來の使命につき進む段階にまで漕ぎ附けた譯である。今後の活躍と成果は期して待つべきものがある。

既に現在優秀なる中國會員の居士等は何れも一騎當千の思想戰闘士である。我々が内地で想像してゐた如き小さな眞言宗としての開教を遙に超えて、日本文化を吸収してそれに依つて人智を開發して行く處までも推進されてゐる事は戸川師の努力と共に又中國の社會狀勢と中國人の持つ優秀なる素質を物語るものである。

彼等密教會員は日本文化を殊に密教を要求し、正しく世界の動きを認識し日本の指導的地位を認め、熱心なる態度を以て日々密教の研鑽に修行に日も尙足らずといふ状態である。無智なる大衆に比して一部分の人々ではあるが中國がこれ等の人々に依つて文化を維持し、推進されてゆくのであるから、彼等のこの自覺は中國の文化水準を一段飛躍せしめやがて民族の幸福を齎す日が近づきつゝある事は疑ふ餘地がない。

彼等の自覺と、熱意とを顧みると、我々としても小さな宗我を捨て、今では現地に於て日本官民の絶對支持と中國民衆の景仰の的となつてゐる戸川師の方策を飽くまで援助せねばならぬと信ずる。

宗政の運用上にも既に述べたる如く優秀なる中國人にして戸川師の眼識に叶ひたる者には度牒、交衆、試補位(それ以上に進める事は考慮を要するが)は特別に便法を以て授與する様にしたらよいと思ふ。この點廣汎なる共榮圈内の大

衆は救ひの手を待つてゐる。その指導の責任を持つ日本眞言宗としては百尺竿頭一步を進め事態を洞察して今こゝに急速に進歩的な處置を講ずるの要ある事を痛感すると共に敢て宗政運用に携はる方々の御一考を煩し度いものである。彼等は一人々々が立派な思想戦々士であり、命を賭けて敵地から潜入して入壇する位の彼等であるから逆に敵地に行つて活躍する事は請合である。

密教會員が信念の命する儘に敵地にも、重慶へでも進軍するであらう日を期待して止まない。此處に思想戦對策の一方途が生れる。

開教挿話

一、胃腸薬で皮膚病を癒した話

今でこそ皆さんの御覽の通り毎日幾十百の會員が熱心に法を求めて集つて居りますが昨年六月私が始めてこの汕頭へ参りました時は全く淋しいものでした。私の歓迎會や主管就任式は在來の浄土組の人達を集めて來ましたからそれでも三、四十人はありましたがほんとうの密教會員は四人か五人でしたせう。だから私は毎日唯一人、言葉の通じない風俗習慣の異なる町の中に一日中一言も發しないで暮したことも度々でした。かうした時には猫の子でも遊びに來てくれ、ば氣の晴れるものです、まして言葉は通じなくとも紙と鉛筆があれば少しはお互の意志を通じる人間が訪ねて來てくれればそれが中國人であらうと台灣邦人であらうと實に懐かしいものです。私は此の頃稀れに訪ねてくれるこれ等の人達を對手に按摩をしたり、鍼やお灸を施してやるのが仕事でした。

こうした孤獨の淋しい毎日を送つてゐる時に或る日二、三の侍女に守られた七十前後の老婆が訪ねて來ました。この

老媪は鄭氏と言つて私の會の直ぐ隣にある汕頭市婦女會の會長さんでした。(この人は汕頭市では戦前からの女流徳望家だとのこと)私の所へ來たのは日本から變な坊さんが隣の堂へ來てゐるので敬意を表し乍ら見物に來たものと思はれます。私は誰一人訪ねてくれる者もない淋しい所から若い女性を交へた三、四人の來客ですから喜ひで歡待し紙と鉛筆で覺束ない會話を取り交はしました。この時鄭會長さんの身軀を注意して見ますと手首から腕へ、又頭部から頸へ一杯に繻帯がしてあります。私がどうしたのかと聞きますと鄭會長は急に打萎れて「實は自分は全身の皮膚病である全身に吹出物がしてもう三年にもなり随分醫者にも治療をして貰つたが治癒しない、多分これは前世の業因に由る宿業であらう。實に情けないが今では自分の宿業と斷念してゐる……」と云ふことです。それから私はその不幸を慰めて「私も日本に居る時に少しは醫學もやつたから診て上げやう……」といふことで老媪の全身の繻帯を解いて診てやりました。私はそうは云つても別段醫學上の自信がある譯ではありませんが、こんなことでもして少しでも長く來客を引き止めて置きたかつたまでです。

診断の終つた私は「兎もすると此病氣は老人によくある消化器障害から來る自家中毒ではないかと考へましたから、私が日本を出る時に京都の東寺門前で求めた弘法大師創製と稱する東寺胃腸薬を三日分程紙に包んでやりました。そうして「これは眞言宗の祖師弘法大師のお薬であるから如何なる業病でも必ず全快する、貴女も至必に南無大師遍照金剛を百八返唱へて毎日三時に此薬を用ひられたならば必ず三日以内に快方に向ふであらう……」と云つて渡してやりました。

それから一週間程後此寂寞たる私の部屋へ紅紫交々たる美裝の窈窕たる美人群の來訪を受けて私は目を廻す程驚きました。聞けば鄭老婦人はあの日から私の言葉に従つて南無大師遍照金剛を唱へ乍ら東寺胃腸薬を吞むと私の云つた通り

三日目には皮膚面の發疹が止み濃汁が出なくなつて、七日後は繃帯を除いてもよいほどになつたとのことです。

「日本僧は法に於ても勝れて居られるかも知れないが治病に於ても偉大である。功徳無量!! 感謝々々……」
彼女等は全く驚異の限さして交々私を禮拜しました。然し私は彼女達以上に驚きましたまさか胃腸病の薬で皮膚病が癒らうとは思ひもしなかつたことです。

會員六百を擁する汕頭市中流以上の女性團體たる婦女會の會長さんがこうした效顯を得られたことは一つは大きな宣傳にもなつたと見えて、それからは毎日々々若い女性の病人が多くなつたのは私を全く閉口させました。然し此處で尻尾を捲くやうでは大陸の開教は覺東ない、大いに勇を鼓して婦人病でも頭痛でも若干の精神病でも藥師佛の眞言と胃腸藥でどしどし片付けましたが、癒らない者は黙つて居るし、幸ひ癒つたものはお禮に来るから私の開教日誌は全部快癒者の記録となつたのは面白いものです。然しその後鄭老嫗は一、二ヶ月の胃腸藥服薬ですつかり健康を呼び戻し、その上これまでは色の淺黒い顔で世人からは烏鄭さん(烏は黒)と言はれて居つたのが皮膚病が癒ると色が白すぎる位白く美しくなつたので夫人は心から喜んでゐます。汕頭密教會が多數妙齡の婦人を持つてゐるのはこうした事情からだと思ひます。

二、名刺一枚が潮州會創立の機縁

私は昨年六月汕頭へ参りますと直ぐに潮州會の創立を考へました。潮州は汕頭から十里山奥で戦前は英佛が最も力を入れて基督教の開教をした所です。その爲めに僅々二十年間に人口二十萬の内八割までが基督教徒になつた。従つて純日本系と目されてゐる密教會は極端な排撃を喰つた譯で、密教會を主宰する王弘願先生は潮州の師範學校、中學校に三十年も教鞭を執つて居つた潮州では絶大な信望のあつた人に拘らず、遂に潮州を捨て、汕頭に逃れたといふ程で潮州密

教會は戦前に於て最早絶滅して居つたのです。然し私にして見れば潮州は二十年前故權田大僧正の隨行として中國では始めて行はれた正統密教の發祥の縁りの地である。何とかして此遺蹟の顯揚をしないでは權田恩師に對して申譯なく、又今後の密教發達からいつても面白くない。そこで第一に舊汕頭會員で潮州に在任してゐる人の有無を調べ、三、四の潮州人を名簿の上で發見したから從者を遣つて實地調査をさせましたが、此二、三の會員も今は死んだり、又敵地へ走つたりして結局潮州には一名も密教會の會員がないことを知り實に落膽しました。丁度その時私がトランクの整理をしてゐると日本を出る時に畏兄山田鏡阿先生から何かの参考にもと贈られた二十年前潮州灌頂後故權田大僧正並に隨員に對する大謝恩會の出席者の名刺の包みを發見し、瞬時私の頭をかすめたことは若し此の名刺の中の一人でも二十年後の今日生きて居つてくれたならば、それを手掛りに創立運動を起して見やうと考へ、この數十枚の名刺を應接間の卓子の上に置いて訪ねて來る人毎にその存否を聞いて見ました。するとその中に林蔚臣といふ名刺を二、三の人が知つて居りいろく聞いて見ると、この林蔚臣といふ男は潮州一流の財産家で現在潮州北門物資配給組合の理事長であるとのことでした。これを知つた私は雀躍して喜び是非この林先生を頼つて見やうと決心し、それからは主として林先生の周圍を調査させることにしました。所が或日朝早く私が使つて居つた一階の覺華小學校の先生章源華といふ若い男が青くなつて私の部屋に來て、「法師!! 林蔚臣先生が近日死刑になります……」といつて來た。「どうしたのか……」と聞いて見ると、林先生は物資配給組合理事長の職を利用して潮州へ配給すべき物資を敵地へ送り、數百萬圓の利益を占めたことが發覺して潮州皇軍憲兵隊に拘留され近々汕頭憲兵隊本部に移されて死刑になるといふことです。これを聞いた私は非常に驚いて直ちに汕頭憲兵隊本部へ出頭して憲兵隊長代理小竹少尉に面會して實情を聞きました。運のよいことには小竹少尉は私と同郷の新潟縣人であり、而も私の學友仲山大尉の教育を受けたことがあり故權田大僧正の話も知つて居られ

たので。

「我々の同郷先覚者故権田大僧正の偉業を復興するにはその舊蹟地たる潮州に密教會を起さねばならない。それには目下急務として林蔚臣救出より方法のなす……」
といふ私の申し出で心から共鳴して下され、

「自分の利益の爲めには公職を濫用する中國人の悪習は一人林蔚臣だけではない、林一人を處置しても又第二第三の林が出やう、生かして置いて役に立つ男ならば何とかして生かして置きたい……」

といふことで林先生の生命の保證だけは得られた譯で、それから私は領事館特務機關等を駈け廻つて私が自ら潮州に行き林先生を獄裡に訪ねる運動をしました。所が私が汕頭へ来た時には密教會など誰も知りませんから私の汕頭居住には中々難色があり、特に特務機關では私が二十年前から参考書類を持参して説明したに拘らず終に諒解を得られません。その爲め私の潮州行き許可も何回出願しても受け付けられず、その内に汕頭では林先生が汕頭へ送られて憲兵隊で獄死し、その屍體を存心善堂で仕末したといふやうなデマが飛び出し私は氣ではありません、仕方なく昨年七月十四日には汕頭領事館から潮州領事館へ送る荷物のトラックに乗せて貰つて漸く潮州へ参りました。

同日午前潮州に着き、直ちに潮州領事館出張所で林先生の安否を聞くと言ひ、七月四日既に死亡したといふことで、この時位私は落膽したことはありません。然し午後出張所長鈴木さんのお話では確かに生きてゐるといふことです、それから鈴木所長さんに私の來意を話し、鈴木所長さんの同情で本人とは一言も話をしない……といふ約束で午後三時三十分潮州憲兵隊留置場で私は林蔚臣と二十年振の會見をしました。この時私は二十年前に西湖公園で寫した記念寫眞を持つて行き林先生に見せると林先生始めて私の來意を知り無言で兩人が泣いて居つた。……

こうして林蔚臣はそれから五日目七月十九日放免になりました。汕頭憲兵隊本部へ放免の挨拶に行つた時小竹隊長代理から懇々將來を誡められ戸川と協力して密教會の復興に盡す様言はれたと申します。その翌八月から潮州密教會は創立準備にかゝり、八月卅日には成立大會の運びに至りました。その間林先生の長男林樟が父の嫌疑の爲め皇軍憲兵隊に引かれるのを恐れて敵地に逃亡し、之を敵地から奪還するといふ様な話もあります。詳細はまだ發表を許されません。兎に角二十年前の名刺一枚が縁となつて現在五百餘世帯の會員が出来るやうになつたことは考へると夢のやうです。

(右二編は戸川師昭和十八年十月歸朝の際本誌の爲めに寄せられたもの)

五月二十四日 岡田眞言宗宗務長、中村大日本佛教會興亞局長から「無事結願を祈る」との激勵電報來り一同の感激又新に意氣大いで揚る。

親下の御伴をして領事館を訪ひ領事さんに面接渡汕の挨拶をなす。途中親下の車に女乞食が縋つて何處までもついて來て離れない。次いで元海濱中學の跡にある潮兵團司令部に至り、刺を通じて司令官に面會を求めたる處、公用にて出發間際の閣下は僅かの時間を割いて面接せられたので挨拶をなし、早々にして歸る。更に市政府に許少榮氏を訪ねたるも出張中なりしを以て直ちに歸る。歸途粵東報社に杉本社長を訪ひたる處、計らずも今回基隆より同船せし人なりし事を知る。聞けば戸川師來汕早々極めて困難なる時代に「戸川を殺すな」と絶叫し邦人間に斡旋盡力せられたといふ仁侠の士であり。従軍記者として戦線を馳驅された勇士である。

戸川師が昨年十二月歸國された時などは邦人の富有者を説いて多額の旅費までも調達して下さつたそうである。その後續いて戸川師の文化事業上の後援をされてゐるとの事であり、今回の灌頂にも、同榮會館使用其の他陰陽に非常なお世話を賜つてゐるとの事である。

見るからに氣骨隆々新聞人らしき明快さを以て接せられる。貌下よりも鄭重なる謝辭あつて快談を終つて歸る。

午後は杉本、扇谷兩名にて東、西本願寺、日蓮宗開教所を訪ひ入汕の挨拶をなす。歸途同榮會館に立寄りたる處門にはアーチを造り、三階一階には男女居士達が多勢汗だくになつて準備し中、篠山、戸川師等が指導されてゐる最中であつた。同榮會館といふのは台灣邦人の皇民化運動の爲めの會館である。今や時局下多端の時、猫の手でも借りたいと言ふこの際、彼等台灣邦人は日本人なりといふ自覺に立つて拓南の第一線に活躍してゐる事が此の地に來て始めて解るのである。彼等の事變前より今日に至るまで盡したる功績は忘れてはならぬ大きなものがある。

小松部隊長

この日午前と午後に亘り小松部隊長が態々密教會に御出になり。挨拶やら、御後援の數々の親切なお話を承る。お會ひして見ると如何にも信仰に燃え、溫和な人柄が感じられる。部隊長は大東亞の眞の建設を計るには精神運動を以てする以外には方法なしとし、戸川師の從來の運動に對して全面的の支持をされてゐる。戸川師の信念を解し眞の宗教運動を理解されたる武人として頭が下る。

部隊長は元熱烈な日蓮信者なりし處、日蓮宗は餘りにも排他的で偏狹なるに飽き、戸川師と知り合つて後、密教會に對して厚意を寄せられてゐると言ふ許りではなく、潮州の密教會附屬日語學校設立に當つては非常な力の入れ方で、軍務の餘暇には學校迄お越しになつて、教壇に立ち生徒を指導されたり、開元寺の建物借用や縣政府に對して日語學校助成の斡旋をされ、扇谷開教師が齒科醫なるを幸ひ、部隊の齒科擔當を囑托され自らの俸給を割いて齒科醫器具を備ふる等並々ならぬ盡力をされてゐるといふ事である。

五月二十五日 朝食後貌下と共に中國側警察局に局長徐競氏を訪れ、渡汕の理由を述べたる處通譯を通じて能く理解が出来たと見え、非常に歓迎してくれた。更に汕頭佛教團聯合會に林師遠氏を訪へば、覺世學校居士林を經營し、中國佛教の研究と信仰を鼓吹する旁ら學校、幼稚園を經營し、自ら親しく案内される。幼稚園には主として上流家庭の子供が收容され、參觀すると、何處も同じ頑是ない子供等が讚佛歌や精進の歌を歌つてくれたが、無心な純眞さには心打たれる。

途中貌下とお別れして杉本、扇谷兩名にて汕頭日本居留民會事務所を訪ひ主事新國吉氏から就任以來の苦心談、殊に支那事變前の引揚げ事情や皇軍進駐後の経緯やらを聞き、我々が上陸した際の情景に就て次の如く語られた。先づ戸川師の開教は他の宗派には全然見られない。その奮闘振りを推賞され、今まで軍官民幾多の人々の出入を見たが今回一行の上陸位多數の中國人の出迎えを見た事がないと口を極めて讚歎されて居た。

灌頂道場に於ける歓迎

念ぎ同榮會館に到れば歓迎會が將に始まらんとして、貌下一行が會場に入場される處である。さしも廣き一階會場にはギツシリ男女會員が詰り、豫定の時間より稍遅れて十一時開會、先づ宣化組長趙鏡澄氏は靜かに詩吟を朗讀する如き歓迎の辭あり。この時式次並に代表者祝詞次の如し

汕頭密教重興會歡迎

佐々木大僧正暨諸大法師蒞汕巡錫大會禮節

- 一、法鼓三通
- 二、鳴鐘（十八聲）開會
- 三、恭請大僧正暨諸大法師就位
- 四、全体肅立
- 五、向中日國旗行三鞠躬禮
- 六、向大僧正暨諸大法師行最敬禮
- 七、致歡迎詞
- 八、恭請大僧正諸大法師開示
- 九、來賓演說
- 十、攝影
- 十一、禮成

以上

歡迎詞

際茲癸未新夏之候氣象清和物華皆實誠吉祥之時也汕此爲法佛大教重興發祥之地欣值大東亞共榮弘開之隆也不覺地方安定誠吉祥之處也本會同人今晨以最誠敬之發心致敬本山代理大管長護國寺貫主大僧正佐々木教純親下

國上寺住持僧山田鏡阿大師親下

大本山護國寺執事僧正田中恭盛大師親下

千手院住持僧正中義乘大師親下

圓照寺住持僧正篠山明信大師親下

東福院住持僧正杉本良智大師親下

原久寺住持僧正岡村儀雄大師親下

諸位高德不遠千里凌波冒浪蒞臨此土巡錫御開灌頂嚴儀上下瑜伽一堂濟々誠殊勝之佳會也考中國密宗當大唐開元四年間善無畏三藏以八十高齡寶法王瑜伽無上之大乘教傳之中國其付法弟子有一行大阿闍梨繼三藏而來者則爲我五代祖師沙門跋日羅善提以七十高齡不辭難度之大海絕遠之遙途來長安建立曼荼羅廣弘祕密法其弟子有特進試鳴臚鄉大興善寺三藏沙門大廣智不空年十四歲出家隨師杖錫東來再參師善無畏三藏復返南天求法親師龍智菩薩集祕教之大成密傳法王祕顯當時也君相與禮敬於庭如日月經天江河行地無往而不承其光明潤澤不意法脈流衍日東中夏絕傳民國十三年先師王公弘願以至誠感得故豐山大學長權田雷斧大僧正親下以八十高齡漂海來潮親傳大法使中夏三密之智炬復明曼荼羅之法幢再樹爲中國佛教史重開一大事因緣爲是以遠先師以重興密教爲己任護法弘宗不遺餘力藉文字以開覺使有識者歸眞迭次開壇於潮州、汕頭、香港、廣州等地沐法乳者莫不歡喜讚歎感謝當年本山來華諸大德甘露之溥潤也民國廿三年大僧正謝緣遷化先師聆耗哀感萬分在汕頭召集大依鏡澄等十七人虔修禮法軌共報師恩方期永之世々不意越年同日先師弘公辭緣西歸人天共慨無可奈何同人等祇有恭持遺教寶續弘揚雖艱困重々無礙信念今蒙我

大僧正以七十高齡暨諸大師再度禪集此土散慈雲于火宅揚慧日于幽途慈心濟物瑞騰銀漢而事有足記者唐代天竺諸師與茲次重興諸大德人事年齡勘合相同而最奇者則戶川大師年十四出家何其次合至若斯也如是則權田大師者其爲善無畏三藏平佐々木大僧正者其爲金剛智三藏乎

而戶川大師其爲不空三藏乎我人今日得入諸師慈悲之室以何因緣不勝歡喜之至同人等特行召集汕此密林諸弟子弘開歡迎大會共伸歡敬之忱肅此恭祝

諸位大師法樂莊嚴並頌

瑜伽

汕頭密教重興會全體會員和南

中華民國三十二年五月廿五日

大僧正は「入汕以來會員舉げての心からなる歡待を謝し、密教に於ける重大法儀たる灌頂は愈々近日開壇される、戰事下にこの法悦にしたる事が出来るとは何たる幸福な事であらう。我等は信仰に依つて眞の理解を増し相携えて大東亞の建設に邁進仕様ではないか」と教示挨拶される。

續いて陳光烈氏、陳立恒、社會局長の祝辭あり、出席者男女會員合せて三百餘名記念撮影終つて一時散會。

二時から再び同榮會館に至り灌頂の準備をなす。

王弘願先生遺弟の動靜

我々が汕頭に到着すると故王弘願先生の所謂高弟等が頻りに訪ねて来る。それ等の中には戸川師に對して協力しない分子もある。戸川師出現を内心快しとしないからである。従つて戸川師のやる事に不平を持つてゐる。何故かといふと王弘願先生は徳者であり學者であつたからそんな事はしなかつたが、その徳に隠れ、民衆の熱心なる要求をよき事にして高弟等は授かつた法を十八道は幾何、護身法は幾何と法の切賣りをして財を成してゐる者が多々あつた。それが爲めに先生亡き後の密教會は民衆から嫌惡されて終つたとの事である。

戸川師はこの惡風を一掃し正法の復興に正しき心の建設に猛進されたのである。

今回の授戒、灌頂に當つても之等の舊勢力は全然對手にしない事にしてゐるからゴタ／＼させるのであらう。

この惡風は中國人の間から中々抜け切らず戸川師は弱つて居る。

友邦眞言宗高德

佐々木大僧正蒞汕巡錫

市密教重興會前晚設宴洗塵

今天在同榮會館開歡迎大會

爲慰問日軍及爲潮汕地區密教徒灌頂而來之友邦豐山派眞言宗高德佐々木大僧正現下及其隨員山田鏡阿、岡村儀雄、田中恭盛、中義乘、篠山明信、杉本良智、諸大阿闍梨一行、於前晨乘輪蒞汕巡錫、本市佛教總會、佛教居士林、覺世學校、存心善堂、存心學校、誠敬善社、誠敬學校、慈愛善社、慈愛學校及密教重興會全體會員各機關代表等於海關前列隊歡迎、大僧正上岸精神矍鑠、態度安祥與歡迎者點致謝、速至神社參神後、駐錫本市密教會、並定期本月廿七日授十善戒、廿八日起宏開灌頂法會、本市善信人士、報名參加者甚爲踴躍、前晚密教會特設宴爲大僧正諸師洗塵、定今天上午(新十時)假中馬路同榮會開

歡迎大會

又訊佐々木大僧正一行、並預定於來月八日保衛東亞日在同榮會館舉行爲完成大東亞戰爭陣歿中日兩軍之慰靈大護摩供會、又擬赴潮、安潮、陽澄海各地方訪問各前線警備隊、預定六月下旬離汕赴省港云

巡錫團名單 大阿闍來耶、大日本眞言宗大本山護國寺貫首大僧正佐々木教純、隨員國上寺住持僧正山田鏡阿、大本山護國寺、執事僧正田中恭盛、千手院住持僧正中義乘、圓照寺住持僧者篠山明信、東福寺住持僧正杉本良智、源久寺住持僧岡村儀雄

中國巡化趣意 大僧正佐々木教純至中國巡化趣意書

「此次眞言宗管長代理護國寺貫主大僧正佐々木教純至華南之汕頭、潮州、廣州、香港方面巡化、更向南京政府訪問、所以自大正十三年六月以來、在該地域組織密教重興會、使研究眞言密教之教理者勃興、故參加的中國人已發展至相當多數。

然此會の實體、不能以重興中華の眞言密教觀之、而係把握日本佛教的眞髓、以確立日華兩國完全提携而結成的事、已可瞭然。

當時此會の組織者、開始保眞言宗元管長故大僧正權田雷斧。及隨員十二名、挺身護法的努力所賜、特筆以記之。

其後十有餘年、由權田大僧正作秘密汕頂の傳授受、者潮州的五弘願、香港的黎乙眞、上海的程宅安、廣東的慧光法師等、因此入信者日增隆盛、使極端的排日思想漸漸其根、而信仰眞言宗祖弘法大師及日本人權田大僧正者遂被目爲親日家、加以官憲方面的斷壓、和輿論の支配、故自中國事變勃發以來、會員在重壓下、成爲四分五裂の狀態。雖然昭和十三年三月香港黎乙眞、當以三周忌法、其未亡人遺弟等、繼起故權田大僧正の法流、開有招致日本密教高僧の願念、雖在事變下、不管軍官之協力與否？本宗依然排除萬難、派前大正大學長加藤精神、及隨員二名、其嚴修法要之處能使關係者、歡爲愉悅。

其後在該地の熱烈信者、排除一切の迫害、秘密運用弘法大師及權田大僧正の淨心、開昭和十七年六月派權田大僧正の隨員、戶川憲戒僧正糾合會員、當辨理會之再興以來、經過僅不經半年、中國人之成爲法弟者計一百六十一名、信徒則有二千餘名之多。

同年十月以後、戶川僧正在廣東地域、集得有數千名の信者、在香港加入者、現在再興會從事奔走。

茲於現地某某部隊長、汕領事、同警察署長等諸士、成爲斡旋の中心、事機愈見成熟、曩由權田大僧正傳授結緣汕頂傳法灌頂等の執行、使能徹底的信仰、憑着眞の理解和融合、以結集中國人、更從事日華親善的工作、此爲今次發願出行的理由。

大日本眞言宗務所
(粵東報五月二十五日三段抜きトツプ記事)

皇軍慰問と灌頂のため

佐々木大僧正一行來汕

皇軍慰問並に潮汕地區密教徒灌頂のため眞言宗管長代理大本山護國寺住職佐々木敦純師は隨員中僧正山田鏡阿權中僧正田中恭盛、同中義乘、小僧正篠山明信、同杉本良智、大僧都岡村儀雄師等六名を従へて二十三日朝來汕した。

この朝華信徒、密教關係學校、團體數百の出迎へのうち佐々木大僧正一行は領事館の汽艇で上陸、戶川重興會主管、山野署長、幸阪老等棧橋まで迎へ、中國信徒代表等が

大僧正に花束を捧げて歡迎の意を表せば、温顔に笑みを湛へた大僧正は日華信徒に一々應へて靜々と棧橋を渡り内地より遙々こゝ大陸汕頭の地に第一歩を印した一行は外馬路口に堵列する學校團體、一般信徒の熱烈敬虔な歡迎をうけ記念撮影を行ったのも大僧正は

今回戶川師始め密教重興會の主な方々の招請によりまして會の重大行事たる灌頂を行ふために當地へ参りました。……何れ皆様とは他の機會にゆつくりお話しできると思ひますが、今日はどうも早朝より出迎へをうけまして感謝に堪へぬ次第です。

と通譯を通して中國側に挨拶すれば老若の信徒何れも合掌し、腫を輝かしてちツと大僧正の挨拶に聴き入る姿はまことに美しいものであつた、挨拶を終つた一行は車仔を連ねて外馬路を汕頭神社に到り神前に無事到着を奉告宿舎に割

り當てられた密教重興會本部に入つた、なほ一行の日程は來る廿八日より灌頂を行ひ、來月八日の大詔奉戴日に大東亞戰完遂日華兩軍陣歿將士慰靈護摩供會を同榮會館で執行するほか潮州、蕪埠、潮陽澄海等各前線警備隊を訪れ、英靈を慰め六月下旬離汕の豫定である。

けふ同榮會館で一行の歡迎會開催

密教重興會では東京より遙々來汕した佐々木大僧正外六名の高僧を迎へて今より約廿年前會つて權田大僧正を迎へた當時の如き感激を見せてゐるが、今廿五日午前十時から同榮會館に於て全會員の大僧正一行歡迎會が開催される。

各方面へ挨拶

佐々木大僧正一行は戶川憲戒師の案内で昨廿四日軍司令部領事館市政府並に本社を訪れ來汕の挨拶を述べた。

(汕頭日報五月二十五日附二面トツプ記事)

五月二十六日 朝早くから豆腐屋の聲もの賣りの奇聲、豚の泣き聲に眼を覺まされ、寢て居られぬ。例の如く勤行朝食終つて、早々中山公園に兵團主催の合同慰靈祭に参列。第一線の慰靈祭には始めてであり、ぐツと緊張する。

各隊の代表部隊領事館、義勇軍、在郷軍人會、婦人會、國民學校生徒汕頭市長等、邦人關係者多數出席嚴肅裡に然も盛大に舉行せられ十一時終了。

特別の待遇にて軍の自動車に送られて歸宅する。中村兵團長閣下には式終了後態々密教會に御越しになつて、貌下に

對して答禮の挨拶あり、これは兵團としては異例な事であるそうである。

昨日の歓迎會を汕頭日報は左の如く本日附にて掲載してゐる。「佐々木大僧正一行の歓迎會」佐々木大僧正を迎へた密教重興會では昨廿五日午前十時より同榮會館に於て同會理事長王文資氏外全會員、陳社會局長、陳光烈氏等中國側、名士多數參列の上舉行、重興會代表歓迎の挨拶に次で大僧正が來汕の挨拶、中國側名士の歓迎の辭があり盛況を極めた」と、

午後二時より中國側教授と一行との合同習禮をなす。男女居士達は非常に熱心で、今日は殊の外暑いのに終始受者引入から各々實際的に一通り行ふ。灌頂は王弘願先生在世の時に小規模には行はれたが今回の如く大々的には行はれた事がない。従つて彼等は歡喜に滿ち驚異の眼を睜り、大壇でも正覺壇からも離れない。六時半會場を辭して歸る。

習禮中小松部隊長が同榮會館迄來られ一同を慰問される。忙しい中に態々時間を割いて一寸でも顔を出さないと氣が濟まぬと言はれてゐたが、心から應援せられて居る情がハッキリ感じられた。

陳 天 助 氏

今夕は一行丈水入らずで陳天助氏宅に招待を受け純粹汕頭料理の御馳走になる。酒もビールも特に用意され、十數種類珍味佳食に飽滿、終つて身動きもならぬ位の御馳走である之を殺人的馳走といふ。料理の途中で福建産銘茶を小さい茶碗で頂いたが芳香を含み實に佳き茶であつた、但し非常に高價なものであるそうである。

陳天助氏は我々が汕頭上陸以來朝から晩まで何くれとお世話を下さつた許りでなく、氣魄と誠意の持主である。平素戸川師に對して犬馬の勞を吝まらず、物質的にも精神的にも捧げ盡して居られる。通譯なども外の人では解らぬ事でも同

氏が通譯すれば徹底する程の明快な辯舌の所有者である。故郷は台灣で奥様やお子さん達は台北に居られ、自分は汕頭に在つて縦横に活躍されて居る。領事館や軍でも信用があり、名士との交際も廣く、密教會としては、なくてはならぬ存在であり、戸川師はどんな事でも安心して委せられると、同氏に對しては絶對的に信任されてゐる。

事變中は皇軍と共に行動し、或は中支に北支に其の足跡は殆んど全支に及び昭和十五年には内地にも來られ、靖國神社宮司鈴木孝雄閣下の知己を得てゐる關係から密教重興會再興の事を相談された。鈴木孝雄宮司は眞言密教のことなら高野山へ行つて相談するが良いと云はれたので、高野へ行つた處が高野山では山内上局の合議を経て返答するからと云ふので随分待つたが到々返答を得られず空しく汕頭へ歸つたのであつた。そして眞言宗の宗務一切は高野で行はれてゐると知つたのは鈴木宮司の注意があつたからで、權田大僧正との關係を辿らなかつたのを残念がつてゐる、折角東京に來てゐながら晋羽の護國寺を訪ねなかつたのを如何にも残念だつたと繰り返して云はれた、そして翌十六年に偶然戸川開教師が入汕されたので、氏の熱望は達せられることになつた。そう云ふ譯で戸川開教師の入汕は彼に取つては何ふしても單なる偶然とは思へず、大師冥鑑の然らしめるものとしか思へない、氏の戸川師歸依はこゝから出發し、提嚆を受くるに及んで愈々加速度を加へ。今では汕頭密教重興會と陳天助氏、戸川師と一丸になつて南支密教發展の推進力を形成してゐるのである、陳氏は新興中國の國教は眞言密教でなければならぬ、密教をして中國の國教たる地位までに推進することが自分等の支那に盡す所以であり且つ日本に奉仕する忠勤である。密教信仰によつてのみ新支那の國家躍進態勢は永恒に持續されるものと確信してゐる、従つて眞言密教の發展に盡すことが即ち日華兩國に盡すことになり、大東亞共榮圈建設の基を築き上げる根幹であると云つてゐるのである。丁度佐々木貌下が汕頭で灌頂開壇される報を傳へ聞き急遽遠くサイゴンから入汕して來た華僑が居つた、この人はサイゴンにも密教會を起し度いからとの希望を戸川師に

申入れがあつた際の如きは、陳氏は泰國にも昭南にも密教會設置運動を起さねばならぬ、そして華僑の進出と密教會進展とは併行的形態を保持するようになりたい、南方地區各域に散布し既に物的には強固な地盤を築き上げつゝある華僑に對して、密教と云ふ心的資源を供給して、華僑と故國との連繫に資したいとの念願を強く披瀝する彼れの信念には自ら頭の下る何物かゞ包蔵されてゐる。

眞言宗管長代理猊下滯汕間日程

五月二十三日 到汕頭 全體會員於碼頭歡迎
 二十四日 全體會員參加
 二十五日 本會開歡迎會 主備兵團長閣下管長代理隨員隨喜參加
 戒師主管 隨員證明
 二十六日 潮兵團合同慰靈祭 午後四點起 第一會 三昧耶戒
 戒師主管 隨員證明
 二十七日 授十善戒 午後四點起 初夜下午一點起 後夜四點 第二會三戒
 二十九日 灌頂 上午九點起 第二會 初夜下午一點 後夜四點 第三會三戒
 三十日 灌頂 上午九點起 第三會
 三十一日 灌頂 上午九點起 第四會
 六月一日 灌頂 上午九點起 第五會
 二日 灌頂 上午九點起 第六會

三日	灌頂	第六會	第七會
四日	灌頂	第七會	第八會
五日	灌頂	第八會	
六日	結緣灌頂	上午九時 三昧耶戒	下午二點 入壇
七日	十時日本人居留民墓地	午後六時歡迎會	
八日	日華兩軍慰靈祭 萬華供養	和平快來 祈念 護摩供	上午十時起 十二時 請餐
九日			
十日	潮州行 三昧耶戒	上午十點潮州去	下午三點起 三昧耶戒
十一日	灌頂 開元寺大衆供養	上午九點初夜	下午一點後夜 六點大衆供養
十二日	部隊慰靈祭	上午十點起法要	十二點請餐
十三日			
十四日	碁埠西川部隊慰靈祭	上午十點起法要	十二點請餐
十五日	汕頭會法要	回汕	
十六日			
十七日	潮陽隊慰問	回汕	
十八日	澄海隊慰問	回汕	
十九日	以後在汕頭待船來		

以上

民國參拾貳年伍月貳拾貳日

中國密教重興會

主管 戶 川 憲 戒

癸未年灌頂大會職員表

- 顧問 許少榮居士 陳光烈居士 陳立恒居士 林柏榮居士 陳天助居士 王兆麟居士
- 總務組 正組員 王大依居士 副組長 蔡勤修居士
 - 組員 陳慧德居士 胡思儒居士 曾餘德居士 鄭順德居士 楊浚堯居士 李本孝居士 薛慶德居士 章少岩居士 章廷金居士 蔡慧修居士 洪尙德居士 辛本桂居士
- 宣化組 正組長 趙鏡澄居士 副組長 黃慧空居士
 - 組員 陳亦山居士 陳敬庭居士 胡錦文居士 梁見真居士 辛春和居士 王芸卿居士
- 法事組 正組長 黃我虛居士 副組長 邱振江居士
 - 組員 章芳金居士 蕭志琼居士 林育熙居士 李松炎居士 陳浩松居士 謝佳居士 章源和居士 蕭耀為居士
- 會計組 正組長 朱南來居士 副組長 黃明悟居士
 - 招待組 正組長 周子柏居士 副組長 余煥章居士
 - 組員 蔡秉臣居士 陳承德居士 張駿川居士 邱鴻翔居士 鄭得壽居士 張宜金居士 許子彬居士 吳輝光居士 張志銓居士 黃堅居士 柳木順居士 洪琴生居士 翁蘊空居士 楊有義居士 張漢琳居士 張

德成居士 吳朝喜居士

- 庶務組 正組長 胡寄雲居士 副組長 邱振宗居士
 - 組員 鄧心慧居士 林修南居士 朱錦潮居士 林烈城居士 謝躍龍居士 林謝深居士 李廣來居士 鄭永成居士 李子都居士
- 文書組 正組長 鄭元春居士 許少玉居士
 - 組員 章廷金居士 吳令宜居士 林修五居士
- 灌頂大會職衆如左
 - 正覺壇 大阿闍梨 佐々木敦純
 - 教授師 王大依居士
 - 後催壇 大阿闍梨 田中恭盛
 - 教授師 趙鏡澄居士 鄭元春居士
 - 前催壇 大阿闍梨 山田鏡阿
 - 教授師 蔡勤修居士 王騰揮居士
 - 大壇 大阿闍梨 杉本良智 岡村儀雄
 - 護摩師 大阿闍梨 戶川憲戒
 - 大壇教授師 余隆讓居士 黃慧空居士 黃我虛居士 謝佳居士
 - 加持壇 大阿闍梨 篠山明信

教授師 陳敬庭居士 邱鴻翔居士 林育熙居士 黃明悟居士
 傘蓋師 周子柏居士 胡錦文居士 林修南居士 辛本桂居士
 唱佛號師 王日照居士
 記名師 林修五居士 邱振江居士
 包花師 翁蘊空居士 胡寄雲居士
 領受者 蕭志璋居士 趙介夫居士 許少玉居士 吳朝喜居士
 承仕 余煥章居士 張漢琳居士 蔡慧修居士 楊淡堯居士
 讀衆 諸大居士

三昧耶戒職衆列左

第壹會
 大阿闍梨戒師大僧正 佐々木敦純
 初催阿闍梨唄權中僧正 山田 鏡阿
 後催阿闍梨持金剛權中僧正 田中 恭盛
 尊號壇行事散對中僧正 中 義乘
 加持所持剛少僧正 篠山 明信
 大阿阿梨堂達少僧正 杉本 良智
 大阿闍梨讀頭權少僧正 岡村 儀雄

護摩師 教授少僧正 戶川 憲戒
 神供師 承仕 扇谷 重憲
 讀衆 義仕 大森 祐玄

第貳會

讀頭 陳亦山居士
 堂達 黃我虛居士
 散花 邱振宗居士 章少岩居士 章廷金居士 胡忠如居士 章芳金居士 許少玉居士 林謝深居士 蕭志璋居士
 朱錦潮居士 鄭順德居士
 對演 邱振江居士 鄒心慧居士
 承仕 林修五居士
 承仕 余煥章居士
 樂人 蕭耀爲居士 王日照居士 林修南居士 胡寄雲居士 吳令宜居士 林良熙居士

第參會

讀頭 謝 佳居士
 堂達 王心珠居士
 散花 林育熙居士 黃慧空居士 黃明悟居士 曾餘德居士 杜聖悅居士 洪善德居士 林育和居士 辛本桂居士
 王佐三居士 陳惠卿居士

對揚 蔡勤修居士 蔡慧修居士
義仕 楊淡堯居士 陳智周居士
承仕 陳徐德居士
樂人 胡錦文居士 陳貞權居士
花童 楊啓美居士 陳玳惠居士

第肆會

讚頭 許少玉居士
堂達 王日照居士
散花 蕭耀爲居士 林謝深居士 吳令宣居士 胡寄雲居士 陳敬庭居士 翁蘊空居士 章源和居士 黃我虛居士
林修南居士 鄭永成居士
對揚 邱振宗居士 鄭順德居士
義仕 許子彬居士
承仕 周子柏居士
樂人 邱振江居士 章廷金居士 章芳金居士 胡忠如居士 陳作茂居士 李松炎居士

第伍會

讚頭 謝佳居士
堂達 蔡勤修居士

散花 林育熙居士 黃慧空居士 黃明悟居士 曾餘德居士 杜聖悅居士 洪善德居士 林育和居士 辛本桂居士
王佐三居士 蔡慧修居士
對揚 胡錦文居士 許淨念居士
承仕 薛慶德居士 陳貞祥居士
樂人 陳貞權居士 王心珠居士
花童 陳貞慧居士 翁仰貞居士

第陸會

讚頭 邱振江居士
堂達 陳敬庭居士
散花 王大依居士 趙鏡澄居士 王日照居士 翁蘊空居士 鄭心慧居士 士振宗居士 胡忠如居士 章芳金居士
鄭順德居士 章少岩居士
對揚 許少玉居士 章源和居士
承仕 胡寄雲居士 鄭元春居士
承仕 黃我虛居士
樂人 蕭耀爲居士 朱錦潮居士 黃奮程居士 林謝深居士 李松炎居士 陳敬庭居士

第七會

讚頭 謝佳居士

- 堂達 黃明悟居士
 散花 林育熙居士 黃慧空居士 蔡慧修居士 曾餘德居士 杜聖悅居士 洪善德居士 林育和居士 辛本桂居士
 王佐三居士 陳惠卿居士
 對揚 陳貞權居士 許淨蓮居士
 承仕 許淨念居士 王少卿居士
 樂人 胡錦文居士 蔡勤修居士
 花童 楊啓美居士 陳陳璘居士
- 第捌會
- 讚頭 陳亦山居士
 堂達 王大依居士
 散花 陳作茂居士 黃奮程居士 林良熙居士 林修五居士 林修南居士 黃我虛居士 章芳金居士 吳令宜居士
 邱振江居士 許少玉居士
 對揚 朱錦湖居士 胡忠如居士
 承仕 趙鏡澄居士 鄭元春居士
 承仕 王日照居士
 樂人 張壘川居士 蕭耀爲居士 鄭心慧居士 蕭志瑋居士 章源和居士 鄭順德居士

汕頭灌頂修行

戸川師の豫定が右の如く我々に提示され、それに従つて我々は行動する事になつた。

五月二十七日 香港の平岡貞氏より入香手續が出来てゐるか何うかを電報を以て紹介し來られる。直ちに出来てゐない旨返電す。

十一時より十善戒修行戸川師は阿闍梨を勤め我々は證明阿闍梨として參列。行つた時は既に男女受者達は「大恩教主釋迦牟尼如來」と鐘や木魚入りで名號を稱え一生懸命禮拜しつゝ中々賑やかである。

然るに男子の中に禮拜をせざるものが多數あつた爲め、戸川師は午前中禮拜をしなかつた者には嚴として午後の授戒をせずと云ひ發たれ、いくら法事部主任や教授の王大依さんが陳謝してもきかばこそ、戸川師の法の前には何もものが現はれても動ぜざる信念を見る事が出来た。到々午後に至つて再び禮拜唱名をやり直し漸く三時から授戒を始めた。芯の疲れる事である。暑い處へもつて来て受者の呼出しにも、又平服の上に白の法衣を着るのだが中々時間がかかる。實に中國人は規律も無く統制もなく、團體訓練を持たぬ民族であつて、言葉も通ぜずこの種の行事は困難である。

今日の授戒入壇には逸々西貢から來た人があつた。家族は汕頭に居り且密教會員である。非常に熱心な信仰者で戸川師の許に西貢に密教會の支部を結成して呉れとの申出があり。若し我々が計畫された如く三月に來てゐたら戸川師は同方面に渡られ支部結成に當つてゐたかも知れぬといつて居られた、同地には汕頭出身者が百名位ゐるとの事で、今後密教會も西貢まで延びる事は確實である。

今日の入壇者は百十餘名、その中に故高岡龍瑞師の息女榮子さんがあつた。密教會では日本人の會員として始めてで

あると

五月二十八日 今日三昧耶戒修行

今迄密教は堂の中に秘々として行事をしてゐたのであるが愈々外部に向つて威容を現し外儀を顯示する事になつたのである。

領事館からは巡查數名、公安局からも中國巡警が多數出て警備に當ると豫め打合せがあつた、朝來陳立恒氏が四歳になる愛兒を連れて訪問される。實に可愛い子供で日本語も出來、猯下外一同に對して一々お辭儀をし、禮拜する時など「アピラウンケン」と云つて愛敬を振り蒔く。先般戸川師が「アピラウンケン」十萬遍運動を興した時にこの子供が眞先に參加したとの事である。この縁から陳一家は子供に引かされて揃つて密教會員となり、今では熱心に援助されてゐるようである。猯下よりその子供に「威儀細袈裟」を授與され、首に掛けて貰ひ共々ニコ／＼して歸つて行つた。

杉本、扇谷兩名は憲兵隊、軍報道部、台灣總督府油頭分局を訪ひ挨拶をなす、總督府分局では井上尋統氏が親しく面接され、「開教上の所見を述べられ密教會の運動には大いに關心を持つてゐると、又密教會がインテリを對象としてゐる事は非常に良い。彼等は一度入信すれば如何なる事があつても脱退する事がないから密教會の前途は益々洋々たるものがある」と言はれた。

キリスト教でもこの點に着眼し今般態々廣東から伊江宣教師を派遣し發會式を行ひたる由である。

午後一時、民衆は旱天續き、炎熱水不足に喘ぎ、連日連夜雨請ひをしてゐる。戸川師が灌頂の準備に密教會擧げて没頭して大法を修する時は人天共に歡喜して灌頂法要に入れば必ず雨が降ると中國人に言つて居られたそうであるが、こ

の日朝來快晴なりしに、午後に至るや大空の一角に忽然として黒雲現はれ、雷鳴轟き大雨沛然として土砂降りとなる。民衆の喜びは言はんかたなく、蘇生の思ひであつた。

二時頃從者を從へて許少榮市長訪問廣東省長の巡閱があつた爲挨拶が遅れて申譯がないと謝辭を述べられた。同氏は永い間日本に留學されて居られたし、奥さんは日本人である位だから實に流暢な日本語で語られる、通譯などは要らない。

午後四時雨の止むのを待つて行列を整へ會館に向つて出發二十有餘臺の車を連ねて、先頭には男子會員の讚歌隊を配して行進、街の人々は始めて見る日本僧の正裝、數町も續く堂々たる隊伍の進列に驚き沸き返る様で、街の家々は大抵三階建以上であるが各階とも顔々ぎつしり並んで押し合つてゐる。公安局の巡警の警戒では事足らず、腰にピストルをはさんだ日本の巡查が自轉車で藤の鞭をうならせて列に近寄るものをピシ／＼追ひ拂つて行く。出發の時に日の目を見た天候は三昧耶戒に入ると再び豪雨が襲ひ來つて、法要中降り續く。道場内外の慶びは大變であつた。一同法力の威大なるに驚く、密教が支那民衆から歡迎される所以もこゝら當りにあるらしい、眞言密教の法驗、學徳秀れたる大阿闍梨の法力、この如來加持力こそ民衆にとつて大きな魅力となるものらしい、二十年前權田大僧正が歸航の際、香港埠頭に立ち多數の見送人に對し一場の謝辭を述べ、これが老衲の最後の轉法輪なる一語を残し、出迎へのランチに乗り移らんとせる利那、民衆は別れを惜しんで五体投地の禮をしてハンケチを振つた、權田大僧正はこれに答禮する心算で手にせる白毛の拂子を頭上高く振られたところが相當に風波を孕んでゐた高浪が沖合に遙かに引退り穩かになつた、その瞬間ランチはトン／＼發動機を響かせて勢ひよく本船指して急航した、これを目撃した民衆は復び五体投地して奇瑞を私語いた。彼等にとつては權田大僧正の法力が拂子一振に炳現し、波浪を退轉せしめたものと信じたに違ひない、今なほ彼地に於ては權田大僧正法力の話が語り草となつてゐる。今現實に待望の大雨が沛然として降り注いでゐる、彼等市民が街

の軒並に灯燈を吊下げ、街頭に天地父母神を祭り、天にも届けと線香の煙りを上げて懇禱しても依然として炎天続き、米は饅上りに高くなり、コレラや悪病が街の各所に發生し、行路病者と死者とが續出して、汕頭郊外の慈善墓地に存心善堂の堂内に運ばれる数が日々多くなつて來ると共に、毎朝どこからとなく數千の乞食の群れが、街のある一點に向つて蟻の行列を初める、これは街の富豪が善根功德を積むために一人一椀の施粥を始める、けれども依然として日早りが續く、處が眞言密教の大法たる灌頂開白の當日豪雨が降り出し、行列參進の際は晴れ上り、一同三摩耶戒道場に着坐し終り受者が大阿闍梨に三禮し大阿闍梨が驚覺の振鈴に入ると同時に霹靂一聲の雷鳴を隨伴せる大粒の雨、私等一同も中國人受者一同も只管に天鼓雷音佛の妙音に長夜の迷夢覺醒を感得したのであるから、灌頂に關係を持たない民衆が、われ勝ちに無理矢理にも入壇受法の熱望を向けて來た氣持はよく判るような氣がする。然し私等の密教重興運動は支那に正統密教の重興を目指してゐるのであつて、彼等衆庶が期待してゐるような法驗現前主義のそれではないのである。盛唐慧果和尚より我が大師が面授された密教其の儘を彼等中國人にお返しするための灌頂である、弘法大師が延暦二十三年長安青龍寺道場より請來されたる鎮護國家の精神と形態とを寸分も違はざるよう細心の注意を拂ひての大法修行である、新興中國民に對し大東亞建設魂を打込むための灌頂なのである、若し彼等民庶が期待せるような密教なら、譬ひそれが斷片的であるにせよ藏密系統の者によつて彼等の間に既に行はれつゝあるのである。また彼等の民俗信仰となつてゐる道教者流と何等異ならないものになつて終ふのである、個人的不老長壽と富貴福祿とを幾ぶ民族性は、密教の如意寶珠續生を徹底的に個人的福生の秘法と觀する向きが多い。私達が祈禱する處の玉鉢安穩、寶祚長遠、國体鞏固、萬民豐樂の奉爲は大分違ふのである、この點眞言密教を捧げて支那開教に従事する者は特に留査する必要がある、日本内地に於てすら眞言秘密の法として、何か神祕的法驗を信する者、若くは加持祈禱の現前利益を目標とせる向きが割合に多

い實状なのだから止むを得ないことではあるが、大師の立教開宗の本旨は徹底せる正統祈禱宗としての眞言密教なのであるから、この軌道から一步も離れず而も皇道佛教の生粹を發揮することによつてのみ、眞の中國民衆の魂の糧たらしめ得れば其の結果は、やがて中國の鎮護國家宗となり得るのである、かくして富強なる新興中國が建設され、大東亞共榮の一翼として日華提携一体の實が結び、初めて中國々民は幸福なる國民となり得るのである。私達一行の渡支目的もこゝに其の目標を置いてゐるのである。この見地から中國主權者の威光倍增のため及び仇敵米英擊滅のために、支那に對して太元明王秘法を輸出する必要も痛感されるのである。

三昧耶戒に入りても受者も説解師の王大依氏も心得たもので、何から何までソツがない。私達一同がびつくりする位である。午後七時魔事なく全員戒休得者となる。

當日親下の本尊寶前に讀まれたる表白次の如し。

夫れ惟れば秘密灌頂の法門は毘盧遮那内證の精要金剛薩埵受職の儀式なり。曩昔大日如來自内證法界宮の輪壇を構へて金剛薩埵に授け金剛薩埵南天の鐵塔に於て龍猛菩薩に授け第六祖不空三藏は大唐青龍寺惠果和尚に授けたり。我が高祖弘法大師は延暦二十三年入唐して惠果阿闍梨に授け翌二十四年秘密灌頂を受け金剛胎藏兩部の大法を相承し以て毘盧遮那の法燈を遍く日域に挑げ給ふ。

爾來法燈連綿として尙今に盛なり。中華に於ては不空惠果時代皇帝の歸崇高く億兆の信仰廣く實に隆盛を極めたりと雖も、漸く衰退し明朝に至りて全く根絶せり。従つて祖廟荒廢し香煙絶えて其の末流を掬する衲等、歎雲胸を覆ひ悲涙面を浸す所以なり。

然るに大正十三年六月先師雷斧大僧正中國密教重興の誓願を起し潮州開元寺に密壇を構へ王弘願居士外幾十百名に六

大無礙の印爾を授け且つ香港黎乙眞居士に四種曼荼の風光を傳へてより密教重興會鬱勃として興り枝葉の繁茂期して待つべきものありしが昭和十二年不幸にも事變勃發して以來重興會亦衰微の一途を辿り皇軍進駐と共に平靜に歸したるを以て昨年六月雷斧大僧正受法の弟子戸川憲戒僧正は密教重興の大任を帯びて當地に來りて將に滅せんとする法燈を挑げ獅子奮迅の法輪を轉じ漸く復興の曙光を見るに至る。

老衲亦雷斧受法の因縁を以て大日本眞言宗管長代理として錫を當地に留め灌頂密壇を汕頭密教重興會に開き法佛の三密を振興せんと切望す。教純學淺く徳拙く加へて齡七旬に達し其の任に堪へずと雖も上列祖の法恩に報答し下中華の人天を利益せんと欲し本月十一日乗船出帆海波を冒して當地に來り汕頭密教重興會道場を嚴飾して兩部大曼荼羅を開顯し祕密灌頂の法雨を中華民國の天に灑がんと期す。

仰ぎ願くば兩部界會の三寶兩祖大師信心を知見照覽し傳燈を決定成就、決定圓滿せしめ賜ひ更に大東亞建設日華共榮同存を速疾成就せしめ給へ。

乃至法界平等拔濟 敬白

昭和十八年五月二十八日

大日本眞言宗管長代理
護國寺 貫首

傳燈大阿闍梨 付法第四十九世大僧正教純
大法師位

五月二十九日 昨日の甘露法雨に續いて、夜中も降雨があり、氣候は一變して涼しくなつた。

四五日來たまらない暑さに襲はれ、生活も變化すると神経ばかり驅使して、頭がぼんやりして、身体も何處となくだるく、身体を持て餘す。

正九時には一同揃つて道場に向ふ、杉本のみは郵政局の呼出しに應じて一同を代表して出かける。一同の出した通信が抵觸する處があつたからである、係りの憲兵さんから鄭寧に通信上の注意を受け、直ちに道場に馳せ参すれば恰度灌頂が始まつた處で直ちに講所に入つて手傳う。大阿の佛法終つて、愈々第一會初夜の引入となる。今日の正受者は陳光烈氏である。最初双方慣れぬのと、言葉が通ぜぬのと手不足の爲め抄取らざりしも初夜に入つた十數名の者はよく灌頂に通じてゐるので、この人達が入壇終つて後は教授として手傳つて呉れるので後はぐん／＼進行され、午後の後夜には双方共にすつかり慣れて、午前は三時間半かゝつたのに午後は二時間半で終つた。居士達は非常に熱心で第一會の入壇者などは殆んど灌頂も授戒も幾度か受けた人々で慣れ切つてゐるのであるが、今回は特に日本から遙々來られた貌下の大阿の許に修行されるといふ緊張が手傳つてか印を授ける時など手が慄えるものすらあつた。これは彼等の純眞さを語るものであつて實に尊い事である。

日華兩國人の信仰比較

日本人は何と言つても信仰三昧に入り切れない。國家、國土、氣候からいつても眞剣になり切れないのではなからうか。その點皇國は有難過ぎて、我々は謂はゞ温室育ちであるとも言へる。

然るに中國人は五千年來兵戰惡政に虐げられ、更に今次戰爭の直接影響を受け。彼等の血の中には先天的に自己を護り、何とかこの苦しみから救はれたいといふ強い欲求が漲つてゐるのである。即ち眞剣な信仰の欲求となつて現はれて

來るのである。

それは恰度日本の戰國時代に來る日も、引續く戰禍に耐えかねて當時の人々が現世を厭つて、來世に安樂世界を求めたといふのと同じ様に彼等は現實に希望を失ひ、精神的に自らを慰める何ものかを欲してゐるのである。

今回の灌頂には敵地區から王日照、その娘王心珠が入壇してゐる。日照氏は廿九日到着したが娘は夜になつても到着しないので父親は非常に心配して調査方と救出方法を戸川師に依頼して來た、處が翌朝娘は無事到着したのである。段々聞いて見ると彼等は今回の灌頂ある事を傳え聞き、この絶好の機會に佛縁を結ばなかつたなら何れの時にか救はれんと親子語らひあつて十日程前に我が家を出たそうである。數日間山をよち道なき草を分け、川を渡つて泥まみれになつて我が歩哨線を突破してやつて來たのである。若し敵地區の人が潛入して我が歩哨に發見されるならば即座に銃殺せられるのであつて生命を賭けた灌頂入壇である。灌頂が終つて彼等は家に歸つて行くのであるが何うして歸つて行くのだろうか、彼等の身の上に不幸な事が起きなければよいがと一同で念するのであつた。

五月三十日 朝來慈雨頻りに降り温度ぐつと下る、居士達の話では當地の二月頃の氣候であるとのこと、三、四日來猛烈な暑さに悩んだ我々にとつてはこの雨は救ひの神である。

午前九時三十分初夜、一時より三時まで後夜、會員は皆眞剣である。今日からは教授も讀所も、係員全部が會員に依つて執行される。二ヶ月餘に亘つて連日習禮しただけあつて、實に滑らかに進められる、然も彼等は如法である。

午後四時から三昧耶戒執行、顔觸れを見ると殆んど九十%までが青年で然も智識階級である。

今日の正受者は當地切つての實業家林柏梁氏である。氏は現救濟院理事長で、救濟院といふのは孤兒の保育、救貧、授産等の社會事業を始め存心善堂など死人の片付けなど困窮せる民衆の世話をよくしてゐる團體である。

女居士などは戸川師の袈裟を模倣して之を造り、各々掛けてゐる。彼女等はことごとく上流家庭の人々であつて、道服を着て胸に密教會の徽章をつけ誇りを感じてゐる。南支の人々には密教の教理や練行が適合し彼等の要求に合してゐるらしい。大阿がお授けになる眞言以外は全部王大依氏が説教や解説を中國語でやつたが、中國人は之を理解しその度に一々うなづき禮拜する。日本の人々が折角入壇しても夢中で頂灌を終つてしまうのとは理解、信仰の度が根本的に違ふのである。かくては灌頂其の他が近き將來に中國人だけで立派に取り行はれる時が來るであらう事は疑ふ餘地がない。

警護に來た領事館警察の話に依れば汕頭では今回我々の大行事が日本人の間に非常な旋風を巻き起してゐるそうである。誰かは知らぬが餘りに盛大なのに變な氣を起してゐるのであらうと、我々の渡支の目的たる中國の人々の心を把握すると云ふ事は或程度成功したと思ふ。

本年一月以來會員が寢食を忘れて没頭した灌頂も熱狂裡に日々行はれてゐる。灌頂が始つてからは法悦といふのはこの事かと思はれる位喜び勇んで各自の任務を無駄口一つきくものもなく、黙々としてやつてのけてゐる。

彼等も満足であり、又我々もこの上もなく嬉しい、局外者が何と云はうと問題ではない。

夕食には正受者林さんから「アスバラガス、椎茸、春雨」などの御馳走が奥さん自らが手料理して届けられる。

實に美味で、お蔭でいつも勝手許で用意される馳走が賣れない、どんなまづいもの、不自由でも我慢すると覺悟して來た我々であるが現實に美味しいものを出されると、そちらの方に手が出る。人間の淺間しさに自ら悲しくなる、高岡さんの懇意な小川さんからは純日本菓子が澤山届く、近頃の内地では到底味はへぬ甘さ、美味さであつた。

何故密教が發展するか

この問題を私は種々考へさせられる、彼等が皇軍の武威に依つて急展開した東洋の新事態に自覺し、或はそうでなくとも、時代の流れに沿つて行く方が生活上便利なりとする、所謂便利主義からか。

或は又彼等が持つ本來の性格たる現實的巧利的専ら主義から来るものか。

或は又戦後物資に困窮し或は營業上に或は生活上に日本人の主宰する密教會に入つて便誼を得たいからか。

或は密教は我等の宗教と考へ、我等の文化であると考へてゐるのか。

或は止むに止まれざる眞の信仰上の欲求からか。

或は又密教そのもの持つ深祕性が彼等の性格の何處かに觸れるものがあるものであらうか。

或は密教が灌頂に大がかりの密壇を結び入壇せしめ、大阿と受者とが相對して法を授受するが如く、又日常は自ら秘かに修法する等多分に神祕性が何千年來その方式に依つて育てられて來た彼等の心と合致するのであるか。

いくつかの思索を詮索して見たが何れも當つてゐる様であり、一項だけでは當らぬ様でもある、それは人に依つて該當するものとしなれないものがあるからである。之を要するに總じて密教が彼等の性格と欲求に相應してゐる事は否めない、故に昔では權田大僧正が波支授法されてから僅かにして(王弘願先生の努力もあらうが)潮汕地區に八千人も香港地區に千人もの會員を吸収し得たのである。その後長い排日の受難期にあつても、絶滅する事なく會員に依つて立派に護り通され、あだかも深山の絞れ水が地下を潜つて流れ出る如く、今や南支密教會は勢よく奔流となつておゝらかに大河に流れ出で中國民衆を攝取して止まぬと云ふ状態にあるといつても過言ではなからう。

大僧正の來汕記念に 陳さん(中國人) 恤兵献金

陳可衡氏(潮安縣)は戸川師を通じ領事館へ現地軍恤兵金として國幣二百二十元を献金した。陳氏は密教信者で佐々木大僧正の來汕を記念して友邦日本軍に感謝の献金したものである。

註日本價に換算すると四十圓である、中國では四といふ數字を尊ぶとの事である。(汕頭日報五月三十日記事)

敬獻高德 佐々木大僧正四首

第四會の正受者を勤めた南桂區の郷長陳可衡の感激を粵東報紙上に載せられた。

華南密教倡重興、西渡海洋動大僧、灌頂於今開盛會、鮑江徒衆表歡迎。

亞洲黃種共存榮、宗教融和表愛情、從此兩邦消隔闕、還聞聖戰早完成。

萬緣未許盡成空、民族國家幸福同、密教眞言原有本、法師最是得其宗。

法緣教旨兩相宜、猶是榴花初綻時、此日江鮑重話別、應知旌節去遲遲。

郷族と祖廟

五月三十一日 台灣から南支にかけて郷族の研究なくしては何事も爲し得ない、民族の内部構成を知らずして事を爲さんとしたらばそれは失敗に歸する事は決定的であるとまで云はれる。

彼等は日本と異り、中心が無いから郷族々々で團結する、その郷族は各々祖廟を持つてゐる。そして祖廟を中心に結束するのである。

故に同じく陳姓、林姓を名乗つても拜する祖廟。依つて族姓を異にするのである。故に祖廟には公田即ち廟に附いた財産があつて氏族の食べ料は或程度保償されるのである。だから台湾ではこの廟の整理を行つてゐるが中々やかましく、つまづけは大問題となるのである。

總督府でもこの點に着意し目下慎重研究を進めてゐると聞く。

現に汕頭でも本會第一會の正受者となつた陳光烈氏一族の立派な祖廟であつたものを、皇軍進駐後或宗派に占有され到々〇〇寺別院にされて終ひ、主要建物は悉く本堂、庫裡、客殿に編入されたのでその爲めに陳さんは同族の中心を失ひ、非常に困つてゐるとの事である。

恰度其處へ戸川師の入汕となつたので、今は同氏は密教會の絶大なる檀越となつたとの事である、心すべき事である。午前初夜も午後後夜も、段々居士連も慣れて今日などは入壇者が七十七名あるといふに三時間位で終る。いくら急いでも少しも型がくづれない、永い間の練習がものを云ふのである。晝食には入壇者中に極樂素菜館の主人があつて供養といつて立派な料理が運ばれる、絢爛目を奪う如きも念の入つた料理である。

灌頂以來雨續き市民も驚いてゐる模様である。米は日々三弗五弗と下つて行き、全く灌頂のお蔭だといつて喜んでゐる。餓死人もぐつと減じ従つて存心善堂も閑散になつたとのことである。

六月一日 月が更つて六月となつた、願みれば相當永い旅である、だが灌頂の方は遅々として進まない。そんな事を考へるだけでも心の何處かに倦怠が出て來たのであらう、心の綱を引締める。

今日戸川師が領事館へ行つて聞くと、他の視察團と異り連日一行が汗だくになつて熱心に灌頂をされてゐるのを視察し(館員が入壇して調査したのである)世間の評判を聞いても、戸川師が前に言はれた通り灌頂に依つて日本文化の粹

を顯現するのだといふ事が認識されたとの事である。實は領事館でも始めは冷やかに見る人は管長代理などといつて金儲けかなんかに來て、南支の見物でもして行くのが關の山だと思つてゐた人もある様であつたが、實際に一行のやつてゐるのを見ると現下を始め朝から晩まで汗水たらして道場内で働いて居られるのを見て感激してゐるそうである。領事館では戸川師の今の開教方針を以て南支一帯の新宗教運動とし、これに依つて彼等中國人の日常生活に規律と統制とを與へんとさえ考えて居られるそうである。

戸川師はこの日、領事館で文化課が新設され、杉本粵東報社長、帝大出身者で秀島技師等四名と共に囑托として推薦任命されたそうである。

全てが順調である、共に慶び南支文化事業上に於ける戸川師の活躍を期して待つ事に仕様。

處で灌頂の方が入壇申込者が千五百數十名になり、而も毎日申込みが増加する一方といふがとても用意もなし彼等の熱望を叶える事は出来ない。止むを得ず從來の會員と授戒を受けた者に限る事にしたと戸川師からの報告であつた。

今日は昨日七十名もやつたから五十名である、後夜を終つて三昧耶戒であり。(正受者は陳立恒社會局長である)既に三回目であるから説解師王大依氏も慣れ板について來る、職業は女居士である。

音楽の天才謝荷さんが二ヶ月間も熱心に指導した文あつて散華對揚等實にうまいもので、その所作、曲共に一糸亂れず齋々至殿に出來た。中にも日本でも珍らしい、愛らしい二小女が華籠を配する所作などは、演練を積んだ物腰で、禮儀正しく日本式に運ぶ姿は法會の華とも見られた。實に立派なものであつた。

六月二日 久し振りに天気になつた。連日の雨で何から何まで濡けて腹の中までもへんになつて來た。

今日は七十名の入壇者、午前午後共に恙なく終了、潮兵團長中村次喜藏閣下に便乗請求書三通を提出する。

中山公園

夕食後一同で中山公園に車を飛ばして、夕暮までの一時を頭を安める事にする。自然を生かした、粗野ではあるが氣持の良い公園である。一隅にある巖石をあしらつた小山に登れば油頭を一眺に收められる、堂々たる市街である。こんな大觀を持ちながら何うして二十萬人位の人口かと思議に觀する位である。何處を見ても煙突一本ない完全なる消費都市である。今は貿易も絶え僅かに華僑の仕送り（昨年は三千万元あつたそうだ）に縋つて生活をして居ると言ふが何處を見ても生氣がない。

戦争に疲れた町の姿をまさしくと見るのである。

山を下れば相當の家庭の人であらう、夏の夕べを楽しみつゝ散策する風景は淡い旅愁をすら感ぜしめる、皆で田中技師に記念撮影をして貰ふ。

公園は革命の父孫文を記念するために作られたもので韓江の水流を取り入れ池に湛えた黄土色の水、葦の間に水禽が群れ遊び、南國を偲ぶ熱帯植物の並木、採菱歌の懐古等、何處か親しみ深い感にそよられるものがあつた。グラントの方へ出ると、事變さえなければ今頃は立派に竣工したであらうと思はれる市の公會堂らしい建物も基礎工事だけは出来上つたがそのまゝに放置されてゐる。この公園も完成された曉には日比谷公園位の規模にはなるらしい、扇谷師と知合らしい將校さんから言葉を掛けられ異郷だけに人懐かしい、お供に同伴した中國ボーイが漫歩に氣分を出したせいか日本の民謡を歌ひ出した。仲々良い音律なので賞めたら今度は支那唄を歌ひ初めた、一人のボーイはハーモニカで合奏する南支の若い者は音楽好きだと聞いてゐたが全くその通りで次から次へと歌ひ続ける、こうして漫る歩きの間に、本當

の支那青年の姿を見ることが出来て嬉しい。

中國の文化

中國人は國語を語る時決して外國語を交えない。どんな言葉でも之を自國語に翻譯して使用する。使ふにしても、英、美(米)、德(獨)、意(伊)などの國名は其の儘使用する位である。それだけに彼等は國語に忠實でありその點極めて國粹的である。従つて外國文化を吸収し、抱擁する力に缺けてゐる。

だから世界の情勢にも聞いのである、文化的にも水準から遅れてゐるのも又止むを得ぬ、彼等は何千年來惰力の生活を續けてゐるのである。

六月三日 灌頂の峠も越え、結願も近づいて來たので何となく楽しい、今日の入壇者は昨日七十餘名にしたので今日は稍妙くしてあるから一時間餘にして午前は終り、午後も二時に終了、午後四時の三昧耶戒に備へて休養をとる。

今日の正受者は南桂區の郷長陳可衡氏である。村は三百六十家族もあり一族である。従來はキリスト教を信仰してゐたが、この戦争を契機として敢然日本的な密教に轉向した、當地方切つての有力者である。

行列の様様や、女子讚歌隊を内地の人々にもお知らせしたいといふので寫眞を撮つて貰う事にした。我等の技師田中さんもこの時とばかり大いに腕を奮はれる。女子讚歌隊十六口の職衆は二組出來てゐる。我々の到着までは男女會員が二ヶ月餘に亘つて日々交代で道中安全を祈願してくれたそうであるが、内地の普門會其他關係者の祈願と比べて我々の力で安全に來たものとは考え得られない。全ての力が總和集積して始めて成滿したものと痛感させられるのである。善男善女達が何ヶ月でも生活面から離れた祈禱三昧に没入してゐる姿は到底内地では望めない事である。

彼等は閑と物に恵まれた人々（上流特權階級）である。

車 屋

街の足車！は少くとも上層階級の人々の外出には無くてはならぬものである。外に交通機關とてないこの町には車は重用缺くべからざる交通機關である。然し何年間使ひ古した車は汚れ傷み、挽く人間も疲れ凡そ似つかはしいものである。どこでも、何時行つても聲をかければ居ない事はない位車は何處にも居る。

だが車夫が瘦せ何時倒れるかも知れぬので、乗つてゐても餘程氣を付けねばならぬ。その車が我々が密教會に來た當時は會から灌頂道場へ（五、六丁位）行くのに始めは一圓（日本の十八錢）だつたが段々せり上つて二圓でなければ行かぬやうになつた。これは支那人の性格を良く現はしてゐる。

今日は受明灌頂としては最後のものです、三昧耶戒には幽冥灌頂と稱して心に念ずる人の位牌を抱いて入壇してゐる人が大分あつた。

亡き人に代つて灌頂を受けるなどは中國の良き一面を現はして居る。

説誠師王大依氏

王さんはドロソワーク組合の理事長で日頃戸川師に従つて修行する最も熱心な最も優秀な居士の一人である。現在密教會の理事長をして居る。

殆んど戸川師渡汕以來生業を擲つて會の爲め盡力して來た人である、今度も正覺壇の教授及び三昧耶戒の説誠師を勸

め一代の晴役を勤めた人である。音聲と言ひ態度といひ堂々たるもので我等の感激的となつて居る人である。王さんは灌頂が終つてから戸川師に對して涙を流して

「今回の灌頂によつて、灌頂の眞精神を掴む事が出來た様に思ふ。今迄の王弘願先生當時は日本にあつたものを模倣し、形を移したに過ぎなかつたが今度始めて大規模に行はれて灌頂といふ崇高なる大行事が密教の極致である事を知り得た。それと共に灌頂が本來中國のものである事をも知つた。よくもかゝる立派なものが日本に保存されて居たものである」と感激に震えて語つて居られた。

尊い体験者の實感である。

六月四日 この日我等の宿舍を訪ねた領事館某巡査部長の話に依れば、戦後の經營に従事してゐる邦人は概してその心構えに缺けるものが多く、日本人としての誇りを傷付け非國民的なものがあるそうである、寒心にたえない事である。最近中國人と結び、中國人は品物が輸入出來ないから日本人名義で輸入し之を數十倍の値段で敵地に賣つて暴利を貪り利敵行爲をして、それが發覺して退去命令を受けたものが〇人もあるそうである。

二十年前の邦人と現邦人とはまるで心持が違つてゐる。戦時下の日本人として何うした事か。我々には何としても理解出來ない、單に戦争に依る人心の荒びとのみ葬り去つてよい問題とは考へられない。

二十年前の邦人は全体が一家族であると云ふ温い情愛で結ばれてゐたが今日では日本人同志が到る處でいがみ合つて居るのは見るに絶えない

許少榮市長の招待會

國曆本月四日敬治素酌候
光

許少榮敬約

席設 市政府三樓

時間 下午七時入座
(新時間)

の招待状が各自に届けられる。

許少榮市長の一行招待會が今夕七時から市政府に催される。自動車に迎えられて、一行の外密教會代表も参加する。極樂食堂の出張精進料理である。開會に當り市長の中國人離れのした鮮やかな日本語で次のような歓迎の辭があつて食事歡談に入る。

今や大東亞戰爭ニ酣ナル秋、多事多端而モ酷暑ノ最中、長途ノ勞ヲモ辭セズ今度佐々木大僧正様ヲ始メ御隨員一行各位ガ態々本地方迄御巡化下サイマシタルコトハ、洵ニ當地民ニ取りマシテ旱天ノ慈雨ト申サネバナリマセン。本職ハ本市民ニ代リ厚ク御禮ヲ申上ゲマス。

去ル大正十三年權田大僧正様ノ挺身護法ノ御盡粹ニ依リ當地方ニハ既ニ御法化ヲ蒙リ、事變後更ニ昨年以來戸川僧正様ノ御努力ニ預リ、短期間ニモ不拘中國密教ノ重興ヲ得、今日數千ノ信徒ガ相集リテ盛大ニ親シク佐々木大僧正様ヲオ迎ヘシマシテ、曩ニ權田大僧正様ニヨリ傳授セル結緣灌頂受明灌頂等ヲ御執行セラレ、徹底セル信仰ト理解ヲ與ヘマシテ、眞ニ心カラナル日華親善ノ實ヲ結ベセル御法徳ハ必ズヤ顯現セラル、コト、確信スルモノデアリマス。私達モ微力ナガラ御法旨ニ副フベク日華提携ノ下ニ此ノ大東亞戰完遂ト共ニ大東亞共榮團建設ニ向ツテ協心戮力邁進致ス覺悟ヲ持ツテ居ル次第デアリマス。

今晚ハホンノ心許リナル御歡迎ノ志ニ過ギマセヌガ何ウカ御寛イデ一タ御法話ヲ拜聽致シタイト存ジマス。

尙ホ今度當地ニ御光臨ノ間ハ生憎來汕中省長ニ伴ヒ各縣下ヘノ巡視ヤ意外ナル彼此ノ要務ノ爲メ、終々不本意乍ラ失禮ノ所何分御諒承ヲ願ヒマス。

簡單ナル御挨拶デアリマスガ、茲ニ杯ヲ舉ゲマシテ、佐々木大僧正様ヲ始メ各位ニ對シ御旅途並ニ御健勝ヲ祝シ申上ゲマス。(原稿其ノ儘ヲ載録ス)

市長は永らく政界に苦勞し、且又民衆の生活にも直接間接に觸れて居られるのでその話も参考になる事が多々あると思ふから、食事中交はされた種々の意見や希望の二、三を記す事にする。

「信者の子弟を是非留學させ、それ等を親切に世話をして頂きたい。自分の體驗からも、それは眞に日本の理解者を造り、兩國親善の堅き礎石を築く最も捷徑であるからである。」

「又南支一帶には之と言つて纏つた宗教がない。民衆の信仰してゐるものは全く迷信であつて、例へば觀音様といつてもそれが神様か佛様かすら知らない程である。教育の程度は非常に低く唯々目先の欲の信仰に過ぎないのである。」

之は内地(市長は殊更に日本の事を斯ふいふので、九才から二十才迄即ち學校を卒業するまで日本に住居し、奥さんは日本婦人である關係上か?)から時々お出で下さつて、學問的にも宗教的にもどしどし指導して頂きたい。」

然しながら現段階に於ては悲しいかな、是も迷信、あれも迷信だといつて何でも彼でも禁止すると彼等は無智文盲であるから、結果何も持たぬ事になつて、却つてそれが爲に思はざる治安上の大問題を惹起する事になる。即ち精神的に窒息する事になるからである。

由來南支一帶は、シヤム、佛印、マライ、南洋一帶に亘つて働く華僑の源泉地帯であつて出先からの相當潤澤なる送金に依つて生活し、依頼心も強く、加ふるに米英の從來の施策が全て民衆の心を奪ふ根強い深謀を以てし、又民衆も指導者も全く無自覺に之を受入れ、依存してゐた爲め、惡習に慣れ、ドン底に墮ちても尙氣が附かず無反省に情勢に生きて來たのであつて、

即ち被壓迫民族として被擄取生活に甘んじてゐたのである。

救濟院でも救貧施設をやつてゐるが、彼等の自覺の無い限り何んにもならない。物のある中（限りある物で殊に急迫せる時局下にあつては尙更であるが）は生きてゐられるかも知れないが根本的に彼等を救うといふ事にはならない。

大いにその物なり、金なりを集めて投産事業を起して、根本的に救ひ上げるといふ様に計畫しなければならぬと思ふ。

彼等南支民族は出先の仕送りによつて生きて来た怠民であるから、一面生活が非常に贅澤である。

廣東料理といへば世界一贅澤であり、悪食で、非常に凝つたものゝ代名詞である位だ。普通の嗜好では満足出来ず、泣いて哀願する猿を捕えて来て車子の真中に穴を開け、頭を出さし、腦味噌を「のみ」で碎いて食べたり、又少女の頭をそらして尻にし、之に酌をさせたりする悪癖がある。

彼等は自分の贅澤享樂にはいくらでも金を吝まないが、決してそれを公共に向けない。

甚だ惨忍性をおび、非人道的である。この悪習を徹底的に芟除しなければならぬと市長は悲奮に面を暗くし、終りに私も官を退いたら早く内地に行つて留學生の世話でもして餘生を靜かに送りたいと語られた。

六月五日 今日愈々受明灌頂の最後であり餘す處明日の結縁灌頂のみである。よくも一同無事に頑張り通したものである。途中急激に變る酷暑や、四、五日續いた氣候はづれの冷氣や、部屋中が「カビる」様な氣候不順に襲はれながらも一人も事故を起さなかつたものである。一同の覺悟と緊張によるものであらうが、佛天の御加護であつた事を臆に銘じて感謝する。

本日附を以て現下より改めて密教會幹部に對し辭令を授與される。左の如し

中國密教重興會文書主任	王	大	依
同 副主任	蔡	勤	修
中國密教重興會潮汕地區法事部主任	黃	我	虛
同 副主任	黃	明	悟
中國密教重興會顧問	陳	天	助
		以上	

汕頭灌頂結願

無慮受明灌頂入壇者六百餘名、結縁灌頂入壇者百七拾餘名を收容し、盛會を極めて結願！ 何といふ輝かしい成果であらう。

現下のお徳は勿論であるが、私達の努力に依るものではなく、戸川師を始め關係者一同が打つて一丸となり熱心に精進せられた結果である。こみ上げて來る感激を壓へる事が出來ない。我々は日華兩國親善、永遠の發展のために丹誠籠めて祈願したのである。

後夜終つて大阿現下の後供養の鈴と共に隨員一同後讀を唱えて十日間の灌頂も全く千秋樂を告げた。至心合掌す

救濟院見學

灌頂終つて休む閑もなく林柏梁理事長の案内にて救濟院の見學に行く。戰禍の跡に呻吟する汕頭、從來頻々記した如

き狀勢下にあつては、單に市政府や資産家だけの力を以てしては此の種の事業の眞の成績はあがらない。民衆自らの覺醒のなき限り百年河清を待つより外途はあるまい。

その事業を見ると大別左の通りである。

孤兒院、貧民救濟、授産事業、奉仕作業、育兒狂人病院等々が大規模(主として手工業を中心)にして行はれてゐる。救貧などはいくらやつても追いつけない様に思つた。

育嬰堂(捨兒の育兒)を見たが實に多數のものが收容されてゐる、中國の特異な生活狀態、社會組織の缺陷を端的に現はしてゐるものと思ふ。

瘦せ細り泣き叫ぶ多數の子供を見ては之が人の子かと思ふ程で、涙を催した。だがまだ入院し、拾ひあげられてゐるものは幸福であつて、飢えに泣く(力つきて聲も出ない)無數の人々の事を思へば、早く何等かの救ひの手が彼等の上に加えられん事を念願して止まない。

◇

前夜戸川師法弟木戸憲祐君(蒙古開教師)死すとの電報来る。我等とて人の事とも思へない。何時何んな事が起るか解らないのだから。二人の法兄弟が一人は北に、一人は南に邦のため法のために盡瘁せらるゝは誠に御苦勞な事である。蒙疆の捨石となつて、骨を埋むるは皇軍將兵の戦死に比すべく宗徒として不惜身命を躬を以て實踐せられたのである。菩提のために早朝一同理趣三昧を修して敬虔なる廻向をなす。

晝には潮安縣長何麗聞氏より猊下に巡錫記念として「大古鑑」一具の献上があつた。實に立派なものである。荷造りして持出す苦勞の種が出来た譯である。

六月六日 今日一日は結縁灌頂である、最初は入壇者も精々百二、三十名位だらうと思つてゐたのに、愈々引入して見ると百七十名餘も入壇するといふ盛況さである。その中殆んど全部が上流家庭の子弟で、身なりも綺麗に、可愛らしい子供達ばかりである。入壇者中八割までが兒童である事は當地方の特色ある信仰を現はしてゐるものと思ふ。何故子供が多いかといふと、投華に依つて得たる佛様をその子供の因縁佛と定め、一生の護り本尊とするといふ。だから小さい子は生後何ヶ月も経たぬ子供が母親に抱かれて入壇するのである。入壇者が母親の乳房にすがり頭上に香水を灑がれる圖は内地では當抵見られない熱心な信仰狀態である。

結縁灌頂終つて、教授、讚歌隊の人々も兩界曼荼羅の前に額き三禮し、一同跏座して並び、日華合同にて般若心經一卷、光明眞言列祖寶號法樂を誦げ、大阿猊下より慰勞の辭があつて、特に優秀にして精勤者には賞狀の授與があつた。茲に十日間の大業、受明、結縁兩灌頂は全く千秋樂を遂げたのである。

中國殊に南支は密教相應の地である。居士達も熱心によく研究し、行を積んでゐる。個人々々が實に優秀である。例へば合掌をするのにも、虚心合掌と金剛合掌とがあるが阿闍梨達の印を結ばれるのを見ると二様にやつて居られる。據り處を示して呉れとか、儀軌を讀み之を詳しく會得してゐるので我々の一舉手一投足見逃さじと眼を皿の様にして見てゐる、油斷も隙もならぬ。

嘗て王弘願先生は日本から出た密教關係出版物は、上大學匠から下無名の學徒に至る人々の刊行物迄も大小逸せず實に克明に支那譯し、例へば伊藤、秋山兩師共著の眞言宗小史のやうな小刊行物までも會員に頒布し、研究させてゐたのである。従つて彼等の研究は相當廣く且深いものである。

密教は前述の如く時と人とを得て再び唐土に燎原の火の如く興隆して、將に昔日の燎亂たる黄金時代を再現せんとし

てゐる。

その不拔の礎石を築く今回の灌頂は前途を豫約するが如く輝かしき成果を収めて、關係者一同全く法悦の境に浸り醍醐味に満足し、密具に名残りをおしみつゝもあと片付けを始める。だが讚歌隊は我々が密教會に引揚げる時はまだ鐘や太鼓をたゞきつゝ、何時までもく頭張つてゐた。中國よ榮光あれ、密教會よ、限りなき發展をしてくれ、盡きない想ひと感慨を道場と中國の人々の上に殘して、車上の人となる。

居士の優秀性と其の動向

前にも述べたが一般に居士達は非常に熱心であり、素質も秀れてゐる。

我々が足をふみ觀察したのは主として南支那方面であつたが、實際に宗教に關係してゐる人々或は研究發表されたものを見ても、中北支方面でも、これらの居士達が活躍してゐる事を聞くのであるが、中國では然らば寺も僧侶も居ないかといふとそうではない。南支方面では餘り寺を見かけないが中北支方面では相當数の大寺も、又僧侶もゐる。南支でも僧侶はゐるがこの艱難な時局に遭遇しながらも、何れも醉生夢死と言はんか、無爲にして一生を終り、何等教化的に貢獻してゐるものは皆無である。

即ち僧侶は全く民衆から忘れられ見捨てられて終つてゐるのである。その代り民間の佛教研究が勃興し、彼等はこれを日常の生活の上に生かし居士佛教として、佛教本來の面目を發揮せんものと努力してゐる。

即ちそれは阿闍梨（指導者）を中心として發展活躍しつゝある、即ち人物中心の佛教運動としてゐる處に中國佛教の特色があると思ふ。即ち中心たる阿闍梨も居士達も非常に眞剣であり、信仰に生き、脈絡として躍動してゐる。

然るに日本佛教は教團（僧侶）中心の宗教、即ち職業宗教家の佛教となりつゝある事を否めない。この事は實に歎かばしき事であつて、心ある人々の常に憂慮してゐる處である。

即ち今の日本の佛教は萎靡衰退してゐると言はれても仕方があるまい。この僧侶の佛教、殿堂の佛教として組織化されつゝある現状に覺め、近年有能の士が奮起し巷の中に身を投じて奮闘されつゝある事は慶賀に堪えぬ處であるが、一般的に見た場合、その汚名を取除くまでにはまだく至つてゐない。現状に飽足らず、民間には所謂居士の人々が眞剣に研究もし、佛教精神文化運動を展開されつゝある事は一面僧侶としては悲しい事ではあるが又佛教としては大いに慶ばしい事である。

中國の密教が多數居士の人達に依つて生活の上に生かすと言ふ方向を辿つてゐる事は心強い事であり、尊敬すべき事であつて、我々も直接その面に觸れた丈に深く考へさせられるものがあるのである。今迄は中國人よ、じつかりやらうなど、他人事の様にも又思ひあがつた氣持をもつて居たが、私は寧ろ自分達の問題として日本の同侶達にもこの點深く反省して頂きたいと思ふのである。



今夕七時日本俱樂部に於て後援會主催にて歡迎晚餐會あり。領事館からは出席せらるゝ筈であつたが、山野署長が警視に昇進され上海に轉出されるのでその送別會があるので一人も見えず、主催者側を代表して陳天助さん丈出席せられる。茲に計らずも水入らずの會合となり、加えて久し振りに滿喫する純西洋料理と味噌汁の味、酒は佳し、飲み物は冷えてゐる。従つて廻りも良い、元氣大いに上る。

暫く目に休内に鬱積してゐたものが一度に發散した様である。

この日朝九時半から田中師は當地佛教會の要請に依つて、覺世學校居士林に於て我々の「渡汕の意義及灌頂に就て」中國居士四百餘名の大衆に對し二時間餘に亘り講演をされ、終つて通譯、筆談によつて質疑應答が交はされたが、その熱心さ研究の深さに驚いて居られた。この講演會は非常に意義があつた。次の如し。

中國僧俗に告ぐ

田 中 恭 盛 記

これは六月六日汕頭覺世學校居士林に於ける講演の概要である、文末の問答は中國居士達との筆談の概略である、居士達の密教觀の一端を窺知する資料にもなると思ふので添へる事にした。

私は今般當地に留錫中の眞言宗大本山護國寺貫首佐々木大僧正の隨員田中と申す者でござります。今回この居士林で皆様とお目にかゝれる機會を興へ下さつた林師遠主管に敬意を表すると共に、南支佛教を背負ふてゐる皆様と語り合ふことは私の頗る欣快とするところであります。お話を申上げるに先立ち佐々木大僧正が何故御當地へ來たか、その理由を説明申上げておきたいと存じます。

それは今から二十年程前、即ち民國十三年六月、當時日本密教の權威者大正大學長權田大僧正が潮州の王弘願氏の招きに應じて、隨員十一名を引具し御當地を來訪され、開元寺に於て王弘願、洪兆麟兩氏のために灌室を開き顔々相對し面々相照して、蘊蓄を傾け寫瓶相承されたのであります。その後弘願氏は權田大僧正を北越の草庵に訪ね、膝下に在つて酒掃の勞を積み、刻苦精勵の修行成就して、遂に權田大僧正から阿闍梨位を授かり愈々歸國されることになつたその際「貴公に對しては弘法大師から嫡々相承の大法を悉く授けた、この大法は弘法大師が貴國の惠果和尚から相承された

ものである、然るに貴國には密教の法種は既に盡き果て、終つて跡方もない、貴公は中國へ歸つたら必ずこの大法を復び中國に再興しなさい。日本で弘法大師以來今日まで壹千餘年の間、中國から請來した形と精神とを其のまゝそつくり大切に保存して來たのである、それを貴公を通じて中國にお返しするのであるから、必ず盛唐時代の密教華やかな狀態を再現して呉れ、」云々と

懇ろに依頼されたのであります、當時中國にあつては香港に黎乙眞、上海に程宅安、廣東に曼殊揭帝、慧光法師等が在りまして、何れも權田大僧正の膝下に在りて修行され、法脈を繼承されて法輪を轉ぜられた結果、南支方面全間に亘つて多數の入信者が續出し、汕頭にも潮州にも密教重興會が出來た許りではなく、廣東には六榕寺に解行精舍が建立され、香港には男女兩居士林が眞言宗の名を冠して創立されたことは皆様が既に御承知のことと存じます。然るに昭和十二年七月日華兩國の國交が破れて以來、日華文化の交流は全く遮斷され、其の影響は各方面に響いたのであるが、就中日本の權田大僧正や弘法大師を列祖として禮拜する重興密教會には頗る悪影響を興へ、十數年來隆々として盛えし中國密教が一大頓坐を來したことは誠に遺憾の次第であります。然しながら眞言密教の護法善神は興るべくして頓坐せる正法を決して見捨てるようなことは致しません、中國民衆に對しても慈眼視衆生の御本誓を常に垂れ給ふてゐるのであります、衆生の心水清ければ佛日の影は常に宿るのであります、論より證據、南京政府樹立といふ形で佛日の影は現はれてゐるではありませんか。降魔の利劍を振ふ皇軍の大威力となり、護法善神は權化されてゐるではありませんか。盲ひの者には見ることは出來ませんが、醉狂の人々は覺者を嘲つてゐる世の中ですから、盲者や狂者は對手になりませんが、活眼を開き覺者を以て任ずる皆様には、私のいふことは素直に納得して貰へることと信じております。日華兩國が兄弟垣に相関ぐの愚を止めたこと、互に相提携して共存同榮の實を擧げつゝあること、尙進むでは兩國は同甘共苦の誼を完

ふすること、そして皆様と私共とは只今こうして密嚴佛國土の境涯、さながらの靜安處に於て法悦にひたつて、共に信仰を語り合ふ兄弟同様の間柄になつたといふのも皆これ護法善神の賜物であります、そこで日本眞言宗に於ては昨年六月、權田大僧正受法の弟子戸川僧正及扇谷僧都を御當地に派遣し、密教重興運動に當らせることとなり、復び密教の勃興機運が廻り來たのであります。この機運を更に助成し、祕密眞言の教風を宣揚するために、佐々木大僧正は隨員六名を引具して、御當地へ到着し、去る二十八日に同榮會館を密教道場となし、灌頂壇を築き、嚴重なる灌室を開かれ、連日熱烈なる授法を修行されてゐるのであります、開白の日から今日まで霖雨霏々として降り注いでゐるのも、大法修行の靈瑞であります、あのように御當地の民衆が早魃に困り抜いて雨乞ひをやつてゐる有様を見た大僧正は、憐愍の情禁じ難く請雨經の三摩耶に入り、兩部の大法を嚴修されました、甘露の法雨は人天共に歡喜の際には必ず注ぐものなのであります、宋時代に日本留學僧成尋が請雨經を修し、靈瑞ありて宋帝より勅賞を蒙つたことは中國の史實に明らかなので、皆様の方が却つて良く御承知のこと、存じます。従つて御當地に於ては陳光烈、林柏梁、陳立恒、陳可衡等の有力なる各位を初め當地一流の活眼の各位は、競ふて入壇受法を懇請され、その數は七百名を越えるといふ盛況裡に結願を告げたような次第でございます、これは入壇受法者各個人のため許りではなく、新興中國のために非常に喜ぶべきことで御同慶に堪えない次第であります。私共は以上申上げたような理由で御當地に錫を留め、灌頂修行に丹精を盡したのですから、只徒らに眞言密教の教線を擴張するとか眞言宗の勢力を扶植するとかといふケチな量見は毛頭ございせん、唯々中國人士が密教の灌頂に浴し無上の法悦を感じ、大日如來の加持によりて個人的には幸福なる生活を得られ、社會的には人類相互の間に於て共存同榮の實を擧げ得られ、更に轉じて中國の國家的勃興の推進力となつて、立派な安樂國土中國を建設して貰ひたいといふ念願のもとに、佐々木大僧正は六十九才の老軀を擧げて、萬里の波濤を越えて遙

々御當地に巡錫されたのであります。

眞言密教の信仰が何ふいふ譯で國家勃興の推進力となるか、それは灌頂の法儀に極めて良く顯現されて居りますからこれに依つて申上げて見たいと思ひます。密教の證果は即身成佛にあります、この身このまゝ（父母所生のまゝで）成佛することが出来るのが眞言密教の教への妙處なのであります、その證果を得るには先づ第一に三密妙行を修めねばなりません、三密とは身に印を結び、口に明を誦し、心は三摩地に住すこととあります。「オーイ早く来いよ」と大聲で呼びながら掌を高く差展べ「オイデ〜」と招けば、言葉の通じない私が皆様にどういふ形態でやれば、皆様には必ず判つて來てくれる、それが只上の空で形だけでは駄目です、心から早く来いといふ氣持が私の胸中に満ち溢れてゐるなら、その氣もちは言葉の通じない皆様にも私の胸中は直ぐに通ずる、早く来いよの呼聲は「明」であり「咒」であり「眞言」であるのです、掌の招く様は「印」です、早く来いと思ふ切實なる私の氣もちは既に「三摩地」に住してゐるので、皆様には只これだけのことですら通ずる以上、如來と衆生との佛作佛業が通じない筈はありません。單なるラジオといふ器具も受話器といふ道具を耳へ着けることによつて發信放送が聴こえるではありませんか、空中に聲が放送されてゐる、受話器がなければそれは判りません、聴者、受話器、發送器、空氣、電氣、こういふものは因となり縁となりラジオといふものになる、この原理は眞言密教の三密双修によつて心と佛と衆生とは三無差別の境地開顯とほゞ軌を同じうするものであります、さて三密妙行の實踐實行は以我功德力、如來加持力、及以法界力の三力具現に移行し、祕密曼荼羅の開顯となり、茲に於て六大四曼の現相は、有漏雜然の我等が胸中に輝き渡り、我即大日の境界は炳現する。この曼荼羅開顯を儀式の上に現し、同時に自己胸中に祕密曼荼羅を建立するのが灌頂の法儀であります。若し一度中國民が一人も漏れなくこの信仰に入り、灌頂を浴するなら中國は直ちに密嚴淨佛國として、中國の國土と主權者と民衆とが

同一曼荼羅會上の諸尊となり、唯佛與佛の自受法樂の境界に安泰することが出来るのであります、かく我が功德力を積集し自己胸中に淨菩提心の成立を告げ、不退轉の勇猛心を發揮し、進んで三摩耶戒躰を發得する時、阿闍梨慈悲の引攝は大曼荼羅會上に投華得佛せしめ、如來加持力をして行者の心水に宿らしめ一印一明の授受によりて端的に即身成佛の境界を出現せしめるのであります、この間に阿闍梨も行者もその他一會の役者も、悉く打て一丸となり一佛建立のため總力を盡すのが即ち法界力であります。この一佛建立の嚴儀が灌頂法會であります。

我が日本國に於ては、眞言密教を鎮護國家の教として歴代の 天皇深く御信仰遊ばされ、祕密灌頂に入壇受法された天皇及皇族方多々居られるのであります、從つて密教の極秘には御即位灌頂といふものが傳へられて居ります。御即位の大儀に際し阿闍梨から祕印を受けられ、一天四海を治しめす一天萬乘の高御座にお登りに相成るのであります。中國に於ても密教の信仰が盛んになれば必ず國運は盛んになるのであります、國運が開けてこそ始めて國民個々の眞の幸福は得られるのであります、一日も早く皆様の胸中に三力を具へ、大日の慈悲、遍く四百餘州を光被せんことを希望して止まない次第であります。

問 答

問 三密双修に非んば成佛せざるや

答 成佛に即心と即身とあり、心の成佛は一密修行によりても可能なり、例へば彌陀の名號を口誦することによりて四方淨土の極樂を得、般若實相の觀照によりて色即是空の眞諦を發得するが如きは、即心の成佛なり。

問 萬法唯心なるが故に即心の成佛は是認するを得れど、即身とは……

答 我等は宇宙萬有の一分身なり、宇宙萬有そのもの、當躰を曼荼羅と稱す、從て自と他と佛と衆生とは二而不二なり

五本の指掌は別個の存存なれど、而も掌に即して見れば五即一なり、我等の三密も亦是の如し、宇宙の三密と平等なりこの眞理を素直に納得して自己を見直す時始めて知る、吾等の住めるこの地上は即ち曼荼羅會上なる事を、我等の一印一明は諸佛の一印一明と同交感通することを知るべし。

問 淨三業の印明を結誦せば三業清淨となること既に諒知す、蓮華合掌を該印となす理如何。

答 淨菩提心は蓮華の如し、泥中より出て清淨なる華を開く、貪瞋痴に纏れ而も菩提覺華を開くに似たり、故に蓮華合掌なり。

問 中指を稍開くは如何。

答 覺華の稍開く表示なり。

問 密教の最極祕印は淨三業印なりや。

答 然り、而れども更に祕印あり。

問 何故なりや、伏して乞ふ開示せられんことを。

答 禮を具して來問せよ、然らずんば能所共に越三摩耶の罪に墮す。

問 塔印は蓮華合掌を以て印母とするや。

答 然り、而して之れ亦最極祕印なり、鑊字は覺躰なり、鑊字竝立は煩惱即菩提なりと知るべし。

問 大日覺躰の祕印幾種ありや。

答 入壇受法して然る後知るべし、事相のことは知得を排し、感得を重んず。

問 余輩は王弘願先生より祕印を授與さる、然らば阿闍梨と稱して不可なりや。

答 不可なり、己れの稟承せる法を他に授け以て覺他せしめる大機に非ざれば阿闍梨と稱するを得ず。

問 日本眞言沙門は皆阿闍梨なりや。

答 然り、行位履修を完了せる金剛乘沙門は阿闍梨なり。

問 日本眞言宗徒は幾千萬人なりや。

答 詳數を知らざるも壹千萬以上は確實なり。而して壹萬三千の寺院竝に道場あり。」

問 護國寺の宗徒數如何。

答 詳數を知らざるも眞言密教寺院中にて、東京第一の大寺なり。

問 日本眞言沙門は戒を守るに特殊なる者ありと聞く、如何なる戒を持するや。

答 眞言沙門の持戒は顯教と異る、即ち一に正法を捨つべからず、二に菩提心を捨離すべからず、三に一切法に於て慳怖すべからず、四に一切衆生に於て不饒益の行を爲すこと勿れ、以上の四を四重禁戒とす。

問 三摩耶戒は如何。

答 四重禁を要約せば三摩耶戒となる、四重禁は菩提心向上一路を辿り、一刻一時も退轉せざる禁戒なり、三摩耶戒は發菩提心不退轉の戒なり、故に三摩耶持戒は四重禁持戒と同等なり、瑜伽精進して休まず、勝義、行願、三摩地を戒となすと第三祖龍猛菩薩は菩提心論中に提擲せり、就て該書を見て實地に三摩耶戒を受くべし。

問 三摩耶戒を護持せば比丘戒を持するの要なきや、先日戸川師より持戒せざる者は入壇受法せしめずとの故を以て戸川大師より受戒し、更に佐々木大僧正より三摩耶戒を受け入壇受法せり、その理由不解なり、詳説せん事を乞ふ。

答 戸川法師より受けしは三歸戒中心なり、通途の戒法なり、廣く佛教に歸する要件とはなれ、密教に入る要件とはな

らず、身装を整へんとせば先づ禪を緊め然る後衣服を纏ひ更に帯を緊めるが如く、佛門に入れば通途戒を持し更に密門に入れば三摩耶戒を持せざるべからず。

問 三摩耶戒持戒のみにて他戒は捨離して可なりや。不可なりや。

答 三摩耶持戒は米飯なり、他戒は副食物なり、以て知るべし。三摩耶戒は頭なり、他戒は手足なり、手足は切断すと雖も生命を保つことを得れども頭を切断すれば忽ち死を致す、三摩耶戒の戒體發得は眞言行人の必至條件なり、然ゆる熱火の求道精神なくして何ぞ即身成佛の勝果を期せんや。熱火の求道心、これこそ眞言人の日夜寢寐にも離すべからざる大戒なり、これを三摩地の法といふ。この三摩地の法あればこそ即身成佛は可能なり、龍樹大士は菩提心論中に「眞言法の中にのみ即身成佛するが故に是れ三摩地の法を説く、餘教の中に於て關して書せず」と以て三思せよ。

問 大法師の提擲、懇篤を極む、暗愚の我等に對し大慈悲を垂れ給ひしを多謝す。(以上で問答は一段落ついたので彼等の中で敬虔な面地で合掌拜禮する者があつた)

友邦佐木純大僧

昨往參觀救濟院

捐贈該院儲券五百元

友邦眞言宗管長代理、護國寺貫首、佐々木教純大僧正、偕隨員各位法師、應中國密教重興會之教請、萬里而來、宏揚大法、普救世人、連日各界人士、前往受戒灌頂者、不止五六百人、誠潮汕空前之盛大法會、本月五日下午五時、該會灌頂功德圓滿、大僧正以救濟院爲潮汕唯一之救濟機關、深爲中日長官所贊譽、亟應前往一觀、爰約該院人員導往參觀、同

行有戸川僧正、扇谷法師、及該會々員、一行十餘人、抵院視察一週、見育嬰堂二百嬰孩、工讀學校數百孤兒、凄然有愛憐之意、最後至大禮堂、全院兒童向大僧正一行頂禮、大僧正當即起立開示、勉勵各兒童保重身體、勤勉讀書、刻苦做工服從師長訓誨、力求上進、以爲國家將來柱石云云、諸兒童聆訓畢、頂禮拜驗、大僧正以汕頭有此偉大完整之救濟機關、衷心萬分欣慰、即捐儲券五百元以示贊助云。(粵東報六月六日記事)

六月七日 午前十一時より日本人墓地廻向。墓地は飛行場の隣にあるといふが中々遠い。珍らしく晴れ、ギラ／＼照りつける太陽に、車も喘ぎ乗り手も氣が氣でない。車が道を誤つて飛行場に出てしまう。赤い土砂の中に一塵をなし白壁に取巻かれた美しい墓地である。

途中汕頭隨一を誇つた日本領事館も嘗ての暴動に殘骸を露し惨めな姿を残してゐる、良い氣持ではない。過去の悪い記憶を引起させる様なものである。

到着すれば既に領事、署長、居留民有志、先生に引率せられたる學童等數十名來會せられ、直ちに理趣三昧一會の廻向をなす。

貌下は靈前に追善の挨拶をされ、法要を終り、遙々内地信徒より贈られたる萬休地藏尊を參會者各自手にして墓碑に散じて有無兩縁の供養をなす。(委細は別項汕頭日報参照)

午後三時同榮會館に疲れた身体を運ぶ、既に女居士や幼兒童達が押しかけて萬華供養の稽古にゴツタ返してゐる。明日の法要に備へて四時から習禮をなす。五時には日本人會の岡崎常任理事が迎ひに來られ、一度宿舍に歸り直ちに日本人俱樂部に向ふ。洋食に舌鼓を打ち八時過ぎ貌下の講演が始まる、集るもの資原副領事さんを初めとして四、五十名。貌下は「波油事情と灌頂に就て」と題して四十分餘諄々と説かれ、田中師から三力具足の意義に就てお話があり、來

會者一同熱心に傾聴。座談會に入り戸川師は二十年前の汕頭回顧談をすれば、銘々からも珍談佳話も飛び出し和やかな意義ある會を閉ぢたのは十時過ぎ、警戒警報下暗黒の街を三々伍々家路に急ぐのであつた。

日華陣歿者追悼並和平快來萬華法要

六月八日 朝來快晴殆んど灌頂間降り續いた雨もキレイに晴れて氣持がよい。今日は汕頭市に於ける最後の行事たる權田、王兩先師の追悼謝恩法要と、今次事變日華陣歿者追悼會並に大東亞共榮平和再來祈願會が同榮會館に於て行はれる。

正面一段高い處に兩祖の肖像が兩國々旗に守られて莊嚴され、午前九時から男居士と我々が職衆で、王先生の遺族遺弟等も列席して、散華對揚、光言行道にて讀經された。始めての事であつたが能く揃ひ立派に出來た。王先生の遺族などは非常に感激され入り代り立ち代り貌下の控室に來つて禮を言はれてゐた。後段の法要は時局柄、日華軍官民數百名が參列し、各方面から獻げられる花環は處狭きまでに飾られ、この時は我々と女居士が職衆となり、理趣經行道を以てする。

市政府を代表し陳立恒局長の弔詞、續いて諸官の燒香あり、中國の少年少女達の禮儀正しき献花ありて十二時過ぎ嚴肅裡に法要を終る。

續いて密教會主催の謝恩午餐會が階下に於て開かれ、集る者貌下始め來賓百餘名、陳光烈大人の挨拶あり、貌下は來賓を代表して「私は今回當地に來て中日兩國人が一心、一丸となつて宗教復興と密教會再興に懸命の努力を傾けてゐらるゝのを見て感激した。

今後或は雨の日も風の日もあらう。あらゆる難艱を突破して、宗教に依つて兩國の親善を計り、大東亞の建設即ち眞の密嚴淨土を建設せられん事を希望する」と述べられ精進料理を馳走になつて歸宿す。

佐々木大僧正一行

日本人墓地で法要

「目下來油巡錫中の眞言宗管長代理佐々木大僧正の一行は昨七日午前十一時より市郊外にあたる日本人墓地で嚴肅盛大に法要を催した。地元側から松原領事、山野署長、池上民會副會長、濱義勇隊長その他墓地に縁りの人々數十名が參列法要を營んだのち大僧正より靈に對して鄭重な挨拶があり、次いで大僧正以下讀經裡に東京の眞言宗信徒が眞心こめて作つた一萬五千體の地藏を各墓前に供養し、異郷に逝つた靈を懇ろに慰めたが、參列した地元側では今までにない高僧一行の法要にさぞかし地下の靈も満足したであらうと感謝してゐる。

日華將兵の慰靈供法會

油頭密教重興會では大詔奉戴日の今八日午前十時より中馬路同榮會館に於て日華軍官民多數參列の上日華兩軍將兵慰靈大護摩供法會を舉行する。」(以上は六月八日油頭日報記事)

日華の英靈安かれ

密教重興會の慰靈供法會

「興亞のため散華した日華將兵の慰靈と大東亞戰爭完遂を祈願する大護摩供法會は、大詔奉戴日の昨八日午前十時より

同榮會館に於て密教重興會主催のもとに盛大に執行された。會場には日華各方面より贈られた花輪が所せまきまで飾られ、重興會の善男善女多數が珠數を持つて參列する、定刻萱原副領事、陳社會局長等日華來賓の着席に續いて佐々木大僧正以下僧侶が靜々と入場、日華兩國旗に敬禮の後英靈に一分間の黙禱を捧げ、讀經に次いで、愛らしい中國男女兒童が相踵いで祭壇に跪き、英靈に迷の花を捧げて萬華供養し終れば、大僧正より英靈の冥福を祈る祭文が靜かに讀み上げられ、次いで中國側居士の讀經裡に散華があり、再び讀經裡に護摩が焚かれ來賓の弔辭燒香があつて法會を滞りなく終了した、なほ法會終了後、階下で大僧正を圍み來賓會員一同が精進料理を共にした。

盛況の法話會

佐々木大僧正を迎へ法話會が七日の夜日本クラブで開催されたが、集る人々は萱原領事始め密教重興會後援會員その他一般有志婦人連中合せて四、五十名であつた、大僧正の有益な法話に續いて田中僧正の灌頂に就ての話があり、あとは二十年前權田大僧正の隨員として來油した戸川、山田兩僧正と幸阪、高林兩老等との間に懷舊談が交はされ二昔前の珍話に思はず吹き出す和やかな集ひであつた。」(以上は油頭日報六月九日記事)

本市密教重興會

定期舉行慰靈祭

友邦眞言宗高德佐々木大僧正暨諸阿闍來大法師 行瀝油錫、情誌本報、茲悉大僧正暨諸大法師自抵油後 自上月廿八日起、與駐錫本市之戸川僧正在中馬路同榮會館、宏開灌頂大法會、連日來各地善信人士、紛紛集油受戒灌頂者、約五百餘人、現本市密教重興會、又定期於本月八日上午九時 敬請大僧正暨諸大法師于灌頂道場爲該會密教重興祖師雷斧大僧

正(日人) 先大導師弘公大阿闍黎修持追善法會、以報該會恩師、是日十時爲興亞中日陣亡將士暨殉難民衆修持大護魔供
 慰靈法會、昨該會經通告各該會員屆時前赴參加云。(粵東報六月十日記事ヨリ)
 (この日平岡さんから送り届けられたる呼寄狀寫し)

香港憲兵隊經由

呼寄許可願

本籍	東京市世田谷區三軒茶屋町九十六番地
住所	香港湊加運威考道五拾壹號
自分	戸主
職業	輸出入業
氏名	平岡 貞
生年月日	明治貳拾年四月一日
本籍	
住所	東京市小石川區音羽護國寺
身分	●
職業	眞言宗大本山護國寺貫首(大僧正)
氏名	佐佐木教純(外隨員六名別添附)

生年月日	
呼寄人トノ續柄	友人
呼寄事由	眞言宗管長代理トシテ香港眞言宗居士林(華人信徒)ニ於テ傳法灌頂ヲナシ華人ヲ教化シ日華親善ヲ計ルタメ(隨員六名)
右ノ通り及願出候也	香港ニ呼寄致度ニ付御許可相成度
昭和十八年六月四日	右呼出人 平岡 貞
香港占領地總督 磯谷廉介殿	
香港呼證第三一五號	
右願出通り許可ス	
昭和十八年六月四日	香港占領地總督部印

同時呼寄家族		
氏名	生年月日(年齢)	呼寄人トノ續柄
山田鏡阿	同	友人
田中恭盛	同	同
中義乘	同	同
篠山明信	同	同
杉本良智	同	同
岡村儀雄	同	同

潮州に就て(紹介)

一 概 観

土人は通稱府城と呼び、二十年前は人口二十萬と稱してゐたが(實數は十四五萬とのことであつたが)二十年後の今日では城内約十萬人、城外約九萬人、此内華僑としての出稼人一萬八十一人(昭和十七年四月日本領事館潮州出張所調査)である。

市街の東邊には韓江が蜿蜒として繞り、韓山金山の小丘が四邊に散在し頗る風致に富み、日本の京都のやうな感じのする所である。此地はまた韓公流謫の地として有名であるが、公は潮州に留ること僅か八個月である。然し潮州人の公を敬慕するものは今に到るも益々多く四時祭祀が絶えない

韓公 名は愈、字は退之。河南省鄧州南陽の人であつて、七歳にして書を読み、日に數千字を記すと。長ずるに及び博く六經百家の學に通じ、唐の徳宗の代、監察御史となり、事を以て陽山の令に却けられ、次に憲宗の朝に佛骨の表を上り遂に貶せられて潮州の刺史となつた。(元和十四年西曆八一九年、日本の嵯峨天皇時代弘法大師空海上人が高野山を開いて後三年)程なく江西省袁州に移され幾許もなくして再び朝廷に歸り史部侍郎となり、その歿するや禮部尙書を贈られ文公と謚された。公は宏才卓識力を古文の研究に致し八代の陋習を破り努めて周漢に追蹤し、又孟子を敬慕し異端を排し熱心に儒學を唱導した。

潮州の起原は正確な文献がないから判然しないが、城内開元寺の創始が唐玄宗皇帝開元元年といふから、今から一千二、三百年前頃には立派な市城であつたことは想像に難くない。

二 開元寺

城内甘露坊にあり、唐の玄宗皇帝が其即位に當つて全国各地に建てられた開元寺の一つであると、宋時代林紹堅、元時代金英先、相前後して同時に田地八千餘畝を寄附し、後清朝康熙十九年（一六八〇年）知府林杭學が府民と計つて大修繕をした。

前方本堂正面の本尊は法華經説法の釋迦佛、右は楞伽經説法の釋迦佛、左は大方廣華嚴經説法の釋迦佛、周圍には十八人の弟子阿羅漢像が安置されてある。後方經藏樓は正面本尊は阿彌陀佛兩側は觀音勢至（眉間に彌陀像のあるが觀音）兩菩薩で本尊阿彌陀佛は兩手を法界定印に結んで居られるので台藏界大日如來との區別が困難であるが、これは唐代のまだ清純密教の渡來前で佛像の威儀態型の判然しない時代の作品であることの證據で、日本では奈良法隆寺に其例を見る。若しこれも原型のまま保存されて居つたならば世界有数の至寶であらう。

周圍の一切經に就いては民國二十一年中國密教復興會が主となつて大修補を加へたもので、時の主管王弘願先生の補完記を抜記して參考に供しよう。

開元寺は潮州の古刹であつて其藏經七千餘卷、漢、滿、蒙、藏、四體あり。總じて貯藏の經を二つとする。その一つを徑山板と言ひ、冊本であり明朝の紫祖禪師の創刊したもの。その一つを清藏と言ひ、又龍藏といふ。前清乾隆年間康熙帝の賜ふ所である。寺僧能く保存したが年久しく破損殘佚もあり余（弘願先生）李居士祐甫倡と之れを補修した。庚午年八月に始めて十九個月で成功、凡そ補書の梵本經三百零九卷。裝裱の梵本經一千一百四十一紙。縫隙の梵本經一萬八千三百八十籤、添購の冊本九百八十三卷。造度經厨一。要費一千四百八十五元。

（取意）以つて弘願先生の辛苦が察せられる。

尙民國十三年六月に眞言宗管長大正大學々長權田雷斧大僧正は八十歳の高齡で此寺に來られ、隨員十一名と共に眞言密教の嚴儀灌頂を執行せられて、明朝に於て中華に絶滅した眞言密教を重ねて興すべき烽火を點ぜられたのである。

潮州に於ける灌頂

六月九日 朝八時約東の通り三菱公司から立派な自動車が現下用として廻される、愈々潮州への第一歩を踏み出す事になつた。

一行と居士達は福大公司のバスに同乗八時三十分出發、杉本のみは獨り残り、軍司令部及台灣銀行に行き用件を済し十時のバスにて潮州入りをなす。

軍司令部で平岡さんの御配慮になる香港總督部からの呼寄許可證を受取る。

昨日はバスがなかつた爲めか非常な混雜である。又汕頭を出て三、四里の間はぞろ／＼と蟻の這ふ様に郷から、田甫から街に向つて華人達が前進してゐる。然し誰も彼も疲れ切つた足どりである。人生に希望を失つた人達の行進かの様である。

この道路は元潮汕鐵路のレールをはづして公路としたもので、二つの町を繼ぐ最短距離をなす一直線の道路である。兩側の田甫には既に稻が實つてゐる。取入れも眞近であらう。途中岡といふ岡、昌といふ昌の中にも、水田の中の水にも夥しい墓所が目立つ。

二時間餘播られ、揉まれ、へト／＼になつて潮州に達す。來て見れば五百米か千米離れて敵と對峙してゐる。最前線の接敵地區だが町は案外落付いてゐる。だが寂れ行く古都潮州は日本の奈良の都とでもいふ處だ。こた／＼と家が接し

壁や家が崩れる儘になつてゐる。並ぶ家々の中に骨董屋が點在するのも古都の香を感じ懐しいものである。

この町は特に人も疲れ、町も汚れ、よけいに哀愁をかき立てられる。

古刹開元寺に至れば境内の一角に我が扇谷開教師が奮闘する日語學校がある。同平路の密教會に比して寧ろ寺らしく堂々たる構えである。現下は何縣長の公館に、我々は日語學校の一室に借用した寢台で起居する事にした。

古都を護り、民衆の心の慰安所であり重きをなす、開元寺唐の玄宗皇帝開元年間の開創になる古刹である。當地特有の櫛比した商家の並ぶごた／＼した町の中にあり、山門を見ると大寺とは見えないが入つて見ると廣壯なる構えである。山門に入り、廣庭の突き當りが大雄殿で乾隆三十年乙酉和碩親王の題する「寶洲金界」の額はあたりを壓する。大雄殿の後には經藏樓があつて今回戸川師にこの建物が管理せられるに當つて潮州警備隊部長小松大佐の筆になる「遍照殿」の大額が木の香も新しく光つてゐる。

開元寺の建物は石柱、石材を用ひ、年を経るに従ひ古色ながらに、堂宇は堅牢を誇つてゐる。

この二大建築物を中心に廊下傳ひに所屬僧侶の僧坊、方丈。地藏閣、觀音閣、神農天帝閣等種々なる建物があつて輪換の美を誇つてゐる。

然し堂宇、境内共に荒廢に委せ往昔の隆盛を憶ぶに過ぎない。寧ろ豪壯を極めたる没落を感じしめるのである。今の監院（住持は）日本にも來り、高野山で修行した純密和尚であるが、舊態依然たる支那僧侶の群れに伍し安居生活の鼓を脱し切れないためか、折角の名刹も一向に生きてゐない惜しい事である。

午後四時一休する閑もなく、準備を整へ大雄殿に於て三昧耶戒開壇、小松部隊長は廣東から最高指官閣下が御出でになつて巡閱があるといふ忙しい中に入壇せられる。入壇者は急に激増して用意の品が不足し困つた。正受者は前縣長陳

獻猷氏である。入壇者百三十名の中邦人入壇者が九人あつた。

第一線部隊長の入壇は灌頂に光輝をそへ意義あらしめた。終つて晚餐を共にし、陳氏の歡迎の辭あり現下の挨拶型の如く精進料理頂きながら交驩をなす。

この時の祝詞は森元賢治さんの通譯に依れば

「本日は我が潮安地方にとつて無上の光榮に浴した最も喜しい日であります。友邦日本の護國寺大僧正佐々木管長殿下並に一行の高僧を迎へ我々一同喜びに堪へません。凡そこの喜びには四つの事柄が挙げられます。

其の一として大僧正は御齡既に古稀に達せられんとし、密教の泰斗として崇められ、今回千里の遠途を厭はず波風を冒して一行堂々と目出度く當地に御安着され、我等同胞を救濟せられんとする事でありませぬ。

第二は我が潮州に於ける密教は衰微の一途をたどり、其の精神も又衰頹してゐる現狀であります。顧みれば二十年前故權田大僧正も當地方に御光臨の榮を賜つたが悲しい哉當時は信者少く開教の効果も遺憾乍ら誠に薄かつた様に承つて居ます。大僧正の去られるに及んで民衆愈々其の御教へを思慕し、自分等の非を後悔したが時期既に遅かつたのであります。

幸ひ茲に密教々主は遙々友邦より御來臨下され、我密教重興會の興隆を計られて未來の光明を見出さんとする時、今般更に大僧正を迎へ得ること千載一遇の喜びたるや實に名狀すべからざるものがあります。

第三に大僧正は其の徳望高遠にして其の御人格並に名聲は友邦の津々浦々に知れ亘つてゐると承ります。民衆の信仰は勿論殊に慈憫を本懐とし、よく世人を善導して至心回向諸惡を莫さず、衆善を奉行する等凡そ人類社會の安居樂業もこゝより出發するものと存じます。

吾人は、此の喜びの日を一個の大事な機会たることを認識すると共に、其の功德又大なるものと信するのであります。

第四は大僧正の本願とする處は全て國の爲め民の爲め、即ち國家の興隆と民族の安寧幸福にありまして決して一個人の幸福を求める爲に功德をなさるるではありません。時恰も我が大東亞民族の團結精神の最重要期に當り、就中日華親善提携の徹底を計るべきの際密教を通じてこの事を計るに如くはありません。則ち宗教同じければ信仰同じく、従つて願う處も又相同じきもので、相互襟懷を開いて相交れば事の運びも滞りなく何等の隔りも無いのは勿論でありまして國家間に於ける、將又社會民福との關係も密接なるものがあると信じます。

此の度御來潮下され、同胞擧げてお歡迎申上げ、其の喜びたるや筆舌を以ては言ひ盡せないものがございます。

本日の因縁はよく現下の狀勢に適ひ、密教の復興と民心の覺悟を促し、世界の平和をもたらしめるもので此の日は全潮民をして欣快措く能はざる永久忘れ得ない感激の記念日でありませう。大衆相集りお歡迎申上げ誠心こめて大僧正始め御一行の安着をお祝ひ致すと共に其の大堆大慈悲の御徳は必ずや我等同胞をして齊しく迷から覺醒せしむるもので恐らく萬世の歴史を飾る事でございます。」「(原文のまゝ)

潮州の開教事情

今から三百年以前即ち明の時代に全支は禪宗一式に統一せられ、眞言密教もこの時絶滅しあとを絶つた。その後百年以前頃より英米佛各國が漸く東洋に目を注ぐ様になり。歐米人の往來頻繁となるに従つてキリスト教の宣布が開始せられ各所に教會の設立を見るに至つた。

その頃民衆の間に猛烈な排外思想が擡頭し歐米文物の破壊が敢行され、一切の外國調が中南支一帶から消えさつた。然し乍ら時を経て革命政府の成立と共に再び英米勢力の潛入となり、米國の如き二十年前權田親下の入潮せられた當時は左程でなかつたが、僅々十七、八年前より非常に力を注ぎ、當地丈でも投じられた資本は三億ドルもあつたと言はれる。

佛國宣教師が教へた「ドロンワーク」は米人資本の投資により支那民衆の過剩勞力を利用して最低賃銀を以て、麻布に刺繡をさせ。之をどん／＼輸出し高率の利潤を得てゐたのである。當地のドロンワークは全支の七割を占めるといふ位だ。それは恐るべき英米式搾取吸血傳道方式に依るのである。即ち

「教會建設——學校開校——病院建設——銀行會社開業」の順序に依るもので、キリスト教を最前線に信者を吸収し信者に非ざるものは、學校にも、病院にも入れない。又その學校を出たものでなければ、會社にも就職させないのである。

又支那要路と手を握つてゐるから、その學校を出たものでなければ官位にもつかせない、會社に就職もさせないといふ大規模な組織と深い企畫と徹底せる方策に基いて事業が進められるのである。

極端な「物と權力」との開教の前には民衆を餘す處なく吸収しつくして止まない。開教を始めて以來僅かに二十年足らざるに全市の八割通りはキリスト教信者、即ち歐米崇拜者となつてしまつたのである。之が爲め従つてさしも隆盛を極めた王弘願先生の密教運動も、日に／＼衰微し、最後には王先生も潮州に居たゝまらず逃げ出し、汕頭に轉居しなければならぬ状態にまで立ち到つたのである。

戸川師も就任以來眞言宗としては、權田大僧正重興第一の縁りの地として歴史的な地であるから、何としてもその復

興を計りたいが單に精神的な開發をするといふだけでは物を與へる宗教に馴らされた民衆には効果が上らぬ事に着眼し取敢えず、小松部隊長の後援協力を得てこの點を考慮し以つて心の開發をする、即ち日語學校を本年二月から開校し、専ら校長として扇谷師が努力を拂はれてゐる。

又目下戸川師は、汕頭に於ける救濟院の如く希望と光明を失へる數萬の人々の爲めに、又眞に土地の開發振興の爲に汕頭の後援會を動員して、元潮州にあつた救濟院（今は壊滅してゐるが）の復興を計畫してゐると言はれてゐたが、早く組織され運行される日を民衆と共に念じて止まぬ。

日語學校

今台灣師範學校出身の黃賢（台灣邦人）改姓森元賢治さんが熱心に校長を輔佐して生徒の指導に専念して居られた。本年二月十一日の佳節をトして發足し、第一期は五月十四日に終了式を舉行、優秀なるものには小松部隊長自ら賞品を授與され、生徒の感激を一層深からしめたといつてゐる。

その生徒の成績は縣立日語學校よりも上つてゐるといふから愉快である、現在收容人員は百名を突破し、第一期終了生の中から優秀なるものを選び派遣し、汕頭以來我々の身の廻り及び通譯をして呉れてゐたのである。

潮州密教日語學校々則

開校要旨ト其ノ方針

- 一、本校ハ日語ヲ専ラ教授スト雖モ佛化ニヨリ健全ナル大東亞建設ニ資スル人材ノ養成ニアリ
- 一、本校ハ傍ラ精神ノ陶冶情操ノ鍊成衛生思想ノ涵養ノタメ課外ノ訓育ヲナス

一、至誠至善堅忍力行ヲ以テ校訓トナス

入學者資格

- 一、大東亞共榮圈ニ對スル認識ヲ保持シ圈内友邦ト同甘共苦ノ意氣ニ徹スルモノ又ハ其ノ子弟
- 一、信仰ノ道ニ違フナク佛恩報謝ノ淨念ニモユルモノ又ハ其ノ子弟
- 一、指定ノ入學考査ニ合格セルモノ
- 一、年齢十二歳——二十歳（男女不問）

潮州密教日語學校々則

開教要旨及其方針

- 一、本校以日語爲基礎教授兼佛化而養成健全之大東亞建設人材爲目的
- 一、本校附隨有陶冶精神、鍊成情操涵養衛生思想之課外訓育
- 一、本校以至誠至善堅忍力行爲校訓

入學者資格

- 一、抱有大東亞共榮圈之認識及貫徹共榮圈内友谷同甘共苦意氣者或其子弟
- 一、無違信仰之道而擁有感謝佛恩之淨念者成其子弟
- 一、入學考査及格者
- 一、年齢自十二歳至二十歳之男女

入學人員

初等科
高等科

費

三箇月 三圓前納

顧問 潮州警備隊長殿

名譽校長 密教會主管 戸川憲戒殿

校長 密教會 扇谷重憲

理事長 林尉臣

理事 巫光所長 黃史園 陳國光

扇谷開教師

潮州密教日語學校長の扇谷重憲師は戸川師の良き協力者として、昨年十二月當潮州に赴任して來たのであるが、師の住職地は弘法大師の止宿寺飛鳥四大寺として有名な奈良縣高市村の弘福寺（日本書記の川原寺）であるが、祖父の愛國的熱血を受けた師は平和な住職地で、暖衣飽食の夢を食つてゐるにはあまりに血の氣が多い、敵傍中學から大阪齒科醫專を卒へ齒科技術を磨き、優秀な技術者として世に立つたのであるが、宗祖大師の血の通ふ師をして遂に蒙羅派遣僧訓練道場に走らしめ、今や聖戰完遂の一翼を買つて最前線敵前千米の當地に不惜身命の活動を續けてゐる。日語學校の合ひ間には警備隊將士の齒科治療に或は潮州在住民の施療に、日々二十日鼠の如く働き、開元寺に止宿し寺の支那僧に對

し身を以て大乘佛教僧の本懐を垂範してゐる、師は菩薩の六度滿行そのまゝの姿として尊くも涙ぐましいものがある、小松部隊長が師の後援者として絶大の力を吝まない所以もうなづけるものがある。私達は内地を發つ時、大和長谷寺で師の令夫人と會つた際何か傳言があつたら傳へるからと申出たら、老母が近來めつきり弱つたので出來たら一度歸國するやうにまた子供も會ひたがつてゐるからとの夫人の傳言だつたので、これを師に傳へると歸國したら扇谷は元氣でやつてゐるから安心するようにとの一言だけ傳へて貰ひたい、只これだけの言葉だが異郷の空に無報謝の佛行にいそしむ師の後姿を拜みたいような感に打たれざるを得なかつた。

潮州滞在中に師のために何か慰勞の催しでもと考へたのであつたが、遂々其の機會を得ず別れねばならなかつたのは何としても心残りでならない、扇谷師よ！密教重興のために否新興中國の若い青年等に眞の幸福を齎すために、何時までも戸川師の良き協力者となつて下さいと只管に念願して止まない。

六月十日 古都の朝しめやかに小雨が降つて、開元寺の僧堂からは曉暗を破つて中國には珍らしい沈んだ太鼓や木魚の音が流れて來る、何となく日本的な寂の情趣が感じられる。

旅から旅へ、後から／＼行事に追はれてゐる我々も連日落ち／＼眠れず心身共に疲れ切つてゐる。

汕頭に比して環境も異り、寺らしい雰圍氣に此處に來て始めて氣の落付きを感じる。今日は一日の入壇者百五十名と聞いては氣が氣でない。

内地の受明灌頂と異り當地のは全てが鄭寧で傳法灌頂と變らないから大變である。

汕頭ではこれが爲め入壇を一日五十名乃至七十名と限つて行つたが、此處では日程の關係上今日一日で終了してしまはねばならぬ、初夜の終つたのは一時近かつた。

午餐は開元寺純密師の招待會があつたが時間の關係上ゆる／＼やつてゐられず中には中座するものさえあつた。午後二時より後夜開始四時半過ぎ終了。入壇者一同と經藏樓前にて記念撮影をなす。

韓江亭の一夜

小松部隊長と何麗聞縣長から次の様な招待狀が届けられる。

國曆六月十日
潔治非酌恭候

光臨

小松 潤三 敬訂
何 麗 聞

席設 韓江亭
時間 下午七時(正)

小松部隊長は今夕の招待會に態々自ら自動車を以て迎ひに來られ、會場たる韓江亭に案内を受けた。

樓上に登れば前方の通稱筆架山(韓山)の彼方黃田山には王弘願先生の墓がある、敵地區に當るので、部隊長のお話では、一個小隊をつけてあげるから御出でになりますかと云はれたが公務のお邪魔になる事を恐れて辭退を申上げた。

眼の下には韓江の流れが鈍く濁れて流れ、あたりの風物は之が敵と對峙してゐるのかと思はれる位靜寂を粧つてゐる。何千年の歴史を物語るが如く、河沿ひに堅固なる城壁の堤防を圍らしてある。處々民家の爆撃の跡はあるが今はありし日の戰鬪を忘れたかの様である。

部隊長は自ら指さして、配備、敵情等を説明される、銘々が軍司令官になつた様な氣持になる。

主催者側何縣長、部隊長御兩人とバルコニーで風を入れながら卓子を圍んで菓子頂き茶を啜る、直ちに設けの席に至れば配膳終つて客を待つばかり。一行と邦人代表等併せて十七名、主催者側を代表して小松部隊長が「法儀執行とは

云へ日華親善のために汕頭以來一日として休む閑もなき盡方を謝し、兩國親善に残されたる功績を讃へ、潮汕兩地共に非常なる成績を挙げられ、中國民衆は法悦に隨喜してゐる。今夕は今までの苦勞をさらりと忘れ肩のコリを取つて頂きたい」と碎けて挨拶をされ、戰線とは思へぬ純日本料理に苦心の程を見せ、立派な料理であつた。

その中に韓江亭の娘二人、姑娘等の舞踊が蓄音器の伴奏で繰返し進められる。寛いだ宴會となつて、部隊長自ら白頭山節を歌はれ、宴愈々酣となり内地に歸りたる心地する。

歌ひ、飲み、食し、心残りなき迄に馳走になつた、敵前千米小銃彈の有効射程距離内に於て日本僧を圍む軍官民の餘りにも和やかな集ひは夢の如き感激を與へ、終生忘れぬ心の記念である。宴は九時三十分了つて自動車に送られて歸宿。

日語の生徒達十數名は我々の歸りを待つてゐる、何のハズミか卓子を圍んで歡談してゐる中に、日本歌謡、支那民謡を各自に立つて歌ひ一同これに和し、元氣一杯に歌ふ兩國々歌を交驩する時、彼等は誰も指揮するものもないのに自發的に兩國々旗と國父孫文と汪精衛氏の寫眞に不動の姿勢を取り敬禮をし、忠誠を誓ふが如く、眞劍の態度で歌ふのを見た時、彼等にして日常の言語動作からして何處にこんな熱と意氣が潜んでゐたかと思ふ位、ガラツと變つた態度で、一同もその嚴肅なる空氣に居住ひを正す位であつた。新らしき中國は彼等青年の魂の中に宿つてゐる事を瞭つきりと看取した。

痛められ、虐たげられ通して來た彼等の心の一遇には、まだ愛國の熱情が全く燃え切らずに残つてゐたのである。この細やかな火を絶やしてはならぬ。この細やかな火こそは次の時代に點する種火であり、國家の生命力ともなるのである。省て汪主席が「若し果して青年なくんば即ちまた新國民運動なし」と極言され、民族指導の目標を青少年に置かれ

た事も背けるのである。中國の希望は懸つて青少年にある。大切に育て、やがて大東亞に燃え盛る炬火として育成しなければならぬ。

その中に愛國行進曲、太平洋行進曲等熱する程に圓陣を畫き手を打つて音頭を取る、更け行く夜に少年の意氣燃え近所隣りも、警備の兵隊さんも驚いた事であらう。

そこには反目も、猜疑もなく、阿諛もなく媚態もない素朴な純情のみの世界が繰り廣げられ一同感激に面を紅潮させてゐた。

又日本人とか中國人とかいふ事は忘れられ、先生もなく生徒もない全く歡喜の世界、一つになつて二十數人が笑ひ、歌ひ。踊り踏み鳴らす足音はやがて兩國を堅く結びつける紐帯ともならう。扇谷師も此の夜ばかりは眞から嬉しさうであり、戸川師もいつものムツツリを忘れたかの如く破顔高唱子供等と共に踊り破天荒の情景を呈した。生徒達の喜びはこの上もない。

扇谷師はこの楽しみがあればこそ、不自由な、時に苦しい第一線生活も忘れてしまふといつてゐた。同師が愛國詩を吟ずれば生徒等は胸擧げをしてこれに應ずるといふ具合で、十時には第一線では消燈されてしまふ、今度はロソクを點けて歌ひ踊るといふ始末で、さながら原始人の舞踊會の様だつた。

一同旅に出て以來の眞底から歡喜に浸つた。今日は何といふ良い日であつたらう。

中國の青年と其の思想

機會ある毎に中國の青年と話し合つて見た。青年たちは日本に憧れてゐる。我々に接近する程の者は既に親日的な氣

分を持つてゐるものであるからかも知れないが、人なつこく、彼等の相貌にも舉措動作にも、その様が窺はれるのである。

日本の指導下に是非とも中國の建設に挺身したいといつてゐる。それだけに現在要路に立つてゐる人々に對しては非常な不滿を持つてゐる。今の政治には飽き足らないのである。

彼等は目の當りに見る同朋の苦難に呻吟する姿を見ては胸がかきむしられるらしい。

その切々たる衷情を訴へる眞劍なる態度には襟を正さずにはゐられぬ位である。

彼等が政治に對して關心を持つてゐる證據である。といふよりも政治に對して非常に敏感である。又軍人になる事を極端に嫌つてゐる、日本の軍人は戦地へ來てゐても必ず歸つて行くが中國の兵隊は一度も郷里に歸つて來たものを見たことがない。又戦死しても日本では現地でも立派に司令官が祭主となつて慰靈祭をやるが中國では嘗てその事を見たことがない。死ねば死につ放し、後は一向に顧みられないのである。これでは兵隊になる氣がしないと云つて居た。

何から何まで行き届いた日本さぞ内地へ行つたらば立派な國であらう。是非一度日本に行きたいこれが彼等の心からの念願である。

中國潮州密教重興會灌頂大會職事一覽表

顧問 小松部隊長 領事官鈴木政一 憲兵隊長 大家武夫會長 中澤連絡官 何縣長麗聞 陳縣長獻猷 范局長

贊 楊區長少崖 洪先生濤 純密法師

總務組長 鄭萬年

副組長 周順西

- 組員 林天然 邱瑾榮 楊植初 王定之 劉經慧
- 宣傳組長 巫光
- 副組長 黃子明
- 組員 陳覺人 洪少英 林照巖 洪錫五
- 連絡組長 黃賢
- 副組長 楊伯勤
- 組員 王雲濤 曾憲忠 吳沛霖 陳光森
- 法事組長 謝曉巖
- 副組長 洪膺臣 黃耕雲
- 組員 鄭少珊 林笠舟 柯靜采 周顯西 吳慧廉 陳勵密 洪覺三 蕭慧晉
- 會計組長 黃史園
- 副組長 吳慧廉
- 組員 夏楊先
- 招待組長 謝作葵
- 副組長 唐晏臣
- 組員 倪景初 曾再如 蔡星孫 陳去非 林輝山 倪醉六 陳華梅 林璋 梁卓鵬 邢游 莊少珊 楊少軒
- 庶務組長 許安然

- 副組長 洪覺三
 - 組員 丁慧生 林慶元
 - 文書組長 鍾裕臣
 - 副組長 黃家瑩
 - 組員 翟光偉
 - 佈置組長 黃瑤珊
 - 副組長 蔡杲春
 - 組員 賴光 李呂標 黃觀秋 黃家權
- 別れに臨んで潮州密教重興會理事黃史園氏等から感謝狀が届けられる。左の通り

以上

感謝狀

本會此次感蒙
 大日本護國寺大叢林佐佐木教純大僧正暨諸大法師德高望重密教明星千里遠
 來宏法利生重興密教弘開灌頂法會東亞民族瑤聞法化渡脫迷津此皆咸沐大
 僧正暨諸大法師法雨之普施也謹此感謝 致敬
 佐佐木教純大僧正 惠存
 中國潮州密教重興會理事

中華民國三十二年六月十日

黃史園
 巫安然
 許安

開教エピソード

潮州から歸つて來ると慌しい中に微笑しいニュースが入つた。それは過日灌頂中に熱心な會員の一人に料理屋を営む者があつて、その主人が阿片の大量密賣をやつたのが發覺して、禁煙局に擧げられた儘歸宅を許されぬといふ事で、妻も娘も（入壇し娘は讃歌隊の一員である）戸川師の許にお百度を踏むで何とかしてくれと歎願する。連日の灌頂に疲れ切つてゐる戸川師は重い足を引ずつて、先づ今回入壇した警察局長の妻君に面會し「あなたの法兄弟が阿片の密賣であけられてゐる、之を見殺しにする事は出来ぬから何とかしてやつてくれ」と頼んだ。妻子達は不安に堪えぬので戸川師の傍を離れない。師は法要が忙しいので、お晝の休憩時間を利用して禁煙局に車を飛ばし交渉した處、當局は大仕事をした證據があがつてゐるのだからと言つて五十萬圓の罰金を主張して譲らなかつたので、この問題はその儘にして潮州に出發してしまつたが、歸つて見ると、戸川師の顔がきいたのか警察局長に手を廻したのが功を奏したのか主人は五十萬圓が五萬圓に、尙師の交渉の結果二萬五千圓で許され保釋されたとの事である。

本人が戸川師に禮に來た時の話では、もう料理屋もやれない。お蔭で今まで金もためて居るからさしづめ食ふに困る様なことはないし、子供も中學を出て廣東で勤めてから前途に不安はない、どうか安心して下さいとの報告があつた。戸川師の名刺一枚が、又盡力がかくも靦面に功を奏する程潜んだ力を持つてゐるのである。と同時に中國の社會生活の一面と官吏道の一断面を見ることが出来ると思ふ。

潮州慰靈祭

六月十一日 今日是小松部隊長の贈入りで、開元寺大雄殿に於て日華陣歿將兵の合同慰靈祭を行ふ。當地特有の大花環や御供物が各要人及邦人商社から會場狭きまで運び込まれる。

本尊阿彌陀佛の御前に飾られた祭壇には兩界曼荼羅に、西田中尉以下三〇一柱の位牌と大東亞戰完途並に恭しく平和請來を希求する掛軸が掛けられる。

今日は廣東から南支派遣軍最高指揮官田中中將閣下が巡視の途次（午後の巡視が早められ十一時には來潮されその足で）會場にお出でになり焼香下さるといふので、十時にバスを買ひ切りで汕頭から陳天助さん及び二十餘名の女居士達が到着するのを待つて十一時には法要開始、例の如く女居士の散華對揚終つて日華合同にて光言行道法要中小松部隊長を先導に閣下は幕僚を從へて焼香をされる、警備隊から忙しい中を各階級代表者、官民代表者等多數參列十二時三十分嚴肅裡に法要終了。

何縣長宅の午餐會もそこ／＼に、又居留民の人達の招待會も極力辭退して荷物を取り纏め、自動車が約東の時間だといつて八釜數く催促するので慌しく一同バスに乗り込み二時潮州を發し、四時近き頃懐しい同平路に歸つた。

汕頭出帆

船が入港してゐる事を聞き、戸川師は休む暇もなく遮二無二八方交渉して歩かれたが、コレラ發生のため檢便が嚴重で何としても萬策盡きた、何卒諦めて貰ひたいとの事、みす／＼船を見てゐながら機會を逸するのは残念と、田中、杉本の兩名で兵團司令部に手塚高級副官を訪ねて、只管懇願諒解を求めたもの、前以て軍便乗船者として手續はとつてあるが、確答を得た譯ではないから飲みこめるまでは何處までも懇請しなくてはならぬ。

東亞海運事務所係員に或ひは同支店長を外馬路の自宅に訪ねて相談した、軍便乗者は阿部隊に行つて打合せられたしとの事、直ちに廣州路の隊に取つて歸り、事務室に多忙の隊長を訪ひお願ひしたる處、最初は檢便の時間を經過し、方法がないと言はれて居たが段々お願ひすると軍の爲めに慰問され、現地廻向される老大僧正の御苦勞を察せられ、自ら自動車を選轉して檢便に派遣されてゐる野呂軍醫中尉の宿舎に杉本を同道、既に平服に換えられたる中尉を説かれ、我々に代つて懇願して下さつた。本當に親切な將校である。軍醫さんもすつかり諒解され進んで、それなら特別を以て我々の宿舎まで行つて檢便してあげやうと言はれる。乗船が出来ないのは檢便が出来ないからであるといふ根本の難問題が關係官の同情によつて解決した譯で、この時ばかりは骨は折れたが本當に嬉しかつた。

杉本がこの交渉に歩いてゐる留守中に兵團からは船室の都合つかず電話で斷つて來た。と陳天助氏からの傳言があつたので、一同は萎れ返つてゐる。折角の奔走も水泡に歸したかとガツカリした。然し檢便はとにかくやつて頂き皆の元氣をつけ志氣を鼓舞する。然しそういうものゝ一晩中一睡も出来なかつた。

この夜急遽明早朝我等の出發を聞いて會員達は名残を惜しみ代るゝ挨拶に來る、銘々に土産物を贈呈されるので恐縮の連続であつた。

六月十二日 こゝで頑張らなければならぬと自らを勵まし、皆には出發の用意をして頂き、軍司令部に行かうとしてゐると、陳天助氏から使ひが來て唯今軍司令部から電話があつて「阿部隊との諒解が出来たなら便乗して良い」との事、左の一片の紙を得る爲めに非常に苦心した譯である。寫し左の通り

これでホツとした、直ちに杉本は車を馳せ一同を代表して軍司令部に至り、滞在間の厚情を謝し併せて便乗の禮を述べらる。この日兵團では南支最高指揮官が廣東に歸られるので皆留守なりしを以て、係りの山田伍長に傳言を依頼し急ぎ軍

檢便證明書

昭和十八年六月十二日

佐々木教純以下八名

昭和十八年六月十日第一回

昭和十八年六月十一日第二回

右檢便實施スルモ陰性ナル事證明ス

昭和十八年六月十二日

第十九旅團司令部附

陸軍々醫中尉 野呂 隆

は頭が下る。

會員達は貌下や我々に對し五体投地の三禮をする、愈々時間が來て我々が發動船に乗つて本船に向ひ、浪をけつて行くのをいつまでもく／＼ハンケチを振つて見送つて別れを惜しんでゐた。僅かに三週間の滞在であつたが、心から師と仰ぎ、弟子と許した親身の交際であつた丈に涙をさえ誘はれるのであつた。中にも故高岡隆瑞師の娘榮子さんが唯一人華人の間に交つて涙をハンケチで押へてゐられたのには感深いものがあつた。

見送りのため領事館から署長さんや森部長がお出でになり、懇切なる御注意などして下さる。阿部隊長は忙しそうに本船まで來られ指揮打合せをされてゐた。本船まで見送られた領事館の人々も出帆間近になつたので引揚げて行かれたが、熱血漢森部長は船べりに立つていつ迄もく／＼帽子を打振つて居られた姿が焼付けられる様に眼底に残る。

潮州に比して汕頭は確かに近代的文化都市と言へやう。本船〇〇丸から見ると洋風建築が綠樹地帯に斷然光つて見え

埠頭に向ふ。到着すれば早一同も乗り込まれてゐる。

我々の出發が確定したのは今朝來の事であつた爲め、密教會として會員にも充分の連絡も取れず盛大にお見送りができなくて申譯がないといつてゐたがそれからく／＼と傳へ聞いて四、五十人の會員が埠頭に押しかけて來る。軍でも前例のない事であるが特に隊長から入場を許され、中國人達はニコ／＼と隊伍を整へて入場する。兵隊さんも驚いてゐた。それにしても阿部隊長の御親切に

る。遙かに汕頭の護り飛行場のあたり日本人墓地に回向をなしお別れをする。今日行かうか、昨日行かうかと云つて居た對岸の礮石見物も忙しい儘に見物もせず船中から奇岩珍石に別れをした。

「さようなら汕頭」感慨を罩めて、邦人にも華人にも榮光あれ。彼等の生活が一日も早く正常に歸らん事を祈りつゝ、欄干に身を寄せるのであつた。

六月十三日 夜中の十二時頃危険區域を航行するそうである。二時頃右手に香港の燈を見ながらぐんぐん船は廣東に急ぐ、そのころ懐しの北斗星を仰ぎ、南十字星を眺めた。暑くて眠れぬ儘にデッキに出て田中師と共に過ぎ來し方四方山の話に耽つた。身体が冷えるのに氣が付き船室に歸る。

朝六時兩岸も愈々迫つて來て目的地近くなつた事を知る。黃埔を通過する頃は無風状態に入り暑さ益々募り、蒸し風呂に入つたやうになる。汕頭はコレラ指定地とあつて特別扱をされ嫌な検便も了つて明日の上陸を待つばかり、夕食後暑さのため船室に居たたまらず、乗客は皆甲板に出て來る。我々一同も夜半迄一ヶ所に集つて話に花が咲く。

こんな寝苦しい晩は始めてである。貌下も流石に參つてしまはれ一同の仲間入りをされる。我々の仲間が一番暑がりやの中師の苦しがりやうは見居られない位だ。

廣東上陸

六月十四日 檢便の結果に依つては上陸が早められるかも知れぬといふ情報が傳つて來る。儚ない望みをかけて軍の指令を待つ。朝の珠江には蛋族(水に生れ水に生きる陸には絶対に上らぬ民族)は夜明けを待たず無数の小さな舟を操り流れの儘に魚をとつてゐる。小さな舟ではあるが何れも子供が二三人は乗つてゐる。

そこへ死体が流れて來る。汕頭では乞食や餓○人をあきる程見、今又川では土左衛門を見る。我々は死といふ事實に對しては嚴肅敬虔なる態度を以て見るけれども彼等にとつては日常茶飯事である。

晝近くなつて十四時上陸が確定した。暑さに茹つた船客一同は救はれた氣持であつた。晝食の後上陸のため手廻り品の整理をし、迎ひのランチを待つ、五時少し過ぐる頃廣東即ち廣州市に入る。川沿ひに發展した堂々たる近代都市である。到る處破壊された大建築は遙かに戰の跡を偲ばせる。

埠頭に着けば、荷物の検査を受けるので汗汗である。我々は幸ひ憲兵さんの特別の計ひでスル／＼と通過し松原ホテルの番頭さんの案内で宿に急ぐ、この番頭さんは先回香港に渡つた時松原ホテルに居た人であつた。

先づ旅装を解き日本風の立派な風呂に入り、汗と垢を落した時は蘇生の思ひをした。夕食は又純日本式の配膳、豪華な建物で至れり盡せりの生活である、戦後經營に勵む地區に投宿して居るとは思はれない。

戸川師の電話にて六榕寺鐵禪和尚の秘書謝爲何氏、平岡貞さんの子息祐康さんの訪問を受け明日の日程を協議す。

解行精舍

六月十五日 朝からカン／＼照り付けて今日も暑くなりそうである。昨夜は暑苦しいのとベッドが變つたので少しも眠れなかつた。頭がぼんやりしてしまふ。朝食早々平岡さんのお迎えをうけ自動車二台に分乗、先づ六榕寺の一角にある密教會所屬の本堂、護摩堂、解行精舍(會員達ちの練成道場)等を見る。極めて壯大なるものではないが修行道場として一塵整つてゐる。民國廿一年に胡漢民氏の建つる處の眞言宗居士林は之である。即ち戸川師の廣東に於ける本據は此處

であるが、汕頭から足が抜けず、僅かに本年二月來つて所屬を明かにしただけであつて何等の手が加えられてゐない。今は留守居番の居士が寂しく之を護つてゐるに過ぎない。世間からは忘れられた如く、顧みるものすらない。唯密教運動を起す根城があるといふだけで、まだ何等働きかけてゐない。かゝる堂宇を造つた往時（と云ふてもそんな昔ではなし）の盛況を思へば早く戸川師なり、他の適任者の法鉢が下されて荒れはてゝゐる廣東の精神界に生命力を吹き込まれん事を切に望む。廣東密教運動の興亡は正に今である、この秋この際手を入れなければ再び立ち上る事は困難である事を痛感するのである。

本堂には創立當初の發願主王弘願、汪彦平（現汪主席の叔父さんに當る人である）氏の寫眞を飾り戸川師の事務所兼控室には懐しい權田親下の寫眞が安置し、本堂、護摩堂共に香華供養怠らず行き届いてゐた。

それは留守居の人の眞面目を語るものであつて、之を護持するに戸川師から充分なる支給がないやうにも聞いてゐる。留守居の厚意によつて漸く維持してゐるといふ所であらう。悲哀を感じざるを得ない。

この日弘法大師降誕會を祝つて旅先のこととて心ばかりの廻向をなす。

廣東現地廻向

六榕寺の見學はそこ／＼に親下、田中、戸川、杉本の四名にて總領事館に至る。總領事は上京され留守のため副領事と面會、今後の開教上の事につき打合せをなす。領事館としての希望は「現在先着の各宗僧侶とシツクリ手を組んでやつて貰ひたい、各宗別々にある事はよくない。互に日本臣民であり、國家として共に希う處は大東亞の建設といふ事以外にはない。その手段として佛者は佛者として、日華親善の爲め挺身職域に於て奉公して頂く譯である。

中國人は非常に敏感であるから、日本の佛者が互に一丸となつて居ないと、スグ腹を見透かされるから、是非佛者は

飽くまでも仲よく團結してこの方針を休してやつて頂きたい。」との事であつた。

當方よりは來廣の目的たる皇軍慰問及現地廻向及び渡香の盡力等依頼すれば、全て快諾され直ちに電話を以て軍司令部に連絡されたる處最高指揮官が直ぐ面會するとの傳言、車を馳せて司令部に至れば職員文吉高級副官は懇切に事情聴取の上、閣下の許に案内される。部屋に至れば閣下はいとも慇懃に頭を下げ親下をお迎え下さるのに恐縮した程である。

閣下は平素宗教、文化による日華親善に心を用ひて居らるゝと聽く。面談中にも頻りに宗教運動についての御意見が出る、僅かの會談ではあつたが識見の高く深きを知る事が出来るのであつた。

今までも幾多軍人に御遭ひしたが、宗教運動に理解を持たれ心から親しきをもつてお話しくださつた方は餘りなかつた。然るに閣下の如きは如何にも勇將の反面に文化人としての閣下が躍如としてゐる事を知り一同心強さを感じたのであつた。

その時のお話「中國を賣り、東亞の敵である蔣政權の要人たちは殆んどクリシチャンである」。

従つて過去何千年間榮えた佛教は爲めに大弾壓を受けて、手も足も出なかつた。近代支那の發祥の地であり、中國の代表的最尖端に行く廣東は何としても佛教の異常なる努力によつて復古せしめ、開拓によつて新らしき東亞の建設を計らねばならぬ」と力説されたのである。

公務のお邪魔になる事を懼れて辭し、職員高級副官の案内にて東、西本願寺に奉安しある英靈の回向に向ふ。先づ兩本願寺に至り親下を導師として靈前に額き、理趣經を讀誦し至心に回向すれば感慨無量〇〇中尉の遺品が靈前に安置しあるのも涙を誘う種であつた。

南支密教と平岡さん

・回向了つて平岡祐康さんの御案内で「大三元」廣東隨一の料亭に招待され、世界一味覺の王座を占むると言ふ廣東料理の供養に預る。忘れ得られぬ美味で、久し振りに餘りの満腹に口もきくもだるい位であつた。それにしても我々は何たる幸福であらう。平岡さんは近々商用の爲め飛行機で東京へ行かれるといふお忙しい中を何くれとお世話下さる。

平岡さんとは父子二代に亘つて久しい間の不思議の御縁で結ばれ、信仰を異にしてゐながら眞言宗として南支に出かけ、事をする度に非常なお世話になる。

これ皆私を捨て、國家につくすといふ一貫した信念に結ばれてゐるからである。

平岡さんのお骨折で明日の九時には香港行の船に何の心配なしに乗れる事になつた。四時から六榕寺鐵禪和尚の秘書謝爲何さんの案内で星月菩提樹の念珠を求めに町に出る。歸途名所五百羅漢の拜觀に行く。羅漢様は等身大で立派に飾られその中にマルコポーロや日本の尊い御身を以て支那に渡られたといふ心勝覺尊者が安置してあつたが、或は眞如親王様ではなからうかと思はれた。路次を抜けた時に黒檀細工の店が軒並に工作してゐたが驚き且羨ましく思つた。

廣東雜感

こゝでは滞在日数が僅か二日で、然も次に／＼仕事に追はれてゐたのでよく觀察する事も出来なかつたが、とに角市街が極めて近代的大都市である事と食べ物が非常に美味かつた事と。

密教會が六榕寺の一角に寄寓してゐるため又常在する責任者がないので。充分に驕足を（と言ふよりは、停止状態にある）延ばし切らずにゐる。即ち設備が眠つてゐる事を感じ、思想戰慄なるこの秋にこの儘放任して置く事は憚びない事を痛感した。

開教の根本方策

單に開教といふが、その内容とするものは人智を開發し、民心の安定に寄與し、信仰を同じくする兩民族が固く結ばれ、親善の礎石を深く打ち込まれるといふ深い意義を有する事を考へたならば、一人宗教團體の思ひ／＼の行動に委せて置いて良いものであらうか。

私はそれが宗教者のみに負はされ、或は與へられたる分野であるとは考へ得られない。

國家的に支援を與へ、統制を持ち、強力なる組織下に／＼推進されねばならぬものと信ずる。まして内地の各宗が世間態を造る爲に又は軍の氣嫌をとるためにやつてゐるなど、考へる人があるならば、それは大いなる誤謬であり、眞實の事態を知らざる獨斷といはねばならない。

内外地を問はずこの獨斷に墜ち頑として譲らない人が多々ある様に見受けるが、私共の悲しみであるばかりでなく、一兩國民族の悲しみであつて共に東亞の大なる損失である事を敢て叫ぶものである。

事態を見つめ、心の耳を開き、之を聴き、之を達觀し、覺醒して進んで訂正して頂かねばならぬ。

今此處では、既に或程度の形を整へ、邦人も多く、寧ろ内地よりも氣樂にやつてゐる開教所なり。〇〇別院などいつて暢氣にやつてゐる様なものを論じてゐるのではない。

彼の地にあつて精神教化運動として眞面目に研究もし、實行されつゝある面をいふのである。

由來支那人は人から押し附けられたり、世話をやかれる事を極端に嫌う民族である。之に反し自己の欲するものには水火をも辭せず追求する性格を持つてゐる。

例へば今回我々が南支一帯の主要都市に於て眞言宗の大事である「灌頂」を修行したが、多數の中國人特に軍、官、智識階級、然も青壯年の人々の入壇受法を見たが、それらの人々は悉く弟子となつたのであつて、その時に敵地區からも命を賭して入壇し、又遙々然も態々西貢の華僑が數十日の日子を費して入壇してゐたのを見ても、彼等が自らの欲する處には驀らに突進むといふ性格を持つてゐる事を認めざるを得ない。

我々としては民衆の間に求められてゐる。この密教を國家的に如何に生かすかを研究しなければならぬ。茲に愚見を記して見やう。

一、先づ中國の密教を興隆せんとするには我々としては眞言宗といふ小さな宗我を（國家から見る時は）捨てなければならぬ。

來る日も〳〵艱難の連続下に、全く第一線將兵と同じく命を的にして開教に従事してゐる人々には、寸時の儉安も快樂も慰安もないのであつて、若し不幸にして事あらば、宗派の少しばかりの保償はあるにしても、國家的にも社會的にも彼等を頼む何物も無いのである。

内外地を巡して、軍人にも官途に就いてゐる人々にも随分多く接したが中に多くの人々は佛教開教の振はざるを嘆ずる。理解ある人で激勵し、中には坊主共現地の足手纏ひになつて醜を外地に晒すなどといつて論難攻撃する者すらある。中にはそうした悪い開教師があつたかも知れぬ。然し私は世間の人々が眞剣に開教について考へた事があるであらうか

と疑はざるを得ないのである。何かの機会に思ひつきで語り合ふ位であつて、この事は今までは少くとも世間の人にとつては他人事であつて、どうでも良い問題であつたのである。

然し事は大東亞の建設が出来るか出来ないか掛つてゐる事を思へば、無責任なる批判や、茶話として放つて置けな問題である。

一、又目的を明かにすべきであつて、眞言宗を弘めるのであるか、中國人を救ひ、中國の密教を興すのであるかを明瞭にし、それによつて運動の根本が決定するのである。中國人は日本の眞言宗を弘められるならばまづお断りであるといふであらう。（立場をかへて考へれば良く解るのである）依つて中國人を救ふ事を目的として考へ、實行せねばならぬ事は自明の理である。

一、宗教が軍、官に依存してゐる様な事では眞の活動は出来ない。よろしく開教者は裸になつて彼等の眞只中に飛び込み死中に活を求めるの意氣を以て事に當るべきである。

一、人は徒に米英キリスト教の物の開教即ち學校、病院を建て、職業を興へて僅々十數年にして全支の八割を風靡した開教を讃える。だが然しそれは何ぞ知らん、一皮むけば彼等資本主義、自由主義、個人主義の國家開拓の第一線であつたのである。

故に教會のある處、信徒の居る處は後から〳〵商人が、資本家が入り込んで支那を蝕ばみ遂に中國をして中風状態に陥らしめたのである。この恐るべき彼等の傳道方式を眞似る事を我々は慎まねばならぬ。然れども大いに研究し、之を取捨し精神開發に於ける點に於ては参考とすべきである。

彼等歐米人は單に傳道會社などといつて居るものゝ決してそれは個人でもなく、宗教團体のみでやつてゐるのではな

い。その背後には國家が、ユダヤが爪を磨いでゐたのである。此處に注目をせねばならぬ。

私は我々の開教に然く軍、官が後援せよといふのではない。現状如何に苦しい立場にあらうとも、泣きごとをいつたり、哀願するものではない。我々は佛教僧であると共に皇國日本の民である、種々な困難に遭遇しつゝも今まで結構やつてのけてゐるのだ。それを捉へて規模が小さいの、成績があらぬの、無力であるのといふ事はいふ方が無理ではなからうか。然らば悪口をつく人が開教に對してどれだけか未だ寡聞にして聞いた事がない。それよりも悪口をいつてゐる間に、大東亞に即した日本の開教、眞に中國を救う開教を樹立し、早急に之を實行に移さねばならぬ。時流は刻々急速に進展し、我等の逡巡を許さない。信する處に向つて強力に邁進すべきである。

廣東よ！さらば

六月十六日 早朝出發するといふので昨夜運くまで荷物の整理をなし、東京に出す便りを十二時過ぎまでかゝつて、平岡さんが飛行機で近々東京に發たれるといふ事だから張り切つて教學新聞に寄せる通信も書いた。

七時には朝食も済まし、八時（といへば南支では早朝である）には内河運營の埠頭から香港に向ふ。水に明け暮れる、大廣東の景色に別れを告げて船中の人となり。内河の平和な航行に一路香港到着を待つ。

一度通過して見覚えのある虎門要塞、ト！チカ、黄埔と進路をとつて赤く濁つた珠江から解放されて、水の色も澄むに従つて海も廣々と氣持が良い。内河運營の船は毎日一回香港、廣東間を連絡するだけあつて遊覽船は設備も良く乗心地が良い。見送りには平岡さんの顔が見えず代理に番頭さんの大熊さんが来て、主人は今朝六時に東京へ飛行機で發たれたといふ。飛行機も船も今の戦時下では發つ瞬間までは乗る方にさえ知らさないのが立前となつてゐる。一生懸命に

書いた便りも水泡に歸した譯である。

出帆して間もなく雲行き悪く霧雨頻りに、香港近くなつて本格的の降雨となる。

雨に霞み香港島が近くなつても確認する事すら出来ない。埠頭近くなつて始めて香港の市街を眼前に見るといふ位であつた。

香港 入 港

既に埠頭には平岡夫妻（お子さんを連れて）待つてゐられる。居士連も数人頻りに船に向つて禮拜してゐる。

上陸直ちに平岡さんの案内で松原ホテルに入る。戦争前の松原ホテルと異り。——戦前の松原ホテルは謂はゞ街の一隅にあつた邦人相手の一旅舎であつたが、香港が皇土となつた今日では、敵産を譲り受けて堂々大ホテルに飛躍したのである。

ボーイの案内で部屋へ入つても身の置き處もない位立派である、日本人として簡粗な生活に慣れた我々には、歐米人の構創に成る生活様式に急に切り換えるのは中々困難な事である。戸川師だけは居士林との打合せやら準備もあり居士林に行つて泊る事に決定。一同はホテルに泊る事になる。全てが洋式で面喰ひ、バスを用ひるにも、食事をするにも、起居振舞に勝手が違ひ、豪華生活は窮屈の上もない。

カーテン、テーブル、椅子、洋服ダンス、ベッド部屋の隅々までも悉く英人好みに眩ゆいばかり贅を盡して設備されてゐる。

その中にボツンと私達のやうな謂はば田舎者が入れられたのだから面喰ふ譯である。喜劇の主人公の様なものだ。自

分ながらおかしく笑ひがこみ上げて来るのである。

部屋などの品を見ても、窓から街を見、山を見ても、皇國の威力、平岡さんの言葉を借りるならば正に「大稜威」の廣大なるをヒシ／＼と感ずるのであつた。

然しながら我々はこの輝かしい結果に到達するまでには幾多同胞の血と汗と犠牲とによつて戦ひとられたる事を片時も忘れては相ならぬ。

この贅澤な生活に觸れた時に却つて私の胸には熱いものが身體中に走り身の引しまるのを感じるのである。

申譯がない。有難い！唯それだけである。

何人が十年以前に香港をシンガポールを我が領土とする事を考へ得たであらう。彼等の百年の施設をそつくりその儘我ものとして使用し得るとは、この戦果を眼の當りに見て、直接身に感じ、我等はこの戦果を飽くまでも守り通し、進んで大東亞の建設を堅く／＼誓うのであつた。

六月十七日 朝起きて市街の様子を見ると、戦争による被害は市街地には殆んど及んで居ない。以前と同じく二階の電車は走り英人の影は見えないが住民は悠然として店を開き、人の足も股賑を極めてゐる。その中にも戦後の疲れは掩ひ隠す事が出来ない。戸川、田中兩師は平岡さんの案内で軍、官諸方面に挨拶廻りに出かける。

貌下も晝食後兩師及び平岡、櫻井鐵次郎老人（昔から在留邦人間の名物男で人の世話は何處迄もするといふ奇篤な人で、四十何年間も當地に居住する元老である）と共に磯谷總督閣下を訪問し入香の挨拶をされ、上海行き乗船方を御依頼せし處快諾され、直々係の方を呼ばれば最近の便船に乗れるやうに取計らへと命令を下されたとの事である。乗船には度々懲りてゐる我々はこの事を心配してゐたので、右の首尾を伺ひ大いに慶ぶ。依つて安心して一同貌下の御件をし

て居士林に至り、男女居士林道場で法樂を献ぐ。

香港居士林

男居士林は戦禍を受けてゐないが、女居士林は庭前に爆彈落下し。建物も相當痛み、その復興には一萬三千餘圓も要するといふ事である。

現在居士達は熱心なる中心人物を失ひ、戦後四分五裂となり、財力のある者は殆んどなく維持すら困難を來し、復興などは及びもつかず、本山の強力なる援助を待つてゐる。

密教會に就ては總督府に於ても考慮され殊に中尾高級副官などは戸川師を極力支持されてゐるから、戸川師でも腰をすえ本腰になつて開教を始め復興も緒についたならば急速に成果があがる事であらう。また／＼香港が南支南方據點として面目を新にし、休容を整へるには前途遼遠なるものがある。

總督部の厚意

平岡さんの盡力があつたとはいへ、中尾高級副官は特に我々の入香に當つて厚意を寄せられ、滞在間の食料として、白米一俵、味噌三貫匁、燈火用食料油一斗（居士林は戦後被害を蒙つた儘電氣もつかず、水道も停止されてゐるので）の支給があつた。

これは特別のお計ひであり、我々は恩賜の品々によつて生活する譯である。感奮興起して一層努力せねばならぬと感激を新にし、心に誓ふのであつた。

灌頂をするにしても全て本山の出費を待つ位だから彼等の經濟狀態は推して知るべきである。居士林の本尊様に對する法樂が（挨拶）濟み、女居士達の手製料理にて歡迎のお茶の會が開かれた。

歡迎詞

維

昭和十八年六月十七日

大日本眞言宗大本山護國寺管主

佐佐木教純大僧正偕同 僧正等駐錫香港

宏揚密教兩林道侶生歡喜心薄具茶點謹以至誠上歡迎詞曰

我國密教 久已陵夷 乙眞居士 惘然憫之 東渡求法 權田祖師 授以兩部 大法而歸 兩林建立 密燈光輝 自師入滅 繼續無人 受誠灌頂 事遂中輟 今護國寺 純大僧正 偕同法侶 振錫香江 宏揚大法 重振密宗 兩林弟子 歡喜相同 惟願法師 久住香港 開灌頂會 澤被港僑 超度幽魂 往生淨域 大施法力 世界和平 度盡衆生 皆成佛道 香港佛教眞言宗男居士林 邵蔚明等謹上

集る者一同祝下に對して五体投地の禮拜をなす。之を始めて見る現地派遣の新聞記者や、櫻井老人は驚いてゐられた。その席上で十九日午前九時から三昧耶戒、午後より結緣灌頂を行ふ旨發表されて居士達は大喜び。因に香港居士林にては先日來我々の入香が決定せらるゝや（六月十三日來頻々）新聞に廣告して同信の士の灌頂入壇を勸めてゐたのである。次の如し

香港佛教眞言宗男女居士林啓事

啓者大日本眞言宗大本山護國寺 主

佐佐木教純大僧正偕同僧正法人不日來港宏揚密教並舉行灌頂法會以本林爲灌頂壇場之所各位男女善信如欲參加灌頂者請早日報名爲荷

報名處

• 大坑光明台居士林
• 灣仔軒里詩道東方小祇園
中大正通（堅道）小祇園

（華僑日報六月十五日）

日高僧將來港灌頂傳法

日本眞言宗、大本山護國寺管主教純大僧正、偕同高僧七人、不日來港、在大坑光明台居士林設壇灌頂傳法、凡有信者可報名加入云。（華僑日報六月十三日）

日高僧一批將來本港在居士林灌頂傳法

香港佛教眞言宗男女居士林、自黎乙眞居士林於民國十四年東渡求法、於權田雷斧大僧正得金剛胎藏兩部大法、乃晉職傳法大阿闍梨位、返港後、遂立男女兩居士林於大坑光明台、爲宏揚密教之場所、自中國有史以來、實開居士之第一座叢林、歷年傳法灌頂、遠近往歸依求法者、甚爲多衆、自黎居士圓寂後、灌頂傳法遂告中輟、頃悉日本眞言宗大本山護國寺管主教純大僧正、偕同高僧七人、不日來港、在居士林設壇灌頂傳法、凡有信心者、皆可報名參加云。（香港島日報六月十三日）

今日からは祝下と田中師だけは對外關係を考慮し、松原ホテルに泊り殘餘の者は男居士林に起居する事に決定する。

中國巡錫團一行來香、皇軍慰問、追悼會を行ふ

眞言宗大本山護國寺貫主大僧正佐々木教純師ほか隨員六名の「中華民國巡錫團」一行は十六日廣東から來香した、一行は去る五月十七日東京を出發し台灣、汕頭、廣東で皇軍慰問、英靈追悼會、墓地參拜、中國人佛教信者に對する布教などをおこない來香したもので、香港でもけふ午前九時から戦死者および在香邦人物故者の墓參をなしその靈を弔ひ、



英靈に廻す

さらに十九日は午前十時から香港眞言宗居士林で灌頂會をおこなひ、さらに上海南京各地を巡錫する。なほ一行の氏名はつぎのごとくである。佐々木師は松原ホテル投宿、東京市小石川普羽護國寺貫主佐々木教純(大僧正)新潟縣西蒲原郡國上村國上寺住持山田鏡阿(僧正)護國寺執事田中恭盛(僧正)東京市下谷區中根岸町千手院住持中義乘(僧正)東京市淀橋區柏木圓照寺住持篠山明信(僧正)東京市四谷區若葉町東福院住持杉本良智(僧正)徳島市寺町源久寺住持岡村修雄(僧正)、(香

港日報十八日記事)

現地廻向

六月十八日 九時總督部から差廻しの自動車三臺に、一行及び櫻井老人、平岡氏夫妻、松原ホテル主人、娘美枝子さん都合十三人が分乗して香港島の現地廻向に出かける。



黎乙眞居士墓前にて

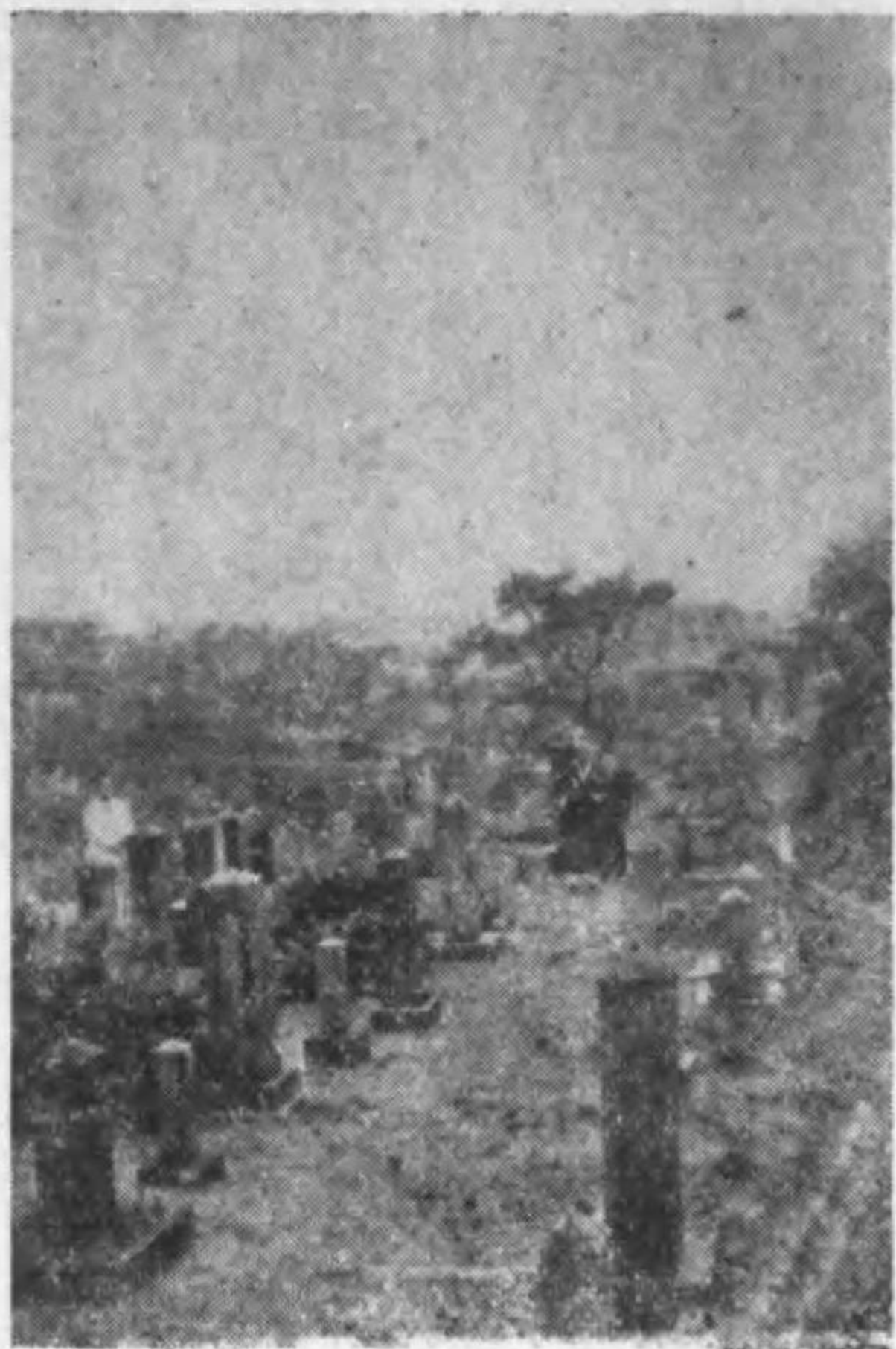
先づノースポイント(邦人は北角と言つてゐる)此處は昭和十六年十二月十八日に皇軍に依り美事敵前上陸された處であるが、九龍と香港島岬の扼する最も狭い處であり、九龍は手にとるが如く、科學兵器の進んだ彼等英人共が人智の人力の能ふ限りの防備を凝らしてゐた處へよくも大膽に泳ぎ切り上陸し、成功し得たものであると一同驚嘆するのみである。皇軍ならではと頭が下る。さぞかし犠牲も多からんと、案内せらるるまゝに草を分け山を攀ち尊き神兵の血を流し給へる跡を慕つて廻向せんとすれば、時々訪う人もあるのであらう。香や煙草を供へ、襪せ切らぬ色花の手向けられたるなど我等の心を明るく、頼母しさを感ぜしめる。

更に大古ドック前山腹、七姉妹附近、隠道に至れば地形愈々迫り、歩を進めるに従つて愈々激戦を想はしめる。巧妙なる山塞、トーチカ、果々として繰り上げられる處忠魂を祀る木牌の数は増して行く、胸一杯となつて讀經の聲もと切れる。激戦後滿一年七ヶ月も経過してゐるといふのに山合ひには敵兵の白○重なり合ひ、處構はず取り散らされ、壊れた鐵兜、防毒面、罐詰、日用品等でごたくしてゐる。トーチカといふトーチカ、兵舎といふ兵舎は悉く目茶苦茶に打ち壊されてゐる。

る。

中に懐しい故國のチューブ入り齒磨や、履きちぎられた跣足袋が風雨に曝された儘そちこちに散在してゐるのを見る時、その儘通り過す事は出来ない。一つ／＼を押し頂き心から感謝し勇士の冥福を祈るのであつた。

ニコル山頂に至れば〇〇部隊の激戦の後占領せられたる世紀に誇る光輝ある記録が大きな立看板に記録され、颯爽と



香港日本人墓地廻向

香港灣を眼下に見下してゐる。英軍は此山が陥ちた爲に投降の意を決したと言はれる位要害の地であり従つて彼我に交されたる激戦も想像に難くない。この攻略部隊には燦として感状が下された事勿論である。

この日途中不思議にも車中は車軸を流すやうな驟雨に見舞はれながら、廻向中は雨が止み雨に當らなかつたが神々に助けられたのであらう。

同乗した平岡夫妻やその他の人々はその不思議に感を深くされた。餐食後香港日報記者の訪問を

受け記念撮影、後日本人墓地に回向せんと車を飛ばしたる處豪雨に阻まれ競馬場構内から遙かに廻向し、黎乙眞居士の墓参に（舊香港灣の山上にある）雨を衝いて行く、天候恢復せしを以て歸途香港島を一周して再び日本人墓地に至り、非常に疲れ足も重かつたが勇氣を振つて一基々々香を供へて廻向した。

こゝで現下及随員の一族は海軍の慰靈祭に他の一族は居士林に灌頂の準備のために別れた。

灌頂修行

六月十九日 午前九時より男居士林に於て三昧耶戒を行ふ。正受者は歐陽亮といふ人で精進料理屋小祇園の主人である。平岡さんの奔走で同盟通信が宗教を通じて眞の日華親善の相を映畫として、大いに宣傳するといふので、張り切つてゐたが、生憎今日は寫眞班が休みで代つて寫眞ニュースと香港日報がバチ／＼と三昧耶戒の様子をカメラに収めて行く。

入壇者八十餘名、戦禍の後物心両面に相當の痛傷を受けて立ち直る暇もない香港で、あてのない一遍の新聞廣告でこれだけの人を集め得たといふ事は一應成功と言はねばなるまい。中國人の熱心さには敬服させられる。

前回來た時の戦々怖々たる氣持と今日の氣分とでは雲泥の差がある。先方から頼り切つて集つて來る中國人、そこには何等の不安もなく安心し切つて法要も勤まる。信頼し切つた世界と法悦境とが豁然と醸し出され、道場内にはさながらの「密嚴淨土」が展開せらるゝのみである。

これ全く御稜威の然らしむ處、皇軍將士の血の開拓のお蔭である。この事が建設工作の一分にもお役に立てば我等の本望である。

午後一時から結縁灌頂を女居士林に於て行ふ。今は中心人物黎氏未亡人張圓明さんも廣東に避難した儘歸香する事も許されず、女居士達も何となく活氣がない。前回來た時と異り黎さんの養女黎環瑤さんが眞ッ先に豆々しく働き手傳つて居られるのも氣の毒であつた。今では資産も収入もない彼女は苦しい中にふみ留まつて、ポツ／＼集つて來る會員の

世話をしたり、莊嚴に、或は建物の管理などに中々忙しい日を送つてゐる。

數年前激烈極まる排日一色の眞只中にふん張り通した彼等の意氣、宗教的情熱は今何處にありやといひたい位、彼等の心は萎靡衰頹してゐる。建物は壊れ、中心人物は歸らず、之を維持する資産とてない。現在の眞言宗居士林の姿は實に哀れなものである。

顧みるに油頭の密教會も概ねその基礎も固まつた事であるから、この南方基地たる當地に戸川師の一段の奮闘努力が加えられん事を切望して止まない。

本日の入壇者は八十餘名あつたが、甚だ失禮だがその中といふ人も無いやうである。唯一人、東區長が入壇された事は特筆すべきであらう。現在の會はそれ程寥々たるものである。

従つて會員も油頭程の熱もなく意氣も上らない。今にして活を入れなければ徒に整つた堂宇を持ちながら壊滅の一途を辿る外はあるまい。

佐々木大僧正を迎へ居士林の灌頂法會、きのふ日華の佛教交驛

銅羅灣區にある大坑光明台の眞言宗居士林では「中國巡錫團」の日本眞言宗大本山護國寺貫主大僧正佐々木教純師外隨員六名を迎へて灌頂大會が催された、午前九時先づ三昧耶戒の行が始まり熱心な華人信者百餘名が佛前に額づき、灌頂受法者は大僧正の前に坐して慈救眞言十萬遍の讀經のうちひたすら法悦にひたり最後に花を撒き金剛清水を頂きこゝに佛との縁結びをなし、かくて灌頂法會が終つたので佐々木大僧正は中國人善男善女に「佛教による日華親善の契となるやう」と力説し盛大な佛教交驛を行ひ午後五時和氣霧々裡に終つた。(香港日報記事)

本日の行事を以て戸川師の計畫された仕事は一應大團圓を遂げたのである、時に四時三十分！張り詰めた氣持が一

度に緩み、貌下はホテルに引揚げられる。皆はベッドにへた張り着いてしまつた。流石に連日の疲労は隠せない。

十九日の夜

南支に於ける豫定の日程はとに角成功の裡に大團圓を遂げた。一同の氣も輕やかだ。

硝子は飛び爆彈の跡生々しい、我々の宿舍居士林ではこの喜び、感激を表現する方法がない。

相變らずの女居士林から運ばれる彼女等の慣れない手料理に食卓を圍んで夕食を濟まし、各地を遍歴した灌頂の苦しかつた事、可笑しかつた事の發表會となる。天候は二三日來降り辯がつき、颱風氣味の雨が頻りに戸をたたく。この時始めて戸川師は開教に従事して以來の心境を吐露されたがあまりに尊い話であるから記す事にする。

「私は南支に渡つてからは二つの大きな力に護られて來た。一つは皇軍の赫赫たる戰果と威大なる國力であり。一つは二十年前權田大僧正に従つて渡支したといふ事である。權田貌下は日本よりも南支に、然も今正に中國人の心の中に生きて居られる。

この二つの嚴かなる事實が因となり私の僅かな努力が縁となつて開教の實が擧つてゐるのである。」と謙虛な態度で語られた。

この心持であればこそ、燃えるが如き護法心と又にじみ出る中國人に對する同情心、慈悲心があればこそメキ／＼と南支密教は驕足を延ばし、強化興隆されて行くのである威大なる事業の裏にこの哀しみありで、その蔭に又涙ぐましい情話が秘められてゐる事を思へば何人も御家族の上に惻隱の情を運ばれないものはなからう。この話は餘りにも人の生活の内面に觸れるので御遠慮しやうかと思つたが甚だ尊く又惜しいので敢て記す事にした。

戸川師の御師匠さんは高齡でもあり、又近來健康兎角勝れず、頻々と一度歸つて來いとの便りが来る。孝心深い師は一日として師匠の身の上を思はない日とてない。郷里に思ひを馳せつゝも仕事大事と今日まで歸國を延ばして居られるのである。

又「私は家庭を忘れ、人間的には全く悪魔となり切つてゐる。家の事は忘れやう／＼と努力してゐる。私とて一個の人間であるから、妻を思ひ子を思はない事はない、私は子供には全く申譯のない父である。密教の重興は自らも信じて求めた途であり、その重責を顧る秋、私事に拘つてゐる閑がないのである。私は時に煩惱と戦ひ苦しみ悩む事はあるがその時には御詠歌やお經を唱えて氣分の轉換を計り、新たな氣持を以てつき進んでゐる。」と

又戸川師は子供が五人もあるそうである。長男は近く大正大學を卒業し、次男は目下幼年學校受験に夢中になつてゐる。長女の身の上に就ては一人娘でもあり心配してゐる、更に末子は柏崎の驛に毎日四時になると（昨年師が歸郷された時柏崎に着いたのが四時であつたそうであるから）驛に出向きお父さんが汽車から降りやしないかと父の姿を憶れてゐるそうである。

こんな家庭内の事も師は奥さんに通信する事を堅く禁じてあるので奥さんからは一度も知らせて來た事はなく、寺務代理をしてゐる小川さんがたまりかねて知らせて來るそうである。

この話を聞き同じ位の子供を持つ私はたまりかねて席を立ちベッドに引き籠り胸を壓へ涙をソット拭いたのである。然も師はあらゆる苦惱に打ち克ち雄々しく開教に従事し、中國人から生き佛とし、日本人からは崇敬の的となつてゐる。

船 待

六月二十日 希望を繼いでゐた乗船出帆も駄目と決定し、次の目標は二十五日となりこれから五日間もある。この間を如何に暮すかは一同の頭を悩す種である。

朝から雨に悩まされ、晴れ間を見て一同松原ホテルに連絡がてら現下をお訪ねする。現下もこの船待ちに御心痛のやうである。田中師の苦衷も察せられる、十二時ホテルを辭し晝食をとる。

途々商店街を覗いたが、實に品物は豊富で内地では見られない物ばかりである。

五時から居士林主催の招待會があつた。参加する者は我々の外に平岡、櫻井の兩氏に男女居士だけであつて、今の居士林はそれ程寂しいものである。

二つのテーブルを圍んで宴に入る。居士代表から挨拶があり、例の如く澤山の精進料理が運ばれる。腹一杯で喰べ盡せぬ。七時閉會。夜は久し振りに（と言つても三十五年ぶり）にランプを圍んで旅行談に耽る。

昔の香港といつてもつい三年前は夜景で世界に知られた島であつた。この島で誰がランプの燈りの許で生活をする事を想像したであらう。

然るに今香港島にも、九龍にも僅かに點々と燈火を見るのみである。今昔の感に堪へない。我々のゐる居士林の如きは水道も無く、電氣もない（費用がなくて引けないのである）當地は幸ひ九時過ぎでなければ全く聞かないから比較的苦痛ではないが、火が點かぬといふ事は便利過ぎる生活をしてゐた我々にとつては随分つらい事である。昨夜からやつとランプも配給される。油が少いからといふので節約の意味で早く寝る事にする。ベッドに入つてから月の光りの